

開く落ち行く
路次途中

この事申し上ぐべき爲に参りて候。判官詞「是は眞にて有るか。ワキ詞」さん候。判官詞「口惜し
 や我幾ばくの難を逃れ、命を重んずる事も、朝敵の虚名を晴らさんそのためなり。それ
 に當山の衆徒夜討すべきを告げ知らする條、是偏へに天の御加護なり。とにかくに我は
 夜に入りこの所を開くべし。誰か一人留り防矢を射、その後命を全うして、路次にて追
 つ付くべき者やある。義盛計らひ候へ。ワキ詞「御説、畏つて承り候さりながら、某を始
 め皆いづくまでも御供とこそ存じ候べけれ。恐れながら誰にても召し出だされて、直に
 仰せ付けられよかすと存じ候。判官詞「それこそ我等が思ふ所なれ。さらば佐藤忠信を此方
 へと申し候へ。ワキ詞「畏つて候。如何にこの屋の内に忠信の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り
 候ぞ。ワキ詞「君よりの御使に義盛が参じて候。少し御用の事候へば、御参りあれとの御事
 にて候。シテ詞「畏つて候。ワキ詞「忠信参りて候。判官詞「いかに忠信、當山の者ども心變りし。
 今夜夜討すべき事一定のやうに申し候。とにかくに我は夜に入りこの所を開くべし。汝
 一人留り防矢を射、その後命を全うして、路次にてやがて追つ付き候へ。シテ詞「御説、畏

かまへて云々
義盛の詞と見る
べし

つて承り候ふさりながら、某が事は何處までも御供に召し俱せられ候ひて、餘人に仰
 せ付けられ候へ、若し辭し申す者あらば、この時御意をば背き申すまじく候。判官詞「いや
 汝を頼む上は、とかくの事はあるまじく候。シテ詞「御意をばいかで背くべき。しかも一人
 選まれ申し、防矢仕れとの御説、弓矢取つての面目なれば、忝うこそ候へとよさり
 ながら、我が君を始め奉り、諸皆人々に御名残こそ惜しう候へ。地謡「不覺の涙を抑へ
 て、御前を立つ。皆哀にぞ覺ゆる。かくては時刻移るとて、かくては時刻移るとて、我
 が君を始め奉り、門前を出でて間道より、ひそかに忍び出で給へば、シテ詞「忠信暫しは
 御供し、地謡「御暇申し留れば、かまへて命を全うして、御供に参らずは、不忠なるべし
 心得よと、涙を流させ給へば、忝しと忠信は、只ひとり留る心の、便も涙なるらん。
 便も涙なるらん。(中入)

立衆一聲謡「吉野川、水のまにく騒ぎ来て、波打ち寄する嵐かな。法師武者詞「いかにこの坊
 中へ案内申し候。シテ詞「今は夜更け人靜まるに、案内申さんとは如何なる者ぞ。法師詞「わり

中差一筋の眞中に差したる矢

眞向一額の眞中

諸膝一兩膝

なく頼朝よりの仰せに隨ひ、當山の者ども判官殿の御迎へに参りたり。とうく出でさせ給ふべし。申テ「あらはかぐしや忝くも我が君に思ひかゝらんとや。よし先づ軍のころみに、この矢一筋受けて見よと、地盤高檜に走り上り、高檜に走り上り、中差取つて打ち番ひ、よつ引いて放つ矢に、眞先かけたる武者數多、一矢にどうと轉べば、目を驚かし肝を消して、一度にどつとぞ響めたりける。刀を抜き持ちて、刀を抜き持ちて、弓手の脇より馬手の脇へ、一文字に切るとぞ見えしが、空腹切つて檜より、後の谷にぞ轉び落つ。敵の兵これを見て、寄れや者共首を取れと、一度にばつと寄り、打ち破り亂れ入り、をめき叫んで震動すれば、申テ「その隙に忠信は、地盤その隙に忠信は、かねて用意の小太刀おつ取り、ひそかに忍び出で、茨からたち、分けつ潜りつ慕ひ行くを、怪しむる者有りて、あれは如何にと呼ばはりかくれば、地に伏し隠れ、聞きを便に忍ばんとするを、遁すまじとて、走りかよつて拂ふと見えしが、眞向破られて二つになれば、つどく兵大太刀かさし、打つ太刀を受け流し、諸膝かけて切り放し通つて、

今はかうよと遙かの谷を、蝶鳥の如くに飛び翔り、蝶鳥の如くに飛び翔つて、都をさしてぞ急ぎける。

鳥帽子折

梗
金賣吉次信高弟吉六と共に奥州へ下らんとする所に、牛若丸鞍馬寺より下りて同行を求め、江州鏡の宿にて、鳥帽子折のもとに到りて左折の鳥帽子を折らしめ、その禮に刀を與ふ。鳥帽子折の妻なる者鎌田正清の妹とて、思ひも寄りぬ對面あり。やがて美濃の赤坂の宿に著く。時に熊坂長範の一黨夜討に來りしを、牛若散々に斬り廻りて、遂に長範をも討取るといふ筋也。前の熊坂と併せ見るべし。(五番目)

概

前シテ 鳥帽子屋亭主 後シテ 熊坂
前シテ 鳥帽子屋の妻 後ツレ 手下共(大勢)
子 方 牛若丸 ワ キ 三條の吉次
ワキツレ 弟吉六

レ次第 末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々と急ぐらん。ワキ詞「是は三條の吉次信高にて候。我この程數の寶を集め、弟にて候吉六を伴なひ、只今東へ下り候。如何に吉六、

高荷どもを集め東へ下らうするにて候。吉六詞「委細心得申し候。やがて御立ち有らうするにて候。

牛若詞「なうくあれなる旅人、奥へ御下り候はど御供申し候はん。ワキ詞「やすき間の御事にて候へども、御姿を見申せば、師匠の手を離れ給ひたる人と見え申して候程に、思ひも寄らぬ事にて候。牛若詞「いや我には父もなく母もなし。師匠の勘當蒙りたれば、只伴なひて行き給へ。ワキ詞「この上は辭退申すに及ばずして、この御笠を參らすれば、牛若詞「牛若この笠おつ取つて、今日ぞ始めて憂き旅に、地謡「粟田口松坂や。四の宮河原逢坂の、關路の駒の跡に立ちて、いつしか商人の、主従なるぞかなしき。上歌「薬屋の床の古、薬屋の床の古、都の外の憂き住まひ、さこそはと、今思ひ粟津の原を打過ぎて、駒もとどろと踏み鳴らし、勢田の長橋打ち渡り、野路の夕露守山の、下葉色照る日の影も、傾くに向ふ夕月夜、鏡の宿に著きにけり。鏡の宿に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、鏡の宿に著きて候。この所に御休みあらうするにて候。狂言シカ、牛若詞「只今の早打をよくよ

高荷・大荷物

栗田口・逢ふを言掛く

薬屋の床・蟬丸の故事

守山・漏るを言掛く

早打・早飛脚

東男—關東の田舎者

折りて—烏帽子を作ることを折るといふ

左折の烏帽子—烏帽子の頂を左へ折返すこと源氏は左折平氏は右折

く聞き候へば、我等が身の上にて候。この儘にては叶ふまじ。急ぎ髪を切り烏帽子を着、
 東男に身をやつして下らばやと思ひ候。如何にこの内へ案内申し候。誰にて渡
 り候ぞ。牛若「烏帽子の所望に参りて候。何と烏帽子の御所望と候や、夜中の事にて
 候程に、明日折りて参らせうするにて候。牛若「急ぎの旅にて候程に、今宵折りて賜はり
 候へ。申「誰さらば折りて参らせうするにて候。先づ此方へ御入り候へ。さて烏帽子は何
 番に折り候べき。牛若「三番の左折に折りて賜はり候へ。申「是は仰せにて候へども、そ
 れは源家の時にこそ。今は平家一統の世にて候程に、左折は思ひもよらぬ事にて候。
 牛若「仰せは尤にて候へども、思ふ子細の候間、只折りて賜り候へ。申「幼き人の御
 事にて候程に、折りて参らせうするにて候。この左折の烏帽子に付いて、嘉例めでたき
 物語の候、語つて聞かせ申さうするにて候。牛若「さらば御物語候へ。
 申「さて某が先祖にて候者は、元は三條烏丸に候ひしよな。いでその頃は八幡太
 郎義家、安倍の貞任宗任を御追伐あつて、程なく都に御上洛あり、某が先祖にて候者

なめめに—今の斜ならずの意

引出物—下され物元は馬を引き出して贈れるよりいふ

烏帽子櫻—櫻の名

三色組—白赤青の組緒

に、この左折の烏帽子を折らせられ、君に御出仕有りし時、帝なめめに思召し、その時
 の御恩賞に、奥陸奥國を賜つて候。我等もまたその如く、嘉例めでたき烏帽子折にて候
 へば、誰この烏帽子を召されて程なく御代に、地謡「出羽國の守か、陸奥の國の守にか、な
 らせ給はん御果報有つて、世に出で給はん時、祝言申し、烏帽子折と、召されて目出度
 う、引出物賜はせ給へや。あはれ何事も、昔なりけり御烏帽子の、左折のその盛、源平
 兩家の繁昌、花ならば梅と櫻木、四季ならば春秋、月雪の詠め何れぞと、争ひむにやい
 つの間に、保元のその以後は、平家一統の、代となりぬるぞ悲しき。よしそれとても報
 いあらば、世變り時來り、折知る烏帽子櫻の花、咲かん頃を待ち給へ。申「誰かやうに祝
 ひつと、地謡「程なく烏帽子折り立てて、花やかに三色組の、烏帽子懸緒取り出だし、氣
 高く結び濟まし、召されて御覽候へとて、御髪の上に打ち置き、立ち退きて見れば、あ
 つばれ御器量や、是ぞ弓矢の大將と申すとも不足よもあらじ。
 申「日本—烏帽子が似合ひ申して候。牛若「さらば此刀を参らせうするにて候。申「い

やいや烏帽子の代りは定まりて候程に、思ひもよらず候。牛若「只御取り候へ。シテ」さらば賜はらうするにて候。さこそ妻にて候もの悦び候はん。如何に渡り候か。ツ「何事にて候ぞ。シテ」幼き人の烏帽子の御所望と仰せ候程に、折りて参らせ候へば、この刀を賜はりて候。なんほう見事なる代りにてはなきか。よくく見候へ。あら不思議や、かやうの事をば天の與ふる事とは思ひ給はで、さめくと落涙は何事にて候ぞ。ツ「聾恥しや申さんとすれば言の葉より、まづ先だつは涙なり。クドキ今は何をか包むべき、是は野間の内海にて果て給ひし、鎌田兵衛正清の妹なり。常磐腹には三男、牛若子生れさせ給ひし時、頭の殿よりこの御腰の物を、御守刀にとて参らせ給ひし、その御使をば、わらは申してさむらふなり。痛はしや世が世にてましまさば、かく憂き目をば見まじきものを、あらあさましや候。

シテ「何と鎌田兵衛正清の妹と仰せ候か。ツレ」さん候。シテ「言語道断。この年月添ひ参らすれども、今ならでは承らす候。さてこの御腰の物をしかと見知り申されて

こんねんだう
古年刀にて古刀
の事かと云ふ

候か。ツレ「こんねんだうと申す御腰の物にて候。シテ」實にく承り及びたる御腰の物にて候。さては鞍馬の寺に御座候ひし、牛若殿にて御座候な。さあらば追つ付き、この御腰の物を参らせ候べし。おことも渡り候へ。や、いまだ是に御座候よ。是に女の候が、この御腰の物を見知りたる由申し候程に、召し上げられて賜はり候へ。牛若「不思議やな行くへも知らぬ田舎人の、我に情の深きぞや。シテ、ツレ」人違へならば御免しあれ、鞍馬の少人牛若君と、見奉りて候なり。牛若「實に今思ひ出だしたり。若し正清がゆかりの者か。ツレ」御目の程の賢さよ。わらはは鎌田が妹に、牛若「あこやの前か。ツレ」さん候。牛若「實に知るは理我こそは、地蔵身のなる果の牛若丸、人がひもなき今の身を、語れば主従と、知らるゝ事ぞ不思議なる。

ロンギ地蔵はや東雲も明け行けば、はや東雲も明け行けば、月も名残の影うつる、鏡の宿を立ち出づる。シテ、ツレ「痛はしの御事や。さしも名高き御身の、商人と伴ひて、旅を飾磨の徒歩跣足、目もあてられぬ御風情。牛若「時代に變る習ひとて、世のため身をば捨衣、

飾磨の徒歩一掃
州飾磨にて禡と
いふ染物を出す
よりかく言掛け
たり

白波—盜賊のこと

恨みと更に思はじ。シテ謡「東路の御はなむけと、思召され候へ」とて、地謡「この御腰の物を、強ひて參らせ上げければ、力なしとて請け取り、我若しも世に出づならば、思ひ知るべしさらばとて、商人と伴ひ憂き旅に、やつれはてたる美濃國、赤坂の宿に著きにけり。赤坂の宿に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、赤坂の宿に著きて候。如何に吉六、この所に宿を取り候へ。吉六詞「畏つて候。(中入)

ワキ詞「是は何と、仕り候べき。吉六詞「我等も是非を辨へず候。牛若詞「面々は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候、我等この所に泊り候を、このあたりの悪黨ども聞き付け、今夜夜討に討たうする山申し候程に、さやうの談合仕り候。牛若詞「縦ひ大勢ありとても、表にたよん兵を、五十騎ばかり切り伏すならば、やはか引かぬ事は候まじ。ワキ詞「是は頼もしき事を仰せ候ものかな。悉皆頼み候。牛若詞「面々は物の具して待ち給へ。謡「我は大手に向ふべしと、地謡「夕も過ぎて鞍馬山、夕も過ぎて鞍馬山、年月習ひし兵法の、術を今こそは、現し衣の妻戸を、開きて沖つ白波の、打入るを遅しと待ち居たり。打入るを遅しと待ち

松明の占手—松明を投げて首尾を占ふこと

居たり。

大勢一聲謡「寄せかけて、打つ白波の音高く、関を作つて騒ぎけり。シテ詞「如何に若者ども、ツレ詞「御前に候。シテ詞「大手がくわつと開けたるは、内の風ばし早いか。ツレ詞「さん候内の風早くして、或は討たれ、又は重手負ひたると申し候。シテ詞「不思議やな内には吉次兄弟ならでは有るまじきが、さて何者かある。ツレ詞「投松明の影より見候へば、年の程十二三ばかりなる幼き者、小太刀にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥の如くなる由申し候。シテ詞「さて摺針太郎兄弟は、ツレ詞「是は火振の親方として、一番に切つて入りしを、例の小男渡り合ひ、兄弟の者の細首を、只一打に打ち落したる由申し候。シテ詞「えい、何と何と。彼の者兄弟は、餘の者五十騎百騎には増さうするものを。謡「あゝ斬つたり、謡「彼奴は曲者よ。ツレ詞「高瀬の四郎は之を見て、今夜の夜討悪しかりなんとや思ひけん、手勢七十騎にて退いて歸りて候。シテ詞「きやつは今に始めぬ臆病者。さて松明の占手は如何に。ツレ詞「一の松明は切つて落し、二の松明は踏み消し、三は取つて投げ歸して候が、

あち物々しや
牛若の心中を語

大鳥歩み一
大股に歩くこと

三つが三つながら消えて候。シテ調「それこそ大事よ。夫松明の占手といつば、一の松明は軍神、二の松明は時の運、三は我等の命なるに、三つが三つながら消ゆるならば、今夜の夜討はさてよな。ッレ調「御説の如く、このまよにては鬼神にてもたまるまじく候。只退いて御歸り候へ。シテ調「實にく盗も命の有りてこそ。いざ退いて歸らう。ッレ調「尤もにて候。シテ調「いや熊坂の長範が、今夜の夜討を仕損じて、何くに面を向くべきぞ、諸只攻め入れや若者どもと、大音あけて呼ばはりけり。地謡「関を作つて切つて入りけり。地謡「あら物々しやおのれ等よ、あら物々しやおのれ等よ、先に手竝は知りつらん、それにも懲りず打入るか。八幡も御知見あれ、一人も助けてやらじものをと、小口に立つてぞ待ちかけたる。

地謡「熊坂の長範六十三、熊坂の長範六十三、今宵最後の夜討せんと、鐵屐を踏ん脱ぎ捨て、五尺三寸の太刀を、するりと抜いて打ちかたけ、大鳥歩みにゆらりと、歩み出でたる有様は、如何なる天魔鬼神も面を向くべき様ぞなき。

めだれ顔一見苦
しき意味

十方切一以下劍
術の法
三つ頭一きつみ
き
御曹司一牛若の
こと

二つになつて一
眞二つに斬られ
たること

地謡「あらはかぐしや盗人よ、あらはかぐしや盗人よ、めだれ顔なる夜討はするとも、我には叶はじめのをとて、透間あらせず切つてかよる。熊坂も大太刀使の曲者なれば、さそくをつかつて十方切、八方拂や腰車、破圮の返し、風まくり、劍降らしや獅子の齒がみ、紅葉重、花重、三つ頭より火を出だして、鎧を削つて戦ひしが、秘術を盡す大太刀も、御曹司の小太刀に切り立てられ、請太刀となつてぞ見えたりける。

地謡「打物業にて叶ふまじ、打物業にて叶ふまじ、組んで力の勝負せんとて、太刀投げ捨てて、大手を廣げて飛んでかよるを、背けて諸膝薙ぎ給へば、切られてかつばと轉びけるが、起き上らんとてつつ立つ所を、眞向よりも割りつけられて、一人と見えつる熊坂の長範も、二つになつてぞ失せにける。

大瓶狸々

梗 かうふうといふ酒賣る男の孝行なるをめでて、狸々多く現れ來り、汲めどもつきせぬ大瓶の酒泉を授けめでたく舞ひ納む。上卷の狸々に相似たり。(五番目一留)

シ テ 狸々(前は童子) 後ツレ 狸々
ワ キ かうふう

ワキ詞「是は唐かねきん山の麓に、かうふうと申す民にて候。我親に孝有るにより、次第に富貴の家と罷り成りて候。又この間何處とも知らず童子數多來り、某が酒を買ひ取り候。今日も來りて候はど、如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。シテ一聲謡「わたづみの、そことも知らぬ波間より、現れ出づる日影かな。ワキ詞「今日の市人は何とて遅く來り給ふぞ。シテ謡「嬉しやさらばと内に入り、誰いつもの酒を愛しけり。上歌地謡「琴詩酒と、聞くも隔てぬ友人の、聞くも隔てぬ友人の、いつも變らぬ酒功贊に、酒を愛せし來し方の

わたづみ一海のこと
市人一童子をさす
琴詩酒一白氏文集に之を三友と云へり
酒功贊一同書に

あり酒をはめたる文

人の心にひきかへて、是は琴にも盃、詩を作るにも盃、只酒飲の友ばかり。恥しやさこそけに、市人の我を笑ふらん。ワキ詞「この程は何處の人とも辨へず、今日は御名を名のり在しませ。シテ謡「今は何をか包むべき、是は潯陽の江に年久しき、狸々と云へる者なるが、御身親に孝有るにより、天の哀れみ深ければ、泉の壺を與へんなり。謡「疑ひ給ふなかうふうと、地謡「夕の空も近ければ、夕の空も近ければ、暇申してさらばとて、行くかと見ればさにぬりの、面も赤く様變りて、市人に立紛れて、跡も見えずなりにけり。跡をも見せずなりにけり。(中入)

さにぬり一丹塗

菊月一九月

菊の盃一重陽の嘉例

地謡「御酒と聞く、御酒と聞く、名も冷しく秋の來て、暖め酒と菊月の、頃も早紅葉の、早色づくか一重山、薄き紅葉は色々の、菊の盃、すゑ置き、秋の夜深く待ちけるに、ツレ二人謡「不思議やこの友の、地謡「不思議やこの友の、來らぬは覺束な、沖に向ひて我が友の、など遅なはり給ふぞや、急ぎ給へ友人。又狸々はあらはれ出でて、又狸々は現れ出でて、彼のかうふうに、妙なる泉を與へんとて、波間を分けて潯陽の江の、汀も近く現

菊の露云々拾遺集に「我宿の菊の白露り毎に幾世積りて淵とならん」と

れたり。地謡 頃は秋の夜月おもしろく、頃は秋の夜月おもしろく、汀の波も更け静まりて、
あまた 数多のしやうくたいい 狸々大瓶に上り、いづみ 泉の口を取るとぞ見えしが、わ 涌き上り涌き流れ、く 汲めども
汲めどもいづみ 盡きせぬ泉、たはむ 何れも戯れ舞ふとかや。(中ノ舞) シテ地謡 菊の露、つも 積りて盡きぬこの泉、
かへ 地謡 盡きせぬ宿に、シテ地謡 返し授け置き、お 地謡 是迄なりや、おひ 酔伏す夢の、さ 覺ると思へば又
おきあ 起上り、いのちながえ 命長柄の柄杓の酒を、だうやくなんに 道俗男女に残さず進め、もとの もとの泉に
いづ 何れも、あし 足もとはよろくと、くりごし 繰言茂く、せんしうはんざい 千秋萬歳君千代までと、せんしうはんざい 千秋萬歳君千代まで
さかうみよ と、榮る御代こそめでたけれ。

外八

外八

鶴龜

梗 一名月宮殿といふ。年の初めめでたき儀式に鶴龜の舞を
観覧ある事を作る。祝言の曲なり。朗詠集の長生殿裏春
概 秋宮不老門前日月遅の語意を前後に用ひたり。(協能)

シテ 皇帝 ワキ 大臣

青陽一春のこと
節會一朝廷にて
行はせらるる儀
式
庭の砂は以下
禁庭の莊嚴なる
形容金銀瑠璃碎
瑠璃瑠璃は七寶の
内

シテ、サシ地謡 夫れ青陽の春になれば、しき 四季の節會の事始、地謡 不老門にて日月の、ひかり ひかりを
てんし 天子の觀覧にて、シテ地謡 百官卿相に至るまで、そで 袖を連ね踵を接いで、地謡 その數一億
ひやくよじん 百餘人、シテ地謡 拜を進むる萬戸の聲、地謡 一同に拜するその音は、シテ地謡 天に響きて、
おびた 地謡 夥し。いさご 上庭の砂は金銀の、いさご 庭の砂は金銀の、たま 玉をつらねて敷妙の、いほへ 五百重の錦
あま や瑠璃の欄、しやこ 碑碣の行桁瑠璃の橋、いけ 池の汀の鶴龜は、はうらい 蓬萊山もよそならず、めぐみ 君の恵ぞ有

外八 鶴龜

蓬萊山—仙人の
住む島

難き。君の恵ぞ有難き。

ワキ詞「いかにも奏聞申すべき事の候。毎年の嘉例の如く、鶴龜を舞はせられ、其後月宮殿にて舞樂を奏せられうするにて候。シテ詞」ともかくも計らひ候へ。地謡「龜は萬年の齡を經、鶴も千代をや重ぬらん。(中ノ舞) 千代のためしの數々に、千代のためしの數々に、何を引かまし姫小松の、緑の龜も舞ひ遊べば、丹頂の鶴も一千年の、齡を君に授け奉り、庭上に參向申しければ、君も御感の餘りにや、舞樂を奏して舞ひ給ふ。(樂) ヲリ月宮殿の白衣の袂、月宮殿の白衣の袂の、色々妙なる花の袖、秋は時雨の紅葉の葉袖、冬はさえ行く雪の袂を、翻へす衣も薄紫の、雲の上人の舞樂の聲々に、霓裳羽衣の曲をなせば、山河草木國土豊に、千代萬代と舞ひ給へば、官人駕輿丁御輿を早め、君の齡も長生殿に、君の齡も長生殿に、還御なるこそめでたけれ。

姫小松—小松を
引くは正月子の
日の嘉例なり

雲の上人—百官
御相をいふ

和布刈

梗 概

早靱明神にて大晦日に和布刈の神事行はるゝことを以て脚色す。初め神職出でて神事を行ふ事を述ぶる所に、漁翁海士あらはれ神徳を讚歎し、龍宮の故事を物語る。やがて二人は龍神天女と現じて奇特を見す。(脇能)

シテ 龍神(前は漁翁) ツレ 天女(前は海士)

ワキ 早靱神職

ワキ次第語「今日早靱の神祭、今日早靱の神祭、盡きせぬ御代ぞめでたき。ワキ詞」そもく、是は長門國早靱の明神に仕へ申す神職の者なり。さても當社に於いて御祭さまく、御座候中にも、十二月晦日の御神事をば、和布刈の御神事と申し候。今夜寅の時に至つて、龍神潮を守護し、波四方に退いて平々たり。その時神主海中に入つて、水底の和布を刈り神前に供へ申し候。殊に當年は不思議の奇瑞御座候間、いよく信心を致し、御神事

和布—めとは海
藻の總名

年の極め一年の最終

を執りおこなはばやと存じ候。サン謡有難や今日早靨の神の祭、年の極めの御祭と言つば、又新玉の年の始めを、祝ふ心は君が爲、上歌春の野に出でて摘む若菜、春の野に出でて摘む若菜、生ひ行く末の程もなく、年は暮るれど縁なる、和布刈の今日の神祭、心を致しさまなくに、君の恵を祈るなり。君の恵を祈るなり。

蘊藻の禮奠一和布を供物とて祭ること

海士のしわざ一漁業かひ有るべしや一貝に効の意をかく

シテ、ツレ一雙謡「天地の開けし御代は久堅の、神と君との御影かな。ツレ謡今日に廻るも早靨の、シテ、ツレ謡共に暮れ行く年なれや。シテ、サン謡有難やそれ秋津洲の内において、神所の御祭さまなくなれども、シテ、ツレ謡此早靨の神祭、世界わたづみ隔てなくて、蘊藻の禮奠感應の、海松藻浮藻の花も咲く、波をかざしの手向草、塵に交る神心、誓に漏るよ方もなし。下歌歩みを運ぶこの神に、いざ結縁をなさうよ。上歌所は早靨の、所は早靨の、ゆききの舟楫もを絶え、数々の捧物、海士のしわざに至るまで、かひあるべしや、志、それこそ花の手向なれ。それこそ花の手向なれ。ワキ謡不思議やな夕影すぐる神の御前に、手向を捧ぐる人影は、手もや如何なる人やら

鱈一魚類のこと

春秋の云々一新物撰集の歌

海陸の隔て一人間界と諸宮界との間をいふ

ん。ツレ謡「是は賤しき海士少女の數には有らぬ憂き身なるが、手向を捧ぐるばかりなり。シテ謡「我は又年経て住める此浦の、漁翁の罪を恐るゝ故、賤しき者は輕き身を、浮めんために候なり。ワキ謡「なかくなれや鱈までも、誓に漏れぬこの浦の、シテ謡「海士の漁火焦がるとも、シテ、ツレ謡和光の影は曇無く、地謡「明らかなれや天地の、開けし御代の如くにて、直なるべき人心、いやましの瑞驗、あらはれにけるぞ有難き。上歌「海原や、博多の海も程近く、博多の海も程近く、汐引島も見え渡る、早靨の友千鳥、沖の鷗の群れ立つや、春秋の、雲居の雁も留め得ぬ、誰が玉章の門司の關守と、詠みし心も理や。詠みし心も理や。

クリ地謡「それ地神第四の御代、火々出見尊、豊玉姫と契をなし、海陸の隔て無かりしに、シテ、サン謡「その御産の時豊玉姫、尊に向ひ宣はく、地謡「産期に於て我が姿を、敢て見給ふ事なかれと、御約諾の詔、互に固く誓ひ給ふ。クセ然れども時至り、さすがに御氣色いぶかしく思しけるかとよ。かいよみえさせ給ひしを、いとあさましと恨みかこち、

非想—天上界

海藏—海中に秘藏せる意

長く海路の通ひを、たち隠す波の玉の御子を、捨てつと豊玉姫は、龍宮に入り給ふ。その後潮さしひきの、朝暮の時はありながら、人畜類の生を背き、境をさかりにき。
 シテ謡「然れば神代の昔より、地謡「この早鞆の神祭、神慮普き誓なれや。上は非想の雲の上、下は下界の龍神まで、渴仰の心中、まことに深き蒼海を、陸地になしてこの國の、長門の通ひ隔てもなき、海藏の御寶も、心の如くなるべし。
 ロンギ地謡「けにや心の如くにて、けにや心の如くにて、この結縁もさまぐの、人の願の無かるべき。ツレ謡「今は何をか包むべき、我が住む方は久方の、地謡「天つ少女の雲の袖、シテ謡「かざしの花の手向草、地謡「色こそ變れ、シテ謡「わたづみの、地謡「花は波路の底よりも、龍宮の捧げもの、天地ともに渴仰の、天つ少女は雲に乗れば、翁は老の波に、隠れ入り給ひけりや。隠れ入らせ給ひけり。(中入)
 地謡「汀に神幸なり給へば、汀に神幸なり給へば、虚空に音楽、松風に和して、皎月照らし異香薫する龍女は波をかざしの袖を、返すも立ち舞ふ袂かな。

こゆるぎの云々—古今集に「こゆるぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな神にをれ波」めざしは少女のこ

(天女舞)天女謡「さる程にく、地謡「和布刈の時至り、虎嘯くや風早鞆の、龍吟すれば雲起り雨となり、潮も光り鳴動して、沖より龍神現れたり。龍神すなはち現れて、龍神すなはち現れて、シテ謡「和布刈の所の水底を穿ち、地謡「拂ふや汐瀬に、こゆるぎの磯菜摘む、シテ謡「めざし濡らすな沖に居れ波、地謡「沖に居れ波と夕汐を退け、屏風を立てたる如くに分れて、海底の砂は平々たり。(舞)
 ワキ謡「神主松明振りたてよ、地謡「神主明松振りたてよ、御鎌を持つて岩間を傳ひ、つたひ下つて半町ばかりの、海底の和布を刈り、歸り給へば程なく跡に、汐さし満ちて、もとの如く荒海となつて、波白妙のわたづみ和田の原、天を浸し、雲の波煙の波風、海上に收まれば、蛇體は龍宮に飛んでぞ入りにける。

大社

梗概

或る宮人、都より出雲に向ひ、大社にて十月に諸神集ひ給ひて、神事あるに詣でられ、大神及び天女龍神の奇特に逢はるることを作る。(脇能)

シ	テ	杵築大神(前は宮人)	前ツレ	官人
後ツレ	天女		後ツレ	龍神
ワ	キ	臣下		

神有月十月を神無月と稱ふより其字によりて諸國の神々出雲

ワキ次第 誓數多の神祭、誓數多の神祭、出雲國を尋ねん。ワキ詞「そもく、是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても出雲國に於て、今月は神有月とて諸神影向成り、御神事さまく、の由承り及び候程に、この度參詣仕り候。三人道行誦朝立つや、旅の衣の遙々と、旅の衣の遙々と、行方しぐるよ雲霧の、山又山を越え過ぎて、神有月も名にしおふ、出雲國に著きにけり。出雲國に著きにけり。」

大社に集り給ふとの俗説あり、出雲にては神有月といふなり八雲たつ云々素盞鳴尊の御歌を引く

シテ、ツレ 八雲立つ、出雲八重垣妻ごめし、宮路に運ぶ歩みかな。ツレ 尾上の松の梢まで、シテ、ツレ 神風誘ふ聲ならん。シテ、サシ 實にや濁世の人間と、生れ來ぬれど誓ひある、シテ、ツレ 神に仕ふる身にしあれば、漏れぬ恵にかよりきて、心のまよの春秋を、送り迎へて年月の、盡きせぬ世々を頼むなり。下歌いざや歩みを運ばん。いざや歩みを運ばん。上歌いづくにか、神の宿らぬ陰ならん。神の宿らぬ陰ならん。嶺も尾上も松杉も、山河海村野田、残る方なく神のます、御蔭を受けて隔て無き、宮人多き往來かな、宮人多き往來かな。

大社一杵築大社とて大國主神を祭る

ワキ詞「我出雲國大社に参り、案内をうかどふ所に、宮人あまた來れり。如何に方々に申すべき事の候。シテ詞「是はこのあたりにては見馴れ申さぬ御事なり、いづくよりの御參詣にて候ぞ。ワキ詞「さん候、是は朝に隙なき身なれども、當國に於て今月は神有月とて、諸神残らず影向の地と承り及び候へば、この度君に御暇を申し、遙々參詣申したり。ツレ 實に有難や神と君との、ワキ誦「隔て無き世のしるしとて、シテ 歩みを運ぶこの神の、

三十八社—大社
附屬の末社等を
數へて三よ

宗像—三女神

三島の明神—大
山祇神

ワキ謡 惠普き、シテ謡 月影も、上歌地謡 神の世を、思ひ出雲の宮柱、思ひ出雲の宮柱、ふとしき立ちて敷島の、大和島根まで、動かぬ國ぞ久しき。實にや紅も、深くなり行く楢より、しぐれて渡る深山邊の、里も冬立つ氣色かな、里も冬立つ氣色かな。

ワキ詞 不知案内の事にて候へば、當社の神祕委しく御物語り候へ。クリ地謡「そもく出雲國大社は、三十八社を勸請の地なり。シテ、サシ謡 然るに五人の王子おはします。地謡 第一はあじかの大明神と現れ給ふ。山王權現是なり。シテ謡 第二には湊の大明神、地謡 九州宗像の明神と現れ給ふ。第三は伊奈佐の速玉の神、常陸鹿島の明神とかや。クセ 第四には鳥屋の大明神、信濃の諏訪の明神と、即ち現じおはします。第五には出雲路の大明神、伊豫の三島の明神と、現れ給ふ御誓、實に曇無き長月や、月のみそかにとりわきて、シテ謡 住吉一所は影向なる。地謡 残の神々は、十月一日の寅の時に、悉く影向なり、さまざまいろくの神遊、今も絶えせぬこの宮居、語るもなかく思なる誓なるべし。

ロンギ地謡 實に有難き物語、實に有難き物語、末世ながらも隔て無き、神の威光ぞあらた

なる。シテ謡 なかくなれや年々に、今日の今宵の神遊、地謡 その役々も、シテ謡 數々に、地謡 あらゆる神達の舞歌の袖、引くや御注連の名は誰と、白木綿かよる玉垣に、立ち寄り、と見えつるが、神の告ごと言ひ捨て、社壇に入りにつけり。社壇の内に入りにつけり。(中入)

地謡 しがらよ空も雲晴れて、月も輝く玉の御殿に、光を添ふる氣色かな。天女謡 我は是れ、出雲の御崎に跡を垂れ、佛法王法を守の神、本地十羅刹女の化現なり。地謡 容顔美麗に女體の神、容顔美麗の女體の神、光も輝く玉の簪、かさしも匂ふ袂を返す、夜遊の舞樂はおもしろや、(天女舞) 實に類無き舞の袖、實に類無き舞の袖、靡くや雲の絶間より、諸神は残らず現れ給ひ、舞樂を奏し神前に飛行し、早疾く姿を現し給へど、夕べの月も雲晴れて、光も朱の玉垣輝き、神體現れおはします。

ロンギ地謡 實にや尊き御相好、實にや尊き御相好、まのあたりなる神徳を、受くるも君の恵かな。シテ謡 とても夜遊の神祭、委しくいざや現し、彼の客人を慰めん。地謡 さて神樂

相好—姿

十羅刹女—鬼神

神あげの御山
神靈を山上に送
り返す所

の役々は、シテ謡住吉鹿島、地謡諏訪熱田、その外三千世界の諸神は、こよに影向なり、とりぐの小忌の袖返すくも面白や。(樂)地謡舞樂も今は時過ぎて、舞樂も今は時過ぎて、更け行く空もしぐるよ雲の、沖より疾風吹き立つ波は、海龍王の出現かや。龍神謡「そもく是は、海龍王とは我が事なり。詞さても毎年龍宮より、黄金の箱に小龍を入れ、神前に捧げ申すなり。地謡龍神即ち現れて、龍神即ち現れて、波を拂ひ潮を退け、汀に上り御箱をすゑ置き、神前を拜し渴仰せり。龍神謡「其時龍神御箱の蓋を、地謡その時龍神御箱の蓋を、忽ち開き、小龍を取り出だし、即ち神前に捧げ申し、海陸ともに治まる御代の、實に有難き恵かな。(舞節)シテ謡四海安全に國治り、地謡四海安全に國治つて、五穀成就福壽圓滿に、いよく君を守るべしと木綿四手の數々、神々とりぐに御前を拂ひ、神あげの御山に上らせ給へば、龍神平地に波浪を起し、逆巻く潮に引かれ行けば、諸神は虚空に遍満しつよ、けにあらたなる神は社内、けにあらたなる神は社内、龍神は海中に入りにつけり。

東方朔

梗概

前の西王母と相關聯す。東方朔西王母あらはれ出でて三千年に一度實るといふ桃實を君王に捧げ上るといふめでたき曲なり。(脇能)

シテ 東方朔(前は老人) 前ツレ 西王母 ワキ 帝王

喜見城一帝釋天
の居所

ワキ、サシ謡「面白や四時時移り易くして、春過ぎ夏暮れ今は早、初秋の七日七夕の、星の祭を急ぐなり。ワキツレ謡「帝の御殿は承華殿、ワキ謡「さながら花の袖をつらね、ワキツレ謡「七寶の臺、金銀の床に、君を始め奉り、ワキ謡「官軍おのく、ワキツレ謡「竝み居つよ、上歌地謡「御遊をなしているく、御遊をなしているく、の、樂み盡きぬその氣色、音に聞く喜見城も、これにはいかで勝るべき、只これ君の御威光、廣き恵は有難や。廣き恵は有難や。シテ、ツレ一聲謡「治まれる、御代の光に數ならぬ、身までも安き住まひかな。ツレ謡「恵も廣きこの君の、シテ、ツレ謡「御影を頼むばかりなり。シテ、サシ謡「それ賢王の御代のしるし、五日の

秋來ぬと古今集に「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」

悉達太子一釋迦如來の事父は淨飯王といふ

風や十日の雨、シテ、ツレ、濕ふ四方の草木まで、靡き隨ふこの時に、生まれあふ身は頼もしや。下歌時しも今日は七夕の、逢ふ瀬を急ぐ頃なれや。上歌秋來ぬと、目に見ぬ空はおのづから、目に見ぬ空はおのづから、音かへて吹く風の、袖も涼しき夕まぐれ、靡く稻葉の色までも、千年の秋の始かな。千年の秋の始かな。
シテ詞「如何に奏聞申すべき事の候。ワキツレ詞「奏聞申さんとは如何なる者ぞ。シテ詞「是はこの國の傍に住む者にて候が、申し上げたき子細候ひて參内申して候。ワキツレ詞「さらば此方へ參り候へ。シテ詞「是はこの國の傍に住む者にて候が、めでたき瑞相の御座候ひて參りて候。この程三足の青鳥御殿の上を飛び廻り候。これ西王母が寵愛の鳥にて候。即ち西王母この君へ參禮申すべし。この事奏聞申さんために參りて候。ワキツレ詞「かよるめでたき事こそ候はね。猶々仙人の謂れ、懇に物語り候へ。
クリ地謡「それ仙郷といつば、人間に交はらず、松の葉をすき苔を身に著て、年は経れども樂しみ盡さず、飛行自在の通を得る。シテ、サシ謡「忝くも悉達太子は、仙人に仕へおは

採菓汲水一難行苦行の一例

歸る波の一波はかへるいひ聲といふ語縁に用ゐたり

しまし、地謡「採菓汲水年を経て、終に成道し給ひて、大聖世尊となり給ふ。クセしかるに仙人のその數、限も知らぬ中にも、西王母と聞えしは、西方極樂無量壽佛の化現なれば、量なき命の、仙人となるぞめでたき。されば園生に植うる桃の、三千年に一度、花咲き實なるこの木の、仙藥となるぞ不思議なる。シテ、謡「今は包まじ我こそは、地謡「その名も世世に隠れなき、東方朔と聞えしは、この老翁が事なり。君桃實を聞召さば、御壽命長遠に、御身も息災なるべし、急ぎ王母を伴なひ、重ねて參内申さんと、庭上を立つて歸る波の、聲ばかり残りつよ、形は雲に入りにつけり。形は雲に入りにつけり。(申入)
後シテ謡「そもく是は、仙郷に入つて年久しき、東方朔とは我が事なり。詞さてもわれ西王母が桃實を、度々服せしその故に、壽命既に九千歳に及べり。彼の桃實を君に捧げ申さんと、誓あり。謡如何にやいかに西王母、疾くく參内申すべし。地謡「不思議や西の空よりも、不思議や西の空よりも、白雲一群降ると見えしが、三足の青鳥、翅をならべて飛び廻り、姿も妙なる王母の立、光も輝く衣冠を著し、斑龍に乗じて顯れ給ふ、まの

あたりなる奇特かな。

王母わうぼは庭上ていしやうに歩み出でて、地ち王母わうぼは庭上ていしやうに歩み出でて、彼の桃實たうじつを捧け持つて、上じやうらん覽らんに供へ奉れば、帝王ていおう御感ごかんのあまりにや、糸竹しちくの調數しらめかずを盡し、皆いちどう一同に奏かなで給ふ、舞樂まがくの祕曲ひきまぐは面白おもしろや。(舞) 舞樂まがくも漸やうやく時過ときあぎて、舞樂まがくも漸やうやく時過ときあぎて、夕陽せきやう西にしに傾かたじきければ、各君おのくさみに御暇ごいさま申し、歸かへらんとせしに、帝王ていおう名殘なごりを惜をしみ給ひ、重ねて參内さんない申すべしと、宣旨せんじを蒙かうけり、二人にじんは伴ともなひ出でけるが、王母わうぼは斑龍はんりゆうにゆらりと打乗うちのりり、遙はるかの雲路くもぢに攀よち上のぼり、遙はるかの雲路くもぢに攀よち上のぼつて、又天上てんしやうにぞ歸りける。

春しゆん 榮えい

梗 増尾春榮丸といふ者、囚人となりて伊豆三島なる高橋權頭の許に在り。その兄種直弟に代りて誅せられんとし、尋ね行きしに、兄には非ず家人なりといひ、兄弟互に相庇ふ。たまたま鎌倉より早打來り、囚人赦免の中に春榮入る。權頭つひに春榮を養子となし、めでたく祝言あり。共に打つれ鎌倉に上る。これ友愛の徳なりといふ筋なり。(四番目)

シテ 増尾種直 トモ 從者 子方 増尾春榮丸
ワキ 高橋權頭 狂言 從者

ワキ詞「是は高橋權頭の頭にて候。扱もこの度宇治橋の合戦に身方打勝ち、分捕功名數を盡くす。某が手にも囚人數多候中にも、春榮殿と申す幼き人を生捕り申して候。この由を申し上げて候へば、近きほどに誅し申せとの、御事にて候間、春榮殿へこの由を申さばやと存じ候。」

散らぬ先に春

衆の存生中の意
囚人の數に入らばや一春衆の身代りにならんと
の意

ゆかりの者一線者

シテ、トモ次第誦「散らぬ先にと尋ね行く、散らぬ先にと尋ね行く、花をや風の誘ふらん。
シテ詞「是は武藏國の住人、増尾の太郎種直にて候。さても宇治橋の合戦に弓手の肩を
射させ、その矢を抜かんとすこし、傍に引き退き候間に、弟にて候春榮深入し、やみや
みと生捕られて候。承り候へば、生捕何れも近き程に誅せらるゝ由申し候間、某も囚
人の數に入らばやと存じ、只今春榮がありかへと急ぎ候。シテ、トモ道行誦「住み馴し、都の空
は雲居にて、都の空は雲居にて、朝立ち添ふる旅衣、日も重なりて行く程に、名にのみ
聞きし伊豆の國府、三島の里に著きにけり。三島の里に著きにけり。
シテ詞「急ぎ候ほどに、伊豆の三島に著きて候。此處にて囚人の奉行をば、高橋とやらん申
し候。尋ねて對面申したき由申し候へ。トモ詞「畏つて候。如何に案内申し候。囚人の奉
行高橋殿と申すは何くに御座候ぞ。狂言詞「何の御用にて候ぞ。頼みたる人の事にて候。
トモ詞「いや苦しからぬ者にて候。是は春榮殿のゆかりの者にて候。高橋殿へそと御目に
かよりたき事の候ひて是まで参りて候、その由をよく御心得あつて御申し候へ。

痛はり申され
大切にせらるゝ
となり

大法一嚴重なる
掟

狂言詞「心得申し候。囚人のゆかりの人は堅く禁制にて候へども、春榮殿の御事は頼み候
人別して痛はり申され候間、その由を申して見候べし、暫く御待ち候へ。トモ詞「心得申し
候。狂言詞「如何に申し候。春榮殿のゆかりと申して若き男の來り候ひて、御目に懸りたき
由申し候間、堅く御禁制にて候へども、春榮殿の御事にて候間申し入れて見うする由申
して候。ワヤ詞「何と春榮殿のゆかりの人と申して、某に對面ありたき由申すか。汝の知る
如く、囚人のゆかりに對面は禁制にて候へども、春榮殿の御事は別して痛はり申し候
間、そと對面申さうするにて候。さりながら大法のことにて候間、太刀刀を預り候へ。
狂言詞「畏つて候。いかに申し候、只今の通りを申して候へば、かたく禁制にて候へども、
春榮殿のゆかりの御事にて候ほどに、そと御目にかよりうすると申され候。さらば太刀
刀を給はり候へ。トモ詞「心得申し候。尋ね申して候へば、春榮殿のゆかりならば、高橋別
して痛はり申し候間、對面申さうする由申され候。さりながら大法にて候程に、太刀が
たな禁制の由申し候。シテ詞「さらば太刀刀を參らせ候べし。

ワキ詞「春榮殿のゆかりと仰せ候はいづくに渡り候ぞ。シテ詞「さん候是に候。ワキ詞「是は春榮殿の爲には何にて渡り候ぞ。シテ詞「是は春榮が兄に、増尾の太郎種直と申す者にて候が、今度宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ、その矢をぬかんと少し傍に引き退き候間に、弟にて候春榮深入し生捕られて候間、餘りに見捨て難く候へば、某も一所に誅せられん爲に遙々これまで参りて候。春榮に引き合はせられて賜はり候へ。ワキ詞「委細承り候。是までの御出で誠にゆよく候。やがてその由を春榮殿へ申し候べし、暫く御待ち候へ。シテ詞「心得申し候。

ワキ詞「いかに春榮殿へ申し候。御身の御舎兄に、増尾の太郎種直と御名のりあつて、是まで御出でにて候。急いで御對面候へ。春榮詞「是は眞しからず候。兄にて候者は、宇治橋の合戦にて重手負ひ、存命不定とこそ承り候ひつれ。ワキ詞「あら不思議や、正しく御舎兄と仰せ候ものを、さりながら物の暇よりそと御覽候へ。春榮詞「不思議なる事にて候。譜代召し使ひ候家人にて候間、急ぎ追つ歸して給はり候へ。ワキ詞「さては眞に家人にて候

存命不定—生死不明
譜代—代々

聊爾—粗忽のこと

勝劣を見せ—眞偽を確むること

か、さあらばやがて追つ歸し候べし。如何に以前の人の渡り候か。シテ詞「是に候。ワキ詞「仰せの通りを申して候へば、物の隙より御覽候ひて、兄にては無し、譜代召し使はるゝ家人なれば、急ぎ追つ歸し申せとの御事にて候。何とて聊爾なる事をば承り候ぞ。シテ詞「暫く。まづ御心を静めて聞召され候へ。家人の身として兄と名のり、一所に誅せらるゝ事の候べきか。如何やうにも御沙汰候ひて、引き合はせられて給はり候へ。某對面して、家人か兄かの勝劣を見せ申し候べし。ワキ詞「實にくは尤にて候。さらば某たばかつて呼び出だし候べし。その時御袖に縫られて委しく仰せ候へ。シテ詞「心得申し候。さらば是に待ち申し候べし。

ワキ詞「如何に春榮殿に申し候。只今かの者をばあらくと申し追つ歸して候さりながら、彼の者の心中あまりに不便に候間、後姿をそと御覽候へ。此方へ渡り候へ。シテ詞「如何に春榮、何とて某をば家人とは申すぞ。さてもこの度宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ、その矢を抜かんとて少し傍に引き退き候間に、御身は深入して生捕られ

先途—大事の場合

逆さまなる御甲ひ—子が却て親より甲はるゝこと

深山木の云々—頼政の歌を引く

股のやうか—秦のかくい共に未詳

命を捨つるまで—捨つるまでの事なりの意

たり、其際の先途をも見届けざれば、家人といふ事弟ながらも恥しうこそ候へさりながら、一處に誅せられん爲に、是まで遙々來りたるに、何とて家人とは申すぞ。春榮詞「いかに汝は三世の好みを思ひ、是まで遙々きたりたる志し、返すくもやさしけれさりながら、汝は故郷に歸り、母御に申すべきやうは、春榮こそ誅せられ候へ、逆さまなる御甲ひにこそ預り候ふべけれど、よくく申し候へ。シテ詞「猶も家人と申すか。深山木の其梢とは見えざりし、櫻は花に顯れにけり。何と家人とくだすとも、終には隠れよもあらず。春榮詞「時を得て早くもそだつ夏木立、その木をそれと見るべきか、早とく歸れと叱りけり。シテ詞「山皆染むる梢にも、松は變らぬ習ひぞかし。春榮詞「一千年の色とても、雪には暫し隠るよなり。シテ詞「是を物に喩ふれば、股のやうかは父をうち、春榮詞「秦のかくい師匠をうつ。シテ詞「今の増尾の春榮は、春榮詞「現在の兄を家人といふ。シテ詞「是は逆罪たるべきに、春榮詞「誠は深き孝行なり。シテ詞「いやとにかくに命を捨つるまで、種直これにて腹切らん。や、刀は參らせつ。御芳志に刀を給はり候へ。春榮詞「なうく暫くこはいかに、地蔵命

遺跡—跡目ともいふ家督のこと

目録にて—囚人の姓名届出たこと

を助け申さんとてこそ、家人とは申しつれ。忠が不忠になりけるか、許させ給へ兄御前、許させ給へ兄御前。上歌種直も春榮も、種直も春榮も、囚人守護の兵も、互の心を思ひやり、實に持つべきは兄弟なりとて、共に袂を濡しけり。共に袂を濡しけり。ワキ詞「言語道斷、御兄弟の御心中を感じ申し、我等も落涙仕りて候。如何に種直に申し候。某春榮殿を痛はり申す事餘の儀にあらず、某子を一人持ちて候を、宇治橋の合戦に討たせて候が、この春榮殿の面ざし少しも違はず候。間、天晴御命も助かり給ひ候へかし、某申し受け遺跡を繼がせ申し度きとの念願にて候。や何と申すぞ。是は眞にてあるか、あら何ともなや、只今申しつる事も徒事にて候。又鎌倉より早打立つて、箱根を越さぬ先に、囚人を皆誅し申せと仰せ出だされて候。御痛はしながら力なき事。春榮殿も御最期御用意をさせ申され候へ。又種直は急いで故郷へ御歸り候へ。シテ詞「暫く候。春榮が事は幼き者の事にて候間、春榮を助け、某を誅して給はり候へ。ワキ詞「仰せはさる事にて候へども、はや目録にて御目にかけて候間、中々叶ひ申すまじく候。

シテ詞「仰せはさる事にて候へども、ひらに私を以て春榮を助け、某を誅して給はり候へ。ワキ詞「是は尤にて候へども、なか／＼さやうにはなるまじく候。シテ詞「さては力なき事。是まで遙々來り候ひて、春榮が最期を見捨て歸る事はあるまじく候間、某をも一所に誅して給はり候へ。ワキ詞「それはともかくもにて候。

小太郎一從者の名

シテ詞「如何に春榮故郷へ形見を送り候へ。いかに小太郎、おことは國に歸り母御に申すべきやうは、春榮が最期の有様あまりに見捨て難く候程に、諸共に誅せられ候。逆さまなる御弔にてこそ預り候べけれどよく／＼申し候へ。ワキ詞「是なる守は種直が、母御の方より賜りたる、守佛の觀世音、種直が形見に御覽候へと、よく／＼申し候へ。春榮「是なる文は春榮が、最期の文にて候なり。又形見には烏羽玉の、我が黒髪の裾を切り、さばかり明暮一筋を千筋と撫でさせ給ひし髪を、春榮が形見に參らする。シテ詞「あら定めなやさるにても、我こそ残りて御跡を、弔ふべきにさはなくて、成人の子をば先立てて、地謡「歎き給はん母上の、御心の内、思ひやられて痛はしや。ワキ詞「實にや生きとし生ける

八つの苦しみ
地獄餓鬼畜生北
鬱單越長壽天佛
前佛後佛言尊釋
啞世智辨聰

唯心の淨土極
樂道からず唯心
の中にありと
中有一極樂と地
獄との間
雪の古枝云々

物「何れか父母を悲まざる。必ず一世に限るべからず、世々以て父母の數々なり。シテ、サシ謡「それ十二因縁より二十五有の沈淪、生じては死し死しては生じ、地謡「流轉に廻る事、生々の親子、皆以つて誰か又自他ならん。シテ謡「然れば羊鹿牛車に乗り、地謡「火宅の境を出でずして、煩惱業苦の三つの繩に、繋がれ來ぬるはかなさよ。ワキ「それ生死に流轉して、人間界に生るれば、八つの苦しみ離れず。過去因果經を惟みよ、殺の報殺の縁、たとへば、車輪の如く、我人を失へば、かれまた我を害す。世々生涯、苦しみの海に浮き沈みて、御法の舟橋を、渡りもせぬぞ悲しき。殊更この國は、神國といひながら、又は佛法流布の時、教の法も盛なり。殊に所はあづまがた、佛法東漸にあり。有明の月の、わづかなる人界、急いで來迎の夜念佛、聲清光に彌陀の國の、涼しき道ならば、唯心の淨土なるべし。シテ謡「處を思ふも頼もしや。地謡「こよは東路の、故郷を去つて伊豆の國府、南無や三島の明神、本地大通智勝佛、過去塵點の如くにて、黃泉中有の旅の空、長闇冥の暮までも、我らを照らし給へと、深くぞ祈誓申しける。雪の古枝の枯れてだに、二度

枯木開花は観音の慈悲

花や咲きぬらん。

早打詞「いかに高橋殿。鎌倉よりの早打なり、暫く御待ち候へ」とよ。ワキ詞「すは又早打きたれるは、遅し切れとの御使か。早打詞「いや若宮別當の申しにより、囚人七人の免状なり。」ワキ詞「さて春榮殿は。早打詞「七人の内。ワキ詞「あゝ嬉しよ〜まづ讀まん。何々若宮別當の申しにより、囚人七人免状の事。第一番には別當の御弟豊前の禪師、第二番には豊後の次郎、第三番には増尾の春榮丸。残り先々讀みても無益、はや助くるぞ春榮と、地謡「太刀の下より引きたてよ、命助かる兄弟は、嬉しさもなかく〜に思はぬほどの心かな。今の心は獸の、雲に吠えけん心地して、千々の情ありがたき、兄弟の好みこそ、誠に哀なりけれ。」

獸の雲に吠えけん—淮南安劉安の鶴犬仙藥を嘗めて昇天せし事

ワキ詞「いかに種直に申し候。以前も申す如く、春榮殿の御事あつばれ御命も助かり給ひ候へかし、申し受け某が一跡を繼がせ申したきとの念願かなひて候。この上は賜はり候へ。シテ詞「實にこの上は參らせ候ふべし。ワキ詞「今日は殊更最上吉日なれば、家に傳はる重

嘉辰令月一朗詠集に嘉辰月歌無極

いはふ一殿を掛

代の太刀、春榮殿に奉り、重ねて千秋萬歳の、地謡「猶歡の盃の、影も廻るや朝日影、伊豆の三島の神風も、吹き治むべき代の始め、幾久さとも限らじや。嘉辰令月とは、この時をいふぞめでたき、猶々廻る盃の、度かさなれば春榮も、お酌に立ちて親との、定めをいはふ祝言の、千秋萬歳の舞の袖、翻し舞ふとかや。シテ詞「千代に八千代にさざれ石の、地謡「いはふ心は萬歲樂。」

ワキ詞「いかに種直、かよるめでたき折なれば一指御舞ひ候へ。シテ詞「さらばそと舞はうするにて候。地謡「祝ふ心は萬歲樂。(男舞)シテ、サシ謡「東路の、秩父の山の松の葉の、地謡「千世のかけ添ふ若緑かな。若緑がなく、シテ謡「老木も若緑、地謡「立つや若竹の、シテ謡「親子の睦み、地謡「又は兄弟、かれといひこれといひ、いづれも〜睦しく、親子兄弟と榮ふる事も、是孝行を守り給ふ、三島の宮の御利生と伏拜み、親子兄弟さも睦しく打連れて鎌倉へこそ參りけれ。」

御利生一御かけのこと

外九

第六天

梗 解脫上人、伊勢大神宮に詣で、里人に逢ひて、尊き神徳の物語を聴く。かくて第六天の魔王、群鬼さま、現れ、素盞鳴尊亦現じ給ふ、遂に魔王群は神威に怖れて虚空に去る事を作る。脇能の類なり。

シテ 魔王(前は里女) 前ツレ 里女 ヲ キ 解脫上人

沙門一僧
行くも歸るも
輝丸の歌により
て書く
多氣の都一伊勢

ワキ次第謡「心の花を手向とて、心の花を手向とて、大神宮に参らん。詞是は解脫と申す沙門にて候。我未だ大神宮に参らす候程に、この度思ひ立ち伊勢参宮と志し候。道行謡旅衣、今日九重を立ち出でて、今日九重を立ち出でて、末は音羽の山櫻、花の瀧川是ぞこの、行くも歸るも逢坂の、杉の木の間波よする、湖向ふ鏡山、やうく行けば鈴鹿路や、多氣の都の程もなく、度會の宮に著きにけり。度會の宮に著きにけり。

多氣都に寶宮の御住所ある故に都といふとぞ
度會の宮一大神宮
千木一屋根の上
に組違へたる木
かたそぎはそ
一方を取離した
るなり
正直捨方便一神
は佛と異なり正
直を主として方
便を捨て用ひ
ずとなり
神風に一西行の
歌末句花の盛は
月讀のより一森
に洩りを掛く月
讀尊は内宮別宮
の一つ
倭姫命一垂仁天
皇の皇女
宮居一大神宮の
御座在すべき土
地

シテ、ツレ一謡謡「神路山、御裳濯川のその上に、契りし事の末は違はじ。ツレ謡「永き代までも仕へ来て、シテ、ツレ謡「盡きぬ恵は頼もしや。シテ、サシ謡「見渡せば千木もゆがまずかたそぎもそらず、シテ、ツレ謡「これ正直捨方便の、形を現すかと思え、古松枝を垂れ老樹緑を添へ、皆これ上求菩提の相を表す。有難かりし宮居かな。下歌「神風に、心安くぞ任せつる、上歌「櫻の宮の花盛、櫻の宮の花盛、花の白雪立ち迷ひ、空さへ匂ふ月讀の、もりくる影も長閑にて、知るも知らぬも道の邊の、行きかふ袖の花の香に、春一しほの氣色かな、春一しほの氣色かな。
シテ謡「是なる御僧は何處よりの御参詣にて候ぞ。ワキ謡「是は都方より出でたる沙門にて候。和光同塵の本願は結縁の始、濁世の我等なんぞ神力の妙樂を蒙らざらんや。神祕を委しく語り給へ。シテ謡「優しき人のいひごとや。懇に語り参らせうするにて候。
クリ地謡「夫れ御裳濯川といつば、倭姫の命、七百餘歳にいたるまで、宮居を尋ねおはします。シテ、サシ謡「然れば當國二見の浦に上り、地謡「裳裾の穢れ給ひしを、この川にて洗ひし

により、御裳濯川と申すなり。クセそもく、當社は垂仁の御宇にはじめて、下津岩根に宮柱、太敷き立てよ、日神月神をあがめ申すなり。蛭子素盞鳴は、枝を連ぬる御神、高天の原の昔より、シテ謠「今も變らぬ神徳の、地謠」その品々の方便を、語るもいかで盡くさまし。仰ぎても猶あまりあり。かよる恵をおしなめて、頼めや頼め神の告、木綿四手に榊葉添へ、御法の障碍有るべしと、夢に來りて申すとて、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中入)

ワヤ謠「かくて神前に心を澄ます折節に、地謠」俄に大空さえかへり、風雨雷電肝を消し、六種の震動夥しや。

後シテ謠「そもく、是は佛法を破却する、第六天の魔王とは我が事なり。地謠」さて又供奉は誰々ぞ。シテ謠「六天には煩惱の悪魔、地謠」陰魔死魔、シテ謠「天子業魔、地謠」その外從類悟の道を、障碍の群鬼はさまざまなり。ワヤ謠「その時解脱合掌して、地謠」その時解脱合掌して、觀念をなしければ、不思議や天つ空よりも、素盞鳴現れ出で給へり。即ち素盞鳴

六種の震動一動
偏動等偏動、震
偏震等偏震、涌
偏涌等偏涌、吼
偏吼等偏吼、起
偏起等偏起、覺
偏覺等偏覺の六
つ

現れ給ひ、即ち素盞鳴現れ給へば、さしにも猛き六天なれども、恐れをなしてぞ見えたりける。(舞袖) ツレ謠「素盞鳴なほも怒り給ひ、地謠」素盞鳴なほも怒り給ひて、寶棒を取り直し打たんとせしに、飛び違ひ、須彌に上らんとするを引きとどめ、大地に打ち伏せて、忽ち散々に苦を見せ給へば、今よりこの土に來るまじと、誓をなせば、尊は雲居に上らせ給ひ、魔王は通力盡き果てよ、魔王は通力盡き果てよ、虚空に跡なく失せにけり。

土蜘蛛

梗 源頼光、病の床に臥せるに、土蜘蛛の精現れたるを、頼光膝丸といふ太刀もて切る。やがて、郎等葛城山に向ひて土蜘蛛を退治することを作る。依りて膝丸を蜘蛛切と命ずる由來を説き、劔の徳を讃嘆す。(五番目)

シテ 土蜘蛛(前は僧) 前ツレ 頼光
同 胡蝶 ワキ 一人武者

典藥の頭一醫官

胡蝶次第謡「浮き立つ雲の行方をや、浮き立つ雲の行方をや、風の心地を尋ねん。サシ是は頼光の御内に仕へ申す、胡蝶と申す女にて候。詞さても頼光例ならず惱ませ給ふにより、典藥の頭より御藥を持ち、只今頼光の御所へ参り候。いかに誰か御入り候。トモ詞誰にて御座候ぞ。胡蝶詞「典藥の頭より御藥を持ちて、胡蝶が参りたる由御申し候へ。トモ詞心得申し候、御機嫌を以て申し上げうするにて候。頼光サシ謡「こよに消えかしこに結ぶ水の

期を待つ一死期を待つこと
色をつくして一品をつくして

我がせこが衣

泡の、浮世にめぐる身にこそありけれ。けにや人知れぬ、心は重き小夜衣の、恨みん方もなき袖を、片敷きわぶる思ひかな。トモ詞「いかに申し上げ候。典藥の頭より御藥を持ちて胡蝶の参られて候。頼光詞「こなたへ來れと申し候へ。トモ詞「畏つて候。此方に御参り候へ。胡蝶詞「いかに申し上げ候。典藥の頭より御藥を持ちて参りて候。御心地は何と御入り候ぞ。頼光詞「昨日より心も弱り、身も苦みて、今は期を待つばかりなり。胡蝶謡「いやいやそれは苦からず。病ふは苦き習ひながら、療治によりてなほる事の、例は多き世の中に、頼光謡「思ひも捨てず様々に、地謡「色をつくして夜晝の、色をつくして夜晝の、境も知らぬ有様の、時の移るをも、覺えぬほどの心かな。けにや心を轉せず、そのまよに思ひ沈む身の、胸を苦むる、心となるぞ悲しき。
シテ一雙謡「月清き、夜半とも見えす雲霧の、かよれば曇る心かな。詞「いかに頼光、御心地は何と御座候ぞ。頼光謡「ふしぎやな誰とも知らぬ僧形の、深更に及んで我を訪ふ。その名はいかにおほつかな。シテ詞「愚の仰せ候や。惱み給ふも我がせこが、來べき宵なりさ

通題の歌末句かねてしるしも

陸九一太刀の名

いしくもいみじくも

さがにの、頼光謡「蜘蛛のふるまひかねてより、知らぬといふに猶近づく、姿は蜘蛛の如くなるが、シテ謡「かくるや千筋の糸すぢに、頼光謡「五體をつとめ、シテ謡「身を苦しむる、地謡「化生と見るよりも、化生と見るよりも、枕にありし膝丸を、抜き開きちやうと切れば、そむくる所をつとげさまに、足もためず薙ぎ伏せつゝ、得たりやおうと罵る聲に、形は消えて失せにけり。形は消えて失せにけり。

ワキ謡「御聲の高く聞え候ほどに馳せ参じて候。何と申したる御事にて候ぞ。頼光謡「いしくも早く來たる者かな。近う來り候へ語つて聞かせ候べし。物語さても夜半ばかりの頃、誰とも知らぬ僧形の來りわが心地を問ふ。何者なるぞとたづねしに、我せこが來べき宵なりさよがにの、蜘蛛のふるまひかねてしるしもといふ古歌をつらね、即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて、我に千筋の糸を繰りかけしを、枕にありし膝丸にて切り伏せつるが、化生の者としてかき消すやうに失せしなり。是と申すもひとへに劍の威徳と思へば、今日より膝丸を蜘蛛切と名づくべし。なんほう奇特なる事にて無きか。ワキ謡「言語道斷、今に始

此血をたんだへ通解に血の跡を認め行く意とせり

土も木も一初句草も末句すみかなるべき上巻田村を見よ

一人武者一保昌

下知一命令

めぬ君の御威光劍の威徳、かたぐい以てめでたき御事にて候。また御太刀附のあとを見候へば、けしからず血の流れて候。この血をたんだへ化生の者を退治仕らうするにて候。頼光謡「急いで参り候へ。ワキ謡「畏つて候、(中入)

ワキ一雙謡「土も木も、我が大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる。その時一人武者すすみ出で、彼の塚にむかひ大音あけていふやう、是は音にも聞きつらん、頼光の御内にその名を得たる一人武者。いかなる天魔鬼神なりとも、命魂を斷たんこの塚を、地謡「崩せや崩せ人々と、呼ばはり叫ぶその聲に、力を得たるばかりなり。下知に従ふ武士の、下知に従ふ武士の、塚を崩し石をかへせば、塚の内より火焰を放ち、水を出すといへども、大勢崩すや古塚の、あやしき岩間の陰よりも、鬼神の形は現れたり。

後シテ謡「汝知らずや我昔、葛城山に年を経し、土蜘蛛の精魂なり。なほ君が代に障をなさんと、頼光に近づき奉れば、却つて命を斷たんとや。ワキ謡「その時一人武者進み出で、地謡「その時一人武者すすみ出でて、汝王地に住みながら、君を惱ますその天罰の、劍に

あたつて悩むのみかは、命魂を断たんと、手に手を取り組みかよりければ、蜘蛛の精靈、千筋の糸を繰りためて、投げかけく白糸の、手足に纏はり五體をつとめて、斃れ伏して見えたりける。(舞備) ワキ誦然りとはいへども、地誦しかりとはいへども、神國王地の恵を頼み、彼の土蜘蛛の中に取込め、大勢亂れかよりければ、劔の光に少し恐ると氣色を便りに、切り伏せく土蜘蛛の、首打落し悦び勇み、都へとてこそ歸りけれ。

舎利

舎利

梗 概

出雲より出でたる旅僧都に上り、泉涌寺に詣でて舍利殿を拜む。嘗て外道の足疾鬼、この舍利を奪ひ去取り返せしといふ縁起の様を、まのあたりに現ぜらるゝ奇特に逢ふ。(五番目)

シテ 足疾鬼(前ば里人) ツレ 章駄天
ワキ 旅僧 狂言 寺僧

ワキ詞「是は出雲國美保の關より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、この度思ひ立ち洛陽の佛閣一見せばやと思ひ候。道行誦朝立つや、空行く雲の美保の關、空行く雲の美保の關、心は留まる故郷の、跡の名残も重なりて、都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。詞 日を重ねて急ぎ候間、程なく都に著きて候。まづ承り及びたる東山泉涌寺へ参り、大唐より渡されたる十六羅漢、又佛舍利をも拜み申さばやと存じ候。是なる

十六羅漢一釋尊の弟子にて阿羅

眞果といふ資格を得たる十六人佛舍利佛骨

寺ぞ泉涌寺と申すけに候。寺中の人に委しく案内をも尋ねばやと思ひ候。如何に誰かわたり候。狂言詞「何事を御尋ね候ぞ。ワキ詞「是は遙かの田舎より上りたる僧にて候。當寺の御事を承り及び遙々参りて候。大唐より渡りたる十六羅漢。又佛舍利をも拜み申したく候。狂言詞「實に〜聞召し及ばれて御参り候か。聊爾に拜み申す事叶はず候。但し今日彼御舎利の御出で有る日にて候。我等當番にて只今戸を明け申さんとて、鍵を持つて罷り出で候。まづこの舎利を御拜み有つて、その後山門に登りて、十六羅漢をも拜ませ申し候べし。此方へ御出で候へ。がらく〜さつと御戸を開き申して候。よく〜御拜み候へ。ワキ詞「あら有難や候。さらば御供申し候べし。

ワキ、サシ謡「實にや事として何か都の愚なるべきなれども、ことさら靈驗あらたなる、佛舍利を拜み申す事の貴さよ。是なん足疾鬼が奪ひしを、韋駄天取り返し給ひし、現住奇特の牙舎利の御相好、感涙肝に銘するぞや。一心頂禮萬徳圓滿釋迦如來。上歌地謡「有難や、今も在世の心地して、今も在世の心地して、まのあたりなる佛舍利を、拜する事のあらた

後五―釋迦入滅後五百年づつ五期を重ねたる最終の一期

さを、何に喩へん墨染の、袖をも濡らす氣色かな。袖をも濡らす氣色かな。シテ謡「有難や佛在世の御時は、法の御聲を耳に觸れ、聞法値遇の結縁に、一劫をも浮むこの身ながら、二世安樂の心を得るに、後五の時代の今さらに、猶執心の見佛の縁、嬉しかりける時節かな。

ワキ詞「我佛前に觀念し、寥々とある折節に、御法を尊む聲すなり。如何なる人にてましますぞ。シテ詞「是はこの寺のあたりに住む者なるが、妙なる法の御聲を受けて、こゝに立ち寄るばかりなり。ワキ詞「よし誰とてもその望、佛舍利を拜まん爲ならば、同じ心ぞ我も旅人、シテ謡「來るもよそ人、ワキ謡「所もまた、シテ、ワキ謡「都の邊、東山の、末につどける峯なれや、上歌地謡「月雪の、古き寺井は水澄みて、古き寺井は水澄みて、庭の松風さえかへり、更け行く鐘の聲までも、心耳を澄ます夜もすがら、實に聞けや峯の松、谷の水音澄み渡る、嵐や法を稱ふらん、嵐や法を稱ふらん。ワキ謡「それ佛法あれば世法有り、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生もあり、善惡又不

西天—天竺
日域—日本

三如来—釋迦藥
師阿彌陀

四菩薩—觀音勢
至普賢文殊

泥洹—涅槃

白毫—眉間の毛
釋迦卅二相の一
つ

二なるべし。シテ、サシ謡「しかるに後五百歳の佛法、既に末世の折を得て、地謡「西天唐土日域に、時至つて久堅の、月の都の山竝に、佛法流布のしるしとて、佛骨を納め奉り、シテ謡「實に目前の妙光の影、地謡「この御舍利に若くはなし。クセ然るに佛法東漸とて、三如来四菩薩も、皆日域に地を占めて、衆生を濟度し給へり。常在靈山の秋の空、わづかに二月に臨んで、魂を消し、泥洹雙樹の苔の庭、遺跡を聞いて、腸を斷つ、有難や佛舍利の、御寺ぞ在世なりける。實にや鷲の御山も、在世の砌にこそ、草木も法の色を見せ、皆佛身を得たりしに、シテ謡「今は淋しく凄まじき、地謡「月ばかりこそ昔なれ。孤山の松の間には、よそく、白毫の、秋の月を禮すとか、蒼海の波の上に、わづかに四諦の、曉の雲を引く空の、淋しささぞな鷲の御山、それは上見ぬ方ぞかし。こゝは正に目前の、佛舍利を拜する、御寺ぞ貴かりける。

ワキ謡「不思議やな俄に晴れたる空か曇り、堂前に輝く電光、こはそもいかなる事やらん。シテ謡「今は何をか包むべき、その古への疾鬼が執心、猶此舍利に望あり。謡ゆるし給

化天云々—佛法
にて言ふ天の階
級卅三あり

へや御僧達。ワキ謡「こはそも見れば不思議やな、面色變り鬼となりて、シテ謡「舍利殿に臨み昔の如く、ワキ謡「金冠を見せ、シテ謡「寶座をなして、地謡「栴檀沈瑞香、栴檀沈瑞香の、上に立ち上る雲煙を立てよ、稻妻の光に飛び紛れて、固より足疾鬼とは、足疾き鬼なれば舍利殿に飛び上り、くるくくと、見る人の目を暗めて、その紛れに牙舍利を取つて、天井を蹴破り、虚空に飛んで上ると見えしが、行方も知らず失せにけり。行方も知らず失せにけり。(中入)

韋駄天謡「そもく、是は、この寺を守護し奉る、韋駄天とは我が事なり。詞こよに足疾鬼といふ外道、在世の昔の執心残つて、またこの舍利を取つて行く。謡「いづくまでかは遁すべき、この牙舍利置いて行け。後シテ謡「いや叶ふまじとよこの佛舍利は、誰も望のあるものを、地謡「欲界色界無色界、欲界色界無色界、化天耶摩天他自在天、三十三天攀上りて、帝釋天まで追ひ上ぐれば、梵王天より出で逢ひ給ひて、もとの下界に追つ下す。シテ謡「左へ行くも、地謡「右へ行くも、前後も天地も塞がりて、疾鬼は虚空にくるくると

ると、渦巻い廻るを、韋駄天立ち寄り寶棒にて、疾鬼を大地に打伏せて、首を踏まへて
 牙舍利はいかに、出だせや出だせと責められて、泣くく舍利を指し上ぐれば、韋駄天
 舍利を取り給へば、さばかり今までは足はやく鬼の、いつしか今は足弱車の力も盡き、
 心も茫々と起き上りてこそ、失せにけれ。

小鍛冶

梗 三條の小鍛冶宗近勅命を蒙りて御劔を打つ。その丹誠神
 概 に通じ、稻荷明神示現ありて加勢し給ふ事を作る。文中、劔
 の威徳を述ぶ。(五番目)

シ テ 稻荷明神(前は童子、後は狐) ワ キ 宗近
 ワキツレ 橋道成

宗近一姓は橋
 宿濃大掾たり

道成詞「是は一條の院に仕へ奉る橋の道成にて候。さても今夜帝不思議の御告ましま
 すにより、三條の小鍛冶宗近を召し、御劔を打たせらるべきとの勅説にて候間、只今
 宗近が私宅へと急ぎ候。如何に此屋の内に宗近在るか。ワキ詞「宗近とは誰にて渡り候
 ぞ。道成詞「是は一條の院の勅使にて有るぞとよ。さても帝今夜不思議の御告ましますによ
 り、宗近を召し御劔を打たせらるべきとの勅説なり。急いで仕り候へ。ワキ詞「宣旨畏
 つて承り候。さやうの御劔を仕るべきには、我に劣らぬ者相鎚を仕りてこそ、御

領掌一御受

劔も成就候へけれ。是は兎角の御返事を、申し兼ねたるばかりなり。道成詞「實にくく汝が申す所は、理なれども、帝不思議の御告ましますば、頼もしく思ひつよ、早々領掌申すべしと、誦重ねて宣旨ありければ、ワキ誦「この土は、兎にも角にも宗近が、地誦「兎にも角にも宗近が、進退こよに谷りて、御劔の刃の、亂るよ心なりけり。さりながら御政道、直なる今の御代なれば、若しも奇特の有りやせん、そのみ頼む心かな。そのみ頼む心かな。

稻荷一伏見に鑑坐あり

ワキ誦「言語道斷 一大事を仰せ出だされて候ものかな。かやうの御事は神力を頼み申すならではと存じ候。某が氏の神は稻荷の明神なれば、是より直に稻荷に参り、祈誓申さばやと存じ候。

なべてならざる御事一唯人ならずの意

シテ誦「なうくあれなるは三條の小鍛冶宗近にて御入り候か。ワキ誦「不思議やななべてならざる御事の、我が名をさして宣ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ誦「雲の上なる帝より、劔を打ちて参らせよと、汝に仰せ有りしよなう。ワキ誦「さればこそそれに付けても

壁に耳岩の物いふ一秘密の洩るる意

猶々不思議の御事かな。劔の勅も只今なるを、早くも知し召さるよ事、返すくも不審なり。シテ誦「實にくく不審はさる事なれども、我のみ知ればよそ人までも、ワキ誦「天に聲あり、シテ誦「地に響く、地誦「壁に耳、岩の物いふ世の中に、岩の物いふ世の中に、隠れはあらじ殊に猶、雲の上人の御劔の、光は何か暗からん。只頼めこの君の、恵によらば御劔も、などか心に適はざる、などかは適はざるべき。

漢王云々一朗詠集の漢高三尺之劔坐制諸侯を引く漢高は漢の高祖

グリ地誦「それ漢王三尺の劔、居ながら秦の亂れを治め、又煬帝かけいの劔、周室の光を奪へり。シテ誦「その後立宗皇帝の鍾馗大臣も、地誦「劔の徳に魂魄は、君邊に仕へ奉り、シテ誦「魍魎鬼神に至るまで、地誦「劔の刃の光に恐れて、その寇をなす事を得ず。シテ誦「漢家本朝に於て劔の威徳、地誦「申すに及ばぬ奇特とかや。又我が朝のその始め、人皇十二代、景行天皇、詔の御名をば、日本武と申しよが、東夷を退治の勅を受け、關の東も遙かなる、東の旅の道すがら、伊勢や尾張の海面に、立つ波までも、歸る事よと羨み、いつか我も歸る波の、衣手にあらめやと、思ひつゞけて行く程に、シテ誦「こよやかし

伊勢や尾張の云云一伊勢物語を引く

戸さしを忘れ
太平の象

この戦ひに、地謡「人馬巖窟に身を碎き、血は涿鹿の川となつて、紅波楯流し、數度に及べる夷も、兜を脱いで牙を伏せ、皆降參を申しけり。尊の御宇より、御狩場を始め給へり。頃は神無月、二十日あまりの事なれば、四方の紅葉も冬枯の、遠山にかよる薄雪を、詠めさせ給ひしに、シテ謡「夷四方を圍みつよ、地謡「枯野の草に火を懸け、餘焰しきりに燃え上り、敵攻鼓を打ちかけて、火焰を放ちかよりければ、シテ謡「尊は劍を抜いて、地謡「尊は劍を抜いて、あたりを拂ひ忽に、焰も立ち退けと、四方の草を薙ぎ拂へば、劍の精靈嵐となつて、焰も草も吹き返されて、天に輝き地に満ちくつて、猛火は却つて敵を焼けば、數萬騎の夷どもは、忽こよにて失せてんけり。その後四海治まりて、人家戸さしを忘れしも、その草薙の故とかや。只今汝が打つべき、其瑞相の御劍も、いかでそれには劣るべき。傳ふる家の宗近よ、心安く思ひて下向し給へ。

ワキ調「漢家本朝に於て劍の威徳、時に取つての祝言なり。さてく御身は如何なる人ぞ。シテ調「よし誰とても只頼め、まづく勅の御劍を、打つべき壇を飾りつよ、謡「その時我

南瞻一須彌四洲
の内の
僧伽陀國一天竺
天國一刀鍛冶の
元祖
恒沙一多數の意

を待ち給はど、地謡「通力の身を變じ、通力の身を變じて、必ず其時節に、参り會ひて御力を、附け申すべし待ち給へと、夕雲の稻荷山、行方も知らず失せにけり。行方も知らず失せにけり。(中入)

ワキ謡「宗近勅に隨つて、即ち壇に上りつよ、不淨を隔つる七重の注連、四方に本尊を懸け奉り、幣帛を捧げ、仰ぎ願はくは、宗近時に至つて、人皇六十六代、一條の院の御宇に、其職の譽を蒙る事、是私の力にあらず。伊弉諾伊弉册の、天の浮橋を踏み渡り、豊蘆原を探り給ひし、御矛より生まれり。その後南瞻僧伽陀國、波斯彌陀尊者より此方、天國ひつきの子孫に傳へて今に至れり。願はくは、地謡「願はくは、宗近私の功名に非ず、普天卒土の勅命によれり。さあらば十方恒沙の諸神、只今の宗近に、力を合はせてたび給へとて、幣帛を捧げつよ、天に仰ぎ頭を地に付け、骨髓の丹誠、聞き入れ納受せしめ給へや。ワキ謡「謹上再拜。

地謡「いかにや宗近勅の劍、いかにや宗近勅の劍、打つべき時節は虚空に知れり。頼めや

小狐一谷に稻荷の神體を狐なりとす

頼め只頼め。(舞徳) シテ謡「童男壇の上にあがり、地謡「童男壇の上にあがつて、宗近に参拜の膝を屈し、さて御劔の鐵はと問へば、宗近も恐悦の心を先として、鐵取り出だし、教への鏈をはつたと打てば、シテ謡「ちやうと打つ。地謡「ちやうくくと、打ち重ねたる鏈の音、天地に響きておびたよしや。
ワキ詞「かくて御劔を、打ち奉り、表に小鍛冶宗近と打つ。シテ謡「神體時の弟子なれば、小狐と裏にあざやかに、地謡「打ち奉る、御劔の、刃は雲を亂したれば、天の叢雲とも是なれや。シテ謡「天下第一の、地謡「天下第一の、二つ銘の御劔にて、四海を治め給へば、五穀成就もこの時なれや。即ち汝が氏の神、稻荷の神體小狐丸を、勅使に捧げ申し、是までなりと言ひ捨てよ、又群雲に飛び乗り又群雲に飛び乗りて東山、稻荷の峯にぞ歸りける。

石橋

梗 寂昭法師入宋して、清涼山下の石橋に到りしに、樵童あらはれて橋の由来を物語り、後、獅子舞の奇特に逢ふ。能としては重き習物なり。

シテ 獅子(前樵童) ワキ 寂昭法師

定基一賢光の子
文章家永延二年
出家長保四年入
宋
清涼山一天台山
にある寺
石橋一廣さ尺に
満たず長さ數歩
其下數千丈と傳
ふ
山路に云々一朗
詠集に山路日暮
滿耳者樵歌牧
笛之聲
誤つて云々一同
書に誤入、仙家
雖爲半日之客

ワキ詞「是は大江の定基といはれし寂昭法師にて候。我入唐渡天し、初めて彼方此方を拜み廻り、只今清涼山に参り候。是に見えたるが石橋にて有りけに候。暫く人を待ち委しく尋ね、この橋を渡らばやと存じ候。
シテ一雙謡「松風の、花を薪に吹き添へて、雪をも運ぶ山路かな。サン山路に日暮れぬ、樵歌牧笛の聲、人間萬事さまぐの、世を渡り行く身の有様、物毎に遮る眼の前、光の陰をやおくるらん。下歌餘りに山を遠く来て、雲又跡を立ち隔て、上歌入りつる方も白波の、入りつる方も白波の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし。實にや誤つて半日の客たり

恐歸舊里縁逢
七世之孫

りしも、今身の上いまみの上へに知られたり。今身の上いまみの上へに知られたり。
ワキ詞「如何いかに是これなる山人やまびとに尋たづぬべき事ことの候とき。シテ詞ことば「何事なにことを御尋おんたづね候ときふぞ。ワキ詞ことば「是これなるは承うけたまはり及びおよびたる石橋しやくけうにて候ときか。シテ詞ことば「さん候ごころ是これこそ石橋しやくけうにて候とき。向むかひは文殊もんじゆの淨土じやうど清涼山しやうりやうせん、よく御拜おんをがみ候ときへ。ワキ詞ことば「さては石橋しやくけうにて候ときひけるぞや。さあらば身命しんみやうを佛力ぶつりきにまかせ、此橋このはしを渡わたらばやと思おもひ候とき。シテ詞ことば「暫しばらくく候ごころ。其上かみ名なを得え給たまひし高僧かうそう達たちも、難行なんぎやう苦行くぎやう捨身しやしんの行ぎやうにて、ことにて月日つきひを送おくり給たまひてこそ、橋はしをば渡わたり給たまひしに、誰たれ獅子ししは小蟲せうちゆうを食くはんととも、先勢まづいきほひをなすところ聞きけ、我が法力ほふりきのあればとて、行ゆく事こと難かたき石の橋はしを、たやすく思おもひ渡わたらんとや。あら危あやふしの御事ごごや。ワキ詞ことば「謂いはれを聞きけば有あり難かたや。只世ただよの常つねの行人ぎやうじんは、左右さうな無なう渡わたらぬ橋はしよなう。シテ詞ことば「御覽ごらん候ごころへこの瀧波たきなみの、雲くもより落おちて數千丈すせんぢやう、瀧壺たきづはまでは霧深きりふかうして、身みの毛けもよだつ谷深たにふかみ、ワキ詞ことば「巖岨いははか々々たる岩石がんせきに、シテ詞ことば「わづかに懸かる石の橋はし、ワキ詞ことば「苔こけは滑なめりて足あしもたまらず、シテ詞ことば「渡わたれば目めもくれ、ワキ詞ことば「心こころもはや、上歌うた地謡ぢぢゆう「上の空そらなる石の橋はし。上の空そらなる石の橋はし、まづ御覽ごらんぜよ橋はしもとに、歩あゆみ臨のぞめばこの橋はしの、面おもては

泥梨—地獄のこ

尺しゃくにも足たらずして、下したは泥梨でいりも白波しらなみの、虚空こくうを渡わたる如ごとくなり。危あやふしや目めもくれ心こころも、消ぎえ消ぎえとなりけり。おほろけの行人ぎやうじんは、思おもひもよらぬ御事ごご。
ワキ詞「なほく橋はしのいはれ委くはしく御物語おんものごたり候ごころへ。クリ地謡ぢぢゆう「夫それ天地開闢てんちかいびやくの此方このかた、雨露うろを降くだして國土こくどを渡わたる、是これすなはち天あまの浮橋うきはしともいへり。シテ、サシ謡さしぢゆう「その外國土こくど世界せかいに於おいて、橋はしの名所なごころさまざまにして、地謡ぢぢゆう「水波すゐはの難なんをのがれ、萬民ばんみん富とめる世よを渡わたるも、すなはち橋はしの徳とくとかや。クセしかるにこの石橋しやくけうと申まをすは、人間にんげんの渡わたせる橋はしにあらず、おのれと出現しゆつげんして、つゞける石の橋はしなれば、石橋しやくけうと名なを名なづけたり。その面おもてわづかに、尺しゃくよりは狭せはうして、苔こけ甚こほだ滑なめかなり。その長ながさ三丈餘さんぢやうよ、谷たにのそくばく深ふかき事こと、千丈餘せんぢやうよに及およべり。上うへには瀧たきの糸いと、雲くもより懸かり、下したは泥梨でいりも白波しらなみの、音おとは嵐あらしに響ひびき合あひて、山河さんか震動しんどうし、雨塊あめつちくれを動うごかせり。橋はしのけしきを見渡みわたせば、雲くもにそびゆる粧よそはひの、たとへば夕陽せきやうの雨あめの後に、虹にじをなせる姿すがた、又また弓ゆみを引ひける形かたちなり。シテ詞ことば「遙はるかに臨のぞんで谷たにを見れば、地謡ぢぢゆう「足冷あしすさましく肝消かんしゆうえ、すゝんで渡わたる人もなし。神變じんべん佛力ぶつりきにあらずは、誰たれかこの橋はしを渡わたるべき。向むかひは文殊もんじゆ

獅子團亂旋一樂
名
たいきんりきん
一金裏金又は
體禁離均の字を
充つ

の淨土にて、常に笙歌の花降りて、笙笛琴箏篳篥、夕日の雲に聞え來、目前の奇特あらたなり。暫く待たせ給へや、影向の時節も、今幾程によも過ぎじ。
地謡獅子團亂旋の舞樂の砌、獅子團亂旋の舞樂の砌、牡丹の花房にほひ満ちく、たいきんりきんの獅子頭、打てや囃せや、牡丹芳、牡丹芳、黄金の藥現れて、花に戯れ枝に臥し轉び、實にも上なき獅子王の勢、靡かぬ草木も無き時なれや、萬歳千秋と舞ひ納め、萬歳千秋と舞ひ納めて、獅子の座にこそ直りけれ

外十

合浦

梗概

鯨人、人家に寄寓し、去るに臨みて、報謝のため、泣く涙を寶の珠として、殘しきと云ふ漢土の故事を主とし、後漢の孟嘗の太守たりし合浦の地に結附けて作れり。(五番目)

シテ 鯨人(前は童子) ワキ 里人

ワキ詞「是は唐合浦と申す所に住まひする者にて候。今日は日もうらよに候程に、浦に出で釣するを眺めばやと思ひ候。狂言シカ〜」

シテ一雙謡「わたづみの、そこともいさやしら波の、龍の都を出づるなり。詞いかにこの屋の内に主やまします。一夜の宿を貸し給へ。ワキ詞「日もはや暮れてとざしつるに、宿とは誰にてましますぞ。シテ詞「よし誰なりともその情に、一村雨の雨宿り、謡「一夜の宿を貸し

たゞく水鶏の
鳴聲は戸を敲く
如し
埴生の小屋一賤
が家
我妹子が一備馬
樂に一妹が門や
せなが門行過ぎ
かねて我行かば
脇笠の雨もやふ
らん死出田長雨
宿り笠宿り宿り
てまからん死出
田長

ひれふし一平伏
ひれは鱗として
魚の縁語
龍女一八才の龍
女が變成男子の
事法華經にあり

給へ。ワキ謡「たゞく水鶏の外面に立つや久方の、埴生の小屋に小雨ふる、シテ謡「床沓えぬれば、ワキ謡「我妹子が、上歌地謡「ひぢ笠の、雨は降り來ぬ雨宿りの、頼む木蔭かや、一樹の陰の宿も、この世ならぬ契なり。一河の流れを汲みて知る、合浦の浦の江のほとり、鱗もなどや命恩の、その情をば知らざらん。その情をば知らざらん。

ワキ謡「何と見申せども更に人間とは見え給はず候。名を御なのり候へ。シテ謡「今は何をかつよむべき、我は鮫人といへる魚の精なり。命をつがれまるらせし、報謝の爲に來りたり。我が泣く涙の露の玉、絶えぬ寶となるべきなり。地謡「鮫人涙に、玉をなして命恩を、寶珠を猶も捧けて、合浦にも入らせ給へと、前なる渚の波の上に、入るよと見えつるが、白魚となつてそのまよに、ひれふして失せにけり。あとひれふして失せにけり。(中入)後シテ謡「龍女は如意の寶珠を釋尊に捧け、變成就の法をなし、地謡「奈落の底の白魚なれども、など命恩を報せざらんと、波立騒ぎ汐うづまいて、うたかたの上にぞ現れたる。(舞飾)シテ謡「是こそ眞如の玉の緒の、地謡「是こそ眞如の玉の緒の、壽命長遠息災延命の寶の

珠はふたよび一
孟嘗太守となり
し時郡内疲弊し
て珠も境を出せ
しに後富み榮え
て再び歸り納ま
る

珠は、當來までの二世の願ひも成就なるべし、是までなりや、織りつる綾の浦は合浦、珠はふたよび歸る波の、千秋萬歳の寶の玉は、千秋萬歳の寶の玉は、合浦の浦にぞをさまりける。

生田敦盛

梗 敦盛の遺孤、法然上人に養はれ居たりしが、御夢想を受けて、津の國生田の森に下り、父の幽靈に逢ふ。恩愛孝養の情偲ばれてあはれなる曲なり。(二番目)

シテ 平敦盛 子方 同遣子 ワキ 法然上人の從者

法然上人一淨土宗の開祖

ワキ詞「是は黒谷法然上人に仕へ申す者にて候。又是に渡り候人は、あるとき上人加茂御參詣御下向の時、さがり松の下に二歳ばかりなる男子の美しきを、手箱の蓋に入れ尋常に拵へ、捨て置きて候を、上人不便に思召され抱かせ御歸り候ひて、いろく育て給ひ候程に、はや十歳に御餘り候。父母のなき事を歎き給ひ候程に、説法の後此事を御物語り候へば、聽衆の内より若き女性の走り出で、我が子にて候由おほせ候を、ひそかに御尋ね候へば、一年一の谷にて討たれ給ひし、敦盛の御子にておはしました候。この事を聞き給ひて、夢になりとも父の姿を見せて給はり候へと、加茂の明神へ祈誓有るべき由仰

せられ候ひて、一七日詣で給ひ、今日ははや滿參にて候程に、同道申し加茂の明神へ參詣申し候。是ははや加茂の明神にて御座候。よくく御祈誓候へ。

子、サシ誦「有難や所からなる御社の、朱の玉垣神さびて、こころも澄める御手洗の、深き惠を頼むなり。下歌地誦「夢になりともたらちねの、その面影を見せ給へ。上歌かくばかり、祈る心の末遂げば、祈る心の末遂げば、惠になどか漏るべきと、誓ひ糺の神ともに、願ひを叶へおはしませ。願ひを叶へおはしませ。

子詞「あら不思議や少し睡眠の内に、あらたに御靈夢を蒙りて候。ワキ詞「あらめでたやな、御靈夢のやうを御物語り候へ。子詞「あの御寶殿の内よりも、あらたなる御聲にて、汝夢になりとも父を見んと思はど、是より津の國生田の森へ下れと、あらたに靈夢を蒙りて候。ワキ詞「是は不思議なる事にて候ものかな。黒谷へ御歸りあるまでもなく候。是より生田の森へ御供申し候べし、やがて思召し立ち候へ。道行誦「山陰の、賀茂の宮居を立出でて、賀茂の宮居を立出でて、急ぐ行くへは山崎や、霧立渡る水無瀬川、風も身にしむ旅衣、

水無瀬川一攝津

昨日だに一新古今集家隆の歌末句秋は来にけり

秋は来にけり昨日だに、訪はんと思ひし津の國の、生田の森に著きにけり。生田の森に著きにけり。

ワキ詞「御急ぎ候程に、是ははや津の國生田の森にて候。森のけしき川の流、都にて承り及びたるにもいやまさりて面白き名所にて候。あれに見えたる野邊は生田の小野にてもや候らん。立ち寄り詠めばやと思ひ候。こよかしこを詠め候程に、はや日の暮れて候は如何に。あれに燈の影の見えて候は人家にて有りけに候。立ち寄り宿を借らばやと思ひ候。

五瀧一色愛想行誦の五ツナべて空しとなり

シテ、サシ誦「五瀧もとよりこれ皆空、何によつて平生此身を愛せん。苦を守る幽魂は夜月に飛び、屍を失ふ愚魄は秋風に嘯く。あら心すこの折柄やな。ワキ誦「不思議やな是なる草の庵の内に、さも花やかなる若武者の、甲冑を帶し見え給ふぞや、是は如何なる事やらん。シテ誦「おろかの人の心やな。詞面々是まで來り給ふも、我に對面のためならずや。はづかしながら古の、敦盛が幽靈來りたり。子詞「なう敦盛と

絶えこがれ一氣絶の意

撫子一遺子を指す

木曾の棧かけの序詞
天さかる一鄙の枕詞

はわが父かと、身にも覺えず走りより、地誦「袂にすがり絶えこがれ、袂にすがり絶えこがれ、泣く音にたつる鶯の、逢ふ事のうれしさも、うき身にあまるばかりなり。かくは思へど頼まれぬ、夢の契を、現に返すよしもがな。シテ誦「無慙やな忘れがたみの撫子の、花やかなるべき身なれども、衰へはつる墨染の、袂を見るこそあはれなれ、さても御身孝行の心深き故、加茂の明神に歩みを運び、夢になりとも我父の、姿を見せてたび給へと祈誓申す。明神憐れみおはしまし、閻王に仰せつかはさる。閻王仰せを承り、暫の暇を賜はるなり。親子の契も今を限なるべし。地誦「更け行く月の夜もすがら、昔をいざや語らん。クセ然るに平家の、榮花を極めしその始、花鳥風月の戯れ、詩歌管絃のさまざまに、春秋を送り迎へしに、如何なるをりか來りけん、木曾の棧かけてだに、思はぬ敵に落されて、主上を始め奉り、一門の人も悉く、花の都を立ち出で、西海の空に赴きぬ。習はぬ旅の道すがら、山を越え海を渡り、暫は天さかる、鄙の住居の身なりしに、又立ち歸る浦波の、須磨の山路や一の谷、

生田川の身を捨てし大和物語の生田川に身を投げし處女の故事によりて云ふ鸚鵡逢ふを掛

生田の森に著きしかば、こよは都も程近しと、一門の人々も、喜をなしと折節に、
シテ謡「範頼義経の其勢、地謡」雲や霞の如くにて、暫く戦ふといへども、平家は運も楯弓
の、やたけ心もよわくと、皆散りぐになりはてよ、あはれも深き生田川の、身を捨
てし物語、かたるぞよしなかりける。
シテ謡「うれしやな夢の契の假初ながら、親子鸚鵡の袖ふれて、地謡」名残つきせぬ心か
な。(中ノ舞)シテ謡「あれに見えたるは如何なる者ぞ。何閻王よりの御使とや、片時の暇と有り
つるに、今までの遅参心得ずと、謡」閻王怒らせ給ふぞと、地謡「いふかと思れば不思議や
な、いふかと思れば不思議やな、黒雲俄に立ち來り、猛火を放ち劍を降らして、其數知
らざる修羅の敵、天地を響かし満ちくたり。シテ謡」物々し明暮に、地謡「馴れつる修羅の
敵ぞかしと、太刀真向にさしかざし、こよやかしこに走り廻り、火花を散らして戦ひし
が、暫く有りて黒雲も、次第に立ち去り修羅の敵も、忽に消え失せて、月澄み渡りて明
明たる、曉の空とぞなりたりける。シテ謡「恥しや子ながらも、地謡」かく苦しみを見る事

よ、急ぎ歸りてなき跡を、懇に弔ひてたび給へと、泣くく袂を引き別れ、立ち去る
姿は蜻蛉の、小野の浅茅の露霜と、形は消えて失せにけり。形は消えて失せにけり。

草子洗小町

梗

内裏にて歌合ある折、大伴の黒主竊に小野の小町の邸に忍びて、題詠の歌を竊み聴き、さていよ／＼其日となり、小町が歌の殊に叡感ありしを、黒主はかれて奸計を廻らしたる如く、萬葉集に入筆したるを取出して、そは古歌なりと主張す。小町は言ひ説く術なかりしが、やがてこの草紙を洗ひ見んとて、勅許を仰ぎて洗ひしに、入筆の跡失せて、黒主の奸策露顯し、黒主面目を失す。然るに之も亦道を嗜む志苦しからずとて免され、尙小町に舞を奏せしめられて一座めでたく納ることを作る。もと古今集の序に六歌仙の歌風を評して、小野小町は古の衣通姫のなげなり、哀なるやうにて強からず、いはゞよき女の惱める所あるに似たり、強からぬは女の歌なればなるべし。大伴の黒主はそのさま卑しいはば、薪負へる山人の花の陰に休めるが如しとあるに據りて思ひ設けしなり。『蒔かなくに』の歌は、怖らくは、小町の「わびぬれば身を萍のれをたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」の換骨脱胎なるべし。(三番目)

概

シテ 小野小町 子方 帝王 ツレ 貫之

ワキ 大伴黒主 狂言 大伴黒主従者

大伴の黒主一六
歌仙の一人
小野小町一同

救世の提闡一世
を救ふ慈悲者
片岡山の製一河
内の片岡山にて
餓死人を見て
「しなてるや片
岡山に飯に飢ゑ
て臥せる旅人あ
はれ親なし」と
詠み給へり

ワキ詞「是は大伴の黒主にて候。さても明日内裏にて御歌合有るべしとて、黒主が相手に候。さても明日内裏にて御歌合有るべきとて、小町が相手には黒主を御定め候ひて、は小野の小町を御定め候。小町と申すは歌の上手にて、さらに相手には叶ひがたく候程に、明日の歌をさだめて吟ぜぬ事は候まじ、かの私宅へ忍び入り、歌を聞かばやと存じ候。

シテ、サン謡「夫れ歌の源を尋ぬるに、聖徳太子は救世の提闡、片岡山の製を路生に弘め給ふ。詞さても明日内裏にて御歌合有るべきとて、小町が相手には黒主を御定め候ひて、水邊の草といふ題を賜はりたり。おもしろや水邊の草といふ題に浮みて候は如何に。蒔かなくに何を種とて浮草の、波のうねく／＼生ひ茂るらん。詞この歌をやがて短冊に寫しむらはん。

ワキ詞「如何に只今の歌を聞いて有るか。狂言「さん候承りて候。ワキ詞「何と聞いてあるぞ。狂言「蒔かなくに何を種とて瓜蔓の、畑のうねをまるびころびあるくらん。ワキ詞「いや

道可道非常道
老子の語

左様にてはなきぞ、道の道たるは常の道にはあらず、知れるを以て道とす。不得心なる事にて候へども、只今の歌を萬葉の草子に寫し、帝へ古歌と訴へ申し、明日の御歌合に勝たばやと存じ候。

御影―画像を掛けて祭るなり

ワキ、ツレ次第誦「めでたき御代の歌合、めでたき御代の歌合、詠じて君を仰がん。サンときしも頃は卯月半、清涼殿の御會なれば、はなやかにこそ見えたりけれ。ツレ誦かくて人丸赤人の御影を懸け、ワキ立衆誦「おのゝと詠みたる短冊を、われもくと取りいだし、御影の前にぞ置きたりける。ツレ誦「さて御前の人々には、ワキ立衆誦「小町を始め河内の躬恒紀の貫之、ツレ誦「右衛門の府生壬生の忠岑、ワキ立衆誦「ひだりみぎりに著座して、ツレ誦「既に詠をぞ始めける。ほのくと明石の浦の朝霧に、島隠れ行く舟をしぞ思ふ。地誦「實に島隠れ入る月の。實に島隠れ入る月の、淡路の繪島國なれや、始めて歌の遊びこそ、心和ぐ道となれ、その歌人の名所も、みな庭上に並みつと、君の宣旨を待ち居たり。君の宣旨を待ち居たり。

躬恒―古今集の撰者
貫之―同
忠岑―同
ほのくと―此の歌を人丸の詠として古今集に出せり

衣通姫―九蒸天皇の御妃玉津島明神は姫を祀る和歌三神の一つ

王「いかに貫之。ツレ「御前に候。王「始めより小町が相手には黒主を定めたり。まづまづ小町が歌を讀み上げ候へ。ツレ「畏つて候。水邊の草、誦まかなくに何を種とて浮草の、波のうねくと生ひ茂るらん。王「面白と詠みたる歌や。この歌に優るはよもあらず。皆々詠じ候へ。ツレ「畏つて候。ワキ「暫く候。これは古歌にて候。王「なにと古歌と申すか。ワキ「さん候。王「如何に小町、何とて古歌をば申すぞ。ツレ「恥しの勅説やな。先代の昔はそも知らず、既に衣通姫此道のすたらんことをなけき、和歌の浦わに跡を垂れ給ひ、玉津島の明神より此方、皆この道を嗜むなり。それに今の歌を古歌と仰せ候は、古今萬葉の勅撰にて候か。又は家の集にて有るやらん。作者は誰にてましますぞ、委しく仰せ候へ。ワキ「仰せの如くその證歌分明ならでは如何でか奏し申すべき。草子は萬葉題は夏、水邊の草とは見えたれども、讀人知らずと書きたれば、作者は誰とも存せぬなり。ツレ「夫れ萬葉は奈良の天子の御宇、撰者は橘の諸兄、歌の数は七千首に及んで皆妾が知らぬ歌はさむらはす、萬葉といふ草子に數多の本の候か。覺束なうこそ候へ。

猿丸大夫—近江の人黒主も同國の人にて縁ありとするなり

富士のなるさの大將—徳大寺左大臣無明の酒を名も無き酒と詠みて名無しの大將といはれ俊成富士の鳴瀬をなると詠みてなるさの入道といはれ失策談を交ぜたるさの大將といへるなり
四病八病—喜撰式に見え其他歌の書き體を數へ立てたるにてと詩學より出づ三代八部—古今

ワキ詞「けにくくそれはさる事なれどもさりながら、御身は衣通姫の流なれば、あはれむ歌にて強からねば古歌を盗むは道理なり。シテ詞「さてはおことは古の猿丸大夫の流れ、それは猿猴の名を以て、我が名をよそに立てんとや。正しくは古歌ならず。ワキ詞「花の蔭ゆく山賤の、シテ詞「そのさま賤しき身ならねば、何とて古歌とは見るべきぞ。ワキ詞「さて詞をたどさで誤りしは、富士のなるさの大將や、四病八病三代八部同じ文字、シテ詞「文字もかほどの誤は、ワキ詞「昔も今もシテ謡「有りぬべし。地謡「不思議や上古も末代も、三十一字の其内に、一字も變らで詠みたる歌、是萬葉の歌ならば、和歌の不思議と思ふべし。さらば證歌を出させとの、宣旨度々下りしかば、初めは立春の題なれば、花も盡きぬと引き開く、夏は涼しき浮草の、これこそ今の歌なりとて、既に讀まんとさし上ぐれば、我身に當らぬ歌人さへ、胸に苦しき手を置き。ましてや小町が心の内、たゞ轟の橋打渡りて、危き心は隙もなし。

シテ謡「恨めしやこの道の、大祖梯の本の太夫君も、小町をば捨てはて給ふか恨めしやな。

集より新古今集迄の物撰集しどろ—亂れたること

人目さがなや—面目無し

この歌古歌なりとて、左右の大臣その外の、局々の女房達も、小町ひとりを見給へば、夢に夢見る心地して、さだかならざる心かな。此草子を取り上げ見れば、行の次第もしどろにて、文字の墨付違ひたり、詞如何さま小町がひとり詠ぜしを黒主立聞し。帝へ古歌と訴へ申さん爲に、謡「この萬葉に入筆したると覺えたり。あまりに恥しうさむらへば、清き流れをむすび上げ、此草子を洗はばやと思ひ候。ツレ詞「小町はさやうに申せども、若し又さなき物ならば、青丹衣の風情たるべし。シテ謡「とにかくに思ひまはせども、やるかたもなき悲しさに、地謡「泣くく立ちてすごとくと、歸る道すがら人目さがなや恥しや。ツレ詞「小町暫く御待ち候へ。その由奏聞申さうするにて候。如何に奏聞申し候。小町申し候は、只今の萬葉の草子をよくく見候へば、行の次第もしどろにて、文字の墨付も違ひて候程に、草子を洗ひて見たき由申し候。王詞「實にくく小町が申す如く、さらば洗ひて見よと申し候へ。ツレ詞「畏つて候。如何に小町勅詔にて有るぞ、急いで草子を洗ひ候へ。シテ謡「繪言なればうれしくて、落つる涙の玉襷、結んで肩に打掛けて、既に草

天の川瀬に下洗ふといふ語を縁にして續けたり
穎川云々許由の故事

住吉和歌三神の一つ

子を洗はんと、次第地謡「和歌の浦わの藻鹽草、和歌の浦わの藻鹽草、波寄せかけて洗はん。
シテ謡「天の川瀬に洗ひしは、地謡「秋の七日の衣なり。シテ謡「花色衣の袂には、地謡「梅の句
や交らん。雁がねの、翅は文字の數なれど、跡定めねば顯れず、穎川に耳を洗ひしは、
シテ謡「濁れる世を澄ましけり。地謡「舊苔の鬚を洗ひしは、シテ謡「川原に解くる薄氷、地謡「春
の歌を洗ひては、霞の袖を解かうよ。シテ謡「冬の歌を洗へば、冬の歌を洗へば、地謡「袂も
寒き水鳥の、上毛の霜に洗はん、上毛の霜に洗はん。戀の歌の文字なれば、忍草の墨消
え、シテ謡「涙は袖に降りくれて、忍草も亂るよ、忘れ草も亂るよ。地謡「釋教の歌の數々は、
シテ謡「蓮の糸ぞ亂るよ。地謡「神祇の歌は榊葉の、シテ謡「庭火に袖ぞ乾ける。地謡「時雨に濡
れて洗ひしは、シテ謡「紅葉の錦なりけり。地謡「住吉の、住吉の、久しき松を洗ひては、岸
に寄する白波を、さつと掛けて洗はん。洗ひくく取り上げて見れば不思議やは如何
に、數々のその歌の、作者も題も文字の形も少しも亂るよ事もなく、入筆なれば浮草の、
文字は一字も、残らで消えにけり。有難やく。出雲住吉玉津島、人丸赤人の、御惠か

と伏し拜み、悦びて龍顔にさし上げたりや。

ワキ詞「よくく物を案ずるに、かほどの恥辱よもあらず、自害をせんと罷り立つ。シテ謡「な
うなう暫く。謡「この身皆以て、その名ひとりに残るならば、何かは和歌の友ならん。道を
嗜む志、誰もかうこそ有るべけれ。王詞「如何に黒主。ワキ詞「御前に候。王詞「道を嗜む者
は誰もかうこそ有るべけれ。苦しからぬ事座敷へ直り候へ。ワキ詞「これ又時の面目なれば、
宣言をいかで背くべき。黒主御前に畏る。

地謡「實に有難き砌かな。小町黒主遺恨なく、小町に舞を奏せよと、おのく立ちより花
の打衣、風打烏帽子を著せ申し、笏拍子を打ち座敷を静め、シテ謡「春來つては、偏くこ
れ桃花の水、地謡「石に障りて遅く來れり。シテ謡「手まづ遮る花の一枝、地謡「桃色の衣や重
ぬらん。シテ謡「霞たつ、(中ノ舞)ワカ霞立てば、遠山になる朝ほらけ、地謡「日影に見ゆる松は千
代まで、松は千代まで、四海の波も四方の國々も、民の戸ざしもさよぬ御代こそ、堯舜
の嘉例なれ、大和歌の起りは、荒金の土にして、素蓋鳴尊の、守り給へる神國なれば、

春來暹是桃花水
朗詠集の句又
次に磯石運來
心竊待牽流遣
過手先遣をも引
けり

花の都みやこの春も長閑のじかに、花の都みやこの春も長閑のじかに、和歌わかの道こそめでたけれ。

六浦むつら

概梗

六浦の稱名寺に青葉の楓あり 旅僧詣でて里人にその由
來を聞きやがて楓の精夢中に現れ出づることを作る。

(三番目)

シテ 楓の精(前は里女) ワキ 旅僧

ワキ次第謡「思ひやるさへ遙なる、思ひやるさへ遙なる、東の旅に出でうよ。ワキ詞「是は洛陽
の邊より出でたる僧にて候。我未だ東國を見ず候程に、この秋思ひ立ち陸奥の果までも
修行せばやと思ひ候。ワキ三人道行謡「逢坂の、關の杉村過ぎがてに、關の杉村過ぎがてに、ゆ
くへも遠き湖の、舟路を渡り山を越え、幾夜な夜なの草枕、明け行く空も星月夜、鎌
倉山を越え過ぎて、六浦の里に著きにけり。六浦の里に著きにけり。
ワキ詞「千里の行も一步より起るとかや、はるぐと思ひ候へども、日を重ねて急ぎ候程
に、是ははや相摸國六浦の里に著きて候。この渡りをして安房の清澄へ參らうするにて

星月夜―鎌倉の
枕詞

六浦―武州金澤
清澄―日蓮上人

の剃髪せし寺な

候。又あれに由ありけなる寺の候を人に問へば、六浦の稱名寺とかや申し候程に、立ち寄り一見せばやと思ひ候。なうく御覽候へ山々の紅葉今を盛と見えて、さながら錦を晒せる如くにて候。都にもかやうの紅葉の候べきか。又是なる本堂の庭に楓の候が、木立餘の木に勝れ、只夏木立の如くにて、一葉も紅葉せず候。如何さま謂れのなき事は候まじ、人來りて候はど尋ねばやと思ひ候。

爲相一定家の孫
爲家の子母は阿
佛尼

シテ謡「なうく御僧は何事を仰せ候ぞ。ワヤ謡さん候。是は都より始めてこの所一見の者にて候が、山々の紅葉今を盛と見えて候に、是なる楓の一葉も紅葉せず候程に、不審をなし候。シテ謡けによく御覽じ咎めて候、いにしへ鎌倉の中納言爲相の卿と申し人、紅葉を見んとてこの所に来りたまひし時、山々の紅葉いまだなりしに、この木一本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば、爲相の卿とりあへず、謡如何にしてこの一本に時雨けん、詞山にさきだつ庭のもみぢ葉と詠じ給ひしより、今に紅葉をとどめて候。ワヤ謡「おもしろの御詠歌やな。われ數ならぬ身なれども、手向のためにかくばかり、謡舊りはつるこの

功成名遂身退天
道一老子の語

一本の跡を見て、袖のしぐれぞ山にさきだつ。

シテ謡「あら有難の御手向やな。いよくこの木の面目にてこそ候へ。ワヤ謡「さてく先に爲相の卿の御詠歌より、今に紅葉をとどめたる、謂れは如何なる事やらん。シテ謡「實に御不審は御理。さきの詠歌に預りし時、この木心に思ふやう、かよる東の山里の、人も通はぬ古寺の庭に、われさきだちて紅葉せずは、いかで妙なる御詠歌にも預るべき、謡功成り名遂けて身退くは、詞是天の通なりといふ古き言葉を深く信じ、今に紅葉をとどめつと、只常磐木の如くなり。ワヤ謡「是は不思議の御事かな。この木の心をかほどまで、知しめしたる御身はさて、如何なる人にてましますぞ。シテ謡「今は何をか包むべき、我はこの木の精なるが、御僧たつとくまします故に、只今現れ來りたり。謡今宵はこよに旅居して、夜もすがら御法を説き給はど、重ねて姿を見え申さんと、下歌地謡「夕べの空も冷ましく、この古寺の庭の面、霧の籠の露深き、千草の花をかき分けて、ゆくへも知らずなりにけり。ゆくへも知らずなりにけり。(中入)

三八上歌謡所から、心になふ稱名の、心になふ稱名の、御法の聲も松風も、はや更け過ぐる秋の夜の、月澄み渡る庭の面、寝られんものかおもしろや。寝られんものかおもしろや。

後シテ一疊謡「あら有難の御巾ひやな。妙なる値遇の縁に引かれて、二度こゝに來りたり。夢ばしさまし給ふなよ。リヤ謡 不思議やな月澄みわたる庭の面に、有りつる女人と思しくて、影の如くに見え給ふぞや。草木國土悉皆成佛の、この妙文を疑ひ給はで、なほく昔を語り給へ。

シテ、リヤ謡「夫れ四季をりくくの草木、おのれくくの時を得て、地謡「花葉さまざまのその姿を、心なしとは誰かいふ。シテ、サン謡「先づ青陽の春のはじめ、地謡「色香妙なる梅が枝の、かつ咲きそめて諸人の、心や春になりぬらん。シテ謡「又は櫻の花盛、地謡「只雲とのみ三吉野の千本の花にしくはなし。クセ月日経て移れば變る詠めかな。櫻は散りし庭の面に、咲きつどく卯の花の、垣根や雪に紛ふらん。時移り夏暮れ、秋も半になりぬれば、空定

露時雨云々古
今集に「白露も
時雨もいたくも
る山は下葉残ら
ず色づきにけ
り」
佛果成佛

秋の夜の云々
伊勢物語の歌

吹きしをり吹
き挽むこと

めなき村時雨、きのふは薄きもみち葉も露時雨もる山は、下葉残らぬ色とかや。シテ謡「さるにても、東の奥の山里に、地謡「あからさまなる都人の、哀も深き言の葉の、露の情に引かれつゝ姿をまみえ数々に、言葉を交す値遇の縁、深き御法を授けつゝ、佛果を得しめ給へや。

シテ謡「更け行く月の夜遊をなし、地謡「色なき袖をや返さまし。(序ノ舞)シテ、リヤ謡「秋の夜の、千夜を一夜に重ねても、地謡「言葉残りて鳥や鳴かまし。

シテ謡「八聲の鳥も数々に、地謡「八聲の鳥も数々に、鐘も聞ゆる、シテ謡「明方の空の、地謡「所は六浦の浦風山風、吹きしをり吹きしをり、散るもみち葉の月に照り添ひて、唐紅の庭の面、明けなば恥し、暇申して歸る山路に、行くかと思へば木の間の月の、行くかと思へば木の間の月の、かけろふ姿となりにけり。

松山鏡

梗 概

越後の松の山家に、母に別れし少女亡き母を慕ひてその形見の鏡を取出しては己が姿の映るを、母よと懐しがりて暮せりと、いふを前段とし、後段にては、母は地獄にありたれど、孝女の弔ひによりて、極樂往生をなす事を作る。(五番目)

シテ 俱生神 ツレ 母 ツレ 姫 ワキ 父

對の屋—寢殿造りの建築にて東西に構へたる建物
雲となり雨となり—楚襄王神女に會ひて別る時神女の言ひし語

ワキ詞「是は越後國松の山家に住まひする者にて候。さても某久しく添ひ馴れし妻に後れ、昨日今日とは存じ候へども、はや三年になりて候。又忘れ形見に姫を一人持ちて候が、あまりに母が事を歎き候程に、對の屋を作り、傍に置きて候。又今日は彼が母の命日にて候程に、持佛堂に立ち出で、焼香せばやと思ひ候。
姫、サン謡「雲となり雨となり、陽臺の時留め難く、花と散り雪と消え、金谷の春ゆくへもなし。月日の道に關守なければ、母御に離れて今年にはや、既に三年のその日なり。」

金谷—曾の石崇の別荘

ワキ詞「あら無慙や、何事やらん姫が獨言を申し候。いかに姫が有るか。父が來りたるぞ、持佛堂を開け候へ。あら不思議や、何やらん物を立ち隠すやうに候。如何に姫、さても汝が母に後れし時、元結切り遁世せばやと存じ候ひつれども、一族どもの諫めにより、今まで浮世の住まひたり。汝男子ならば父と一所に有るべけれども、女子なれば對の屋を作り置くなり。それに父が來りて姫よと呼ばよ、さも嬉しけにて立ち迎ふべきにさはなくして、何やらん物を立ち隠すけしきの見えて候。さては人の申すも誠に候ひけるぞや、實に汝は今の母を木像に作り、明暮呪咀するといふは真か。何とてさやうにあさましき心をば持ちて有るぞ。母を戀しく思はど、經念佛し弔ひてこそ、死したる母も成佛し、おことも同じ蓮の縁となるべきにさはなくして、さやうに恐しき事をたくまば、正しく浮べき母も奈落に沈み、おことも同じ罪に沈むべき事にあさましきよ。何とて物をば申さぬぞ。姫、さやうに御叱り候はど、隠さず申し候べし。いたはしや母御前、今を限りの御時、この鏡を和御前に取らすなり、母が姿を殘す形見なり、戀しき時は見

鏡山古今集黒
主の歌に「鏡山
いざ立寄りて見
て行かん年経ぬ
る身は老いやし
ぬると」とある
を鏡の縁にて引

るべしと、仰せ候ひし程に、ある時この鏡を見れば、母の面立映りしより、猶若やぎて見え給へば、上歌地謡さてはなからん跡までも、さてはなからん跡までも、添ひ添はれんと面影を、残させ給ひける。母御の慈悲ぞ有難き。不審に思召されば、見せ参らせん鏡山、立ち寄り給へ父御前、立ち寄り給へ父御前。
ワヤ調「是は不思議なる事を申す物かな。空しくなりし母の何しに鏡に映りて見え候べき。但しきつと思ひ出だしたる事の候。漢の武帝の後李夫人亡くならせ給ひて後、帝後の御別れを悲しみ給ひ、御姿を甘泉殿の壁に寫し、明暮観覽有りしかども、もとより繪に書ける形なれば物いはず笑はず、なか／＼愁ぞ増ると悲しみ給ふ。ある時仙人の告けて曰く、まこと後の御姿を、観覽有りたく思召さば、月の夜の隈なからんに、反魂香を焚き給へと有りしかば、教へにまかせて月の夜の隈なきに、反魂香を焚き給へば、煙の内に後の御姿まみえ給ひし例もあり。又我朝の聖武皇帝の後、光明皇、后亡くならせ給ひて後、是も後の御別れを悲みたまひ、梵天に祈誓し給へば、閻王憐みたまひ、玉の輿

山鳥の一尾をを
るといふより愚
に掛く山鳥のを
るのはつをに鏡
掛けといふ歌あ
り山鳥の友を懸
ひしに鏡を見せ
し話枕草子に出
づ
垂乳根の一拾遺
集の歌三句以下
眉ごもりいぶせ
くもあるか妹に
あはせて
無佛世界一愚癡
者の多き土地

に乗せ奉り、二たび娑婆に送り給ひし例もあり。さりながらそれは上代の事、是は末世の今の世に、さやうの事の有るべきとは存じ候はねども、かれが母も娘に名残を深く惜しみ候ひし程に、もし又さやうの事もや候らん、立寄りて鏡を見ばやと存じ候。や、さればこそ筋なき事を申し候。やあ如何に娘、この鏡に母が影のうつる事はなきぞとよ。何とて筋なき事をば申すぞ。地謡恨めしやあれ程母のましますを、思ひ隔てよ山鳥の、おろかに見させ給ふかと、鏡の前に泣き居たり。クドヤ實にや別れての、涙も未だ干ぬ袖に、異妻を重ね給ひぬれば、其恨みにや戀衣の、見えじと思召さるらめ、よし父にこそ疎くとも、地謡我には見えよ垂乳根の、親の飼ふ蠶の、いと細し誰をかも、戀ひ瘦せ顔ぞ見ても泣く、涙がすみの悲しやな。底より曇り増鏡、あれこそ母よ御覽せよと、我が影に指をさす。實にあはれなりさればこそ、幼き身の心なれ。幼き身の心なれ。
ワヤ調「言語道断の事。我が影の鏡に映るを見て、母が影にて有る由を申し候は如何に。總じてこの松の山家と申すは、無佛世界の所にて、女なれども齒鐵漿をつけず、色を飾る

三吉野の云々
古今六帖の吉
野川岸の山吹吹
く風に底の影さ
へうつるひにけ
りの意

往事渺茫都似
覆蒼友零落半歸
泉一白氏文集
の句泉は黄泉な
り冥途也

事もなければ、まして鏡などと申す物をも知らず候ひしを、某一年都に上りし時、鏡を一面買ひとりて彼が母に取らせて候へば、世になき事に悦び候ひしが、今はのとき姫を近づけ、我を戀しく思はん時は、この鏡を見よと申しと程に、我が影の映るを見て母と思ひ歎く事の不便さは候。いやしく所詮鏡の謂れを語つて歎きをとどめばやと思ひ候。やあ如何に姫、總じて鏡といふ物には、何にてもあれ向ふ物の影の映るぞとよ、是は見候へ。父が立ちよれば父が影、扇を映せば扇の影、こよを以て思ひ知れ。地謡實に實に父の仰せの如く、今こそかくとも三吉野の、ワヤ謡岸の山吹風吹けば、地謡底なる影も散れば散り、ワヤ謡靡けば靡く歎冬冬、地謡影をあやまつ、ワヤ謡はかなさよ。地謡子ながらも、是ほど母に似けるよと、わが影ながら懐しや。ワヤ謡父は涙にかきくれてや、地謡「我こそは曇らすれ、面目なの鏡や。」

之を水と云々
源順の賦花光
浮水上の文句
陳氏陳の徐徳
言の妻

冥官地獄の官
人

地謡「即ち漢女が粉を添ふる鏡清瑩たり。母謡花といはんとすれば蜀人文を洗ふ錦。地謡我とても、娑婆の故郷に立ち歸らば、錦の袴君が爲、母謡昔を語り申すべし。地謡夢驚かし給ふなよ。クセ唐に陳氏とて、賢女の聞え有りけるが、世の習思はずも、夫遠行の子細あり、是や限と思ひけん、形見の鏡割りて猶、光ぞ残る三日月の、背に待ち明けて恨み、文も絶え主も來ず、憂き年月を故郷の、軒端の萩の秋更けて、風の便りの傳聞けば、夫はその國の主となり、あらぬ妹背の川波の、立ち歸るべきやうもなし。さては逢ふ事もかた見の鏡我ひとり、涙ながらに影見れば、半月の山の端に、打ち傾いて泣くならで、せん方もなき折節に、母謡いづくよりとも知らざりし、地謡鵲一つ飛び來り、陳氏が肩に羽を休め、飛び廻り飛び下り、舞ふよと見しが不思議やな、有りし鏡の割となり、もとの如くになりけり。満月の山を出で、碧天を照らす如くなり。是や賢女の、名を磨く鏡なるべし。後シテ謡如何に罪人何とて遅きぞ。詞片時の暇といひつるに、謡冥官怒をなし給へば、

俱生神一罪人を責むる神
玻璃の鏡一閻魔の廳にあり

詞 俱生神急ぎ苦患を見せよとの仰せを蒙り、瞋恚の燃えたつ熱鐵の笞を振り上げて、地誦「うつ蟬の、うつ蟬の、骸は娑婆にや留まるらん、魂は冥途にもぬけの衣の、玻璃の鏡の潔き、面前に引つさけ引き向け、あれ見よ娑婆にての罪科よ。(舞舞) シテ舞こは如何に不思議やな、地誦こは如何に不思議やな、孝子の弔ふ功力によつて、鏡の影をよくよく見れば、頭に玉釵膚は金色、兩臂をかどみて手を合はすれば、さながら菩薩の坐像かと、御空に花降り虚空に音楽、聞かず見もせぬ冥途の奇特、すはや地獄に歸るぞとて、大地をかつばと踏み鳴らし、大地をかつばと踏み破つて、奈落の底にぞ入りにける。

外十一

金札

梗概

桓武天皇御遷都の砌、勅使伏見に至りて神社遺營の折ふし、奇特に逢ふ由を作る。祝言能なり。

シテ 天太玉神(前は老翁) ワキ 勅使

三人 次第誦 風も靜に櫛の葉の、風も靜に櫛の葉の、鳴らさぬ枝ぞ長閑けき。ワキ 詞 抑是は桓武天皇に仕へ奉る臣下なり。さても山城國愛宕の都に、平の都をたて置き給ひ、國土安全のみぎんなり。同じく當國伏見の里に、大宮造有るべきとの勅詔を蒙り、只今伏見に下向仕り候。三人 上歌 嬉しきかなやいざさらば、嬉しきかなやいざさらば、この松蔭に旅居して風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん、神の告をも待ちて見ん。シテ

平の都一延暦十三年平安京遷都
伏見云々一金札
宮とて天太玉命
を祀る社を造營
せらるるなり

眞如の櫓弓十月より櫓につどく蒼蠅なす一悪神の形容ひもろぎ一神籙

謡「守るべし、我が國なれば皇の、萬代いつと限らまし。地謡「限らじな限らじな、榮ゆく御代を守のしるし、シテ謡「たど重くせよ神と君。地謡「重くすべしや重くすべしや、扉も金の御札の神體光もあらたに見え給ふ。四海を治めし御姿、四海を治めし御姿、シテ謡「あらたに見よや君守る、地謡「八百萬代のしるしなれや。シテ謡「悪魔降伏の眞如の櫓弓、地謡「さて又次には蒼蠅なす、シテ謡「荒ぶる神も祓のひもろぎ、地謡「その神託は數々に、左も右も神力の、悪魔を射拂ひ清めをなすも、金胎兩部の形なり。(舞動)シテ謡「とても治まる國なれば、地謡「とても治まる國なれば、なかくなれや君は船、臣は瑞穂の國も豊に治まる代なれば、東夷西戎、南蠻北狄の、恐れなければ、弓を外し劍を納め、君も直に民を守の、御札は宮に、納まり給へば影さしおろす玉簾、影さしおろす玉簾、ゆるがぬ御代とぞなりにける。

大江山

梗概

頼光保昌の一行勅を受けて、大江山の酒吞童子を退治せんとて、山伏姿にて出で向ひ、めでたく討取りて來る事を作る。

(五番目)

シテ 酒吞童子
ツレ 同行山伏 狂言 童子侍女

西川一京都の西なる大井川
占方一陰陽師の占ひ動へたることをいふ

一人武者一誰とも名明ならず前

ツレ、一聲謡「秋風の、音にたぐへて西川や、雲も行くなり大江山。ワキ、サシ謡「抑是は源の頼光とは我が事なり。扱もこの度丹波國、大江山の鬼神の事、占方の言葉に任せつよ、頼光保昌に仰せ付けらる。ツレ謡「頼光保昌申すやう、たとひ大勢有りとても、人倫ならぬ化生の者、いづくを境に攻むべきぞ。ワキ謡「思ふ子細の候とて、山伏の姿に出で立ちて、ツレ謡「兜にかはる兜巾を著、ワキ謡「鎧にあらぬ篠懸や、ツレ謡「兵具に對する笈を負ひ、ワキ謡「そのぬしくは頼光保昌、ツレ謡「貞光季武綱公時、ヒトリ武者謡「又名を得たる一人武者、

の土御妹にもあ

ツレ謡「彼是以上五十餘人、ワキ謡「まだ夜の内に有明の、ツレ、地謡「月の都を立ち出でて、月の都を立ち出でて、行末問へば西川や、波風立てと白木綿の、御祓も頼もしや、鬼神なりと大君の、恵に漏るゝ方あらじ。只分け行けや足引の、大江の山に著きにけり。大江の山に著きにけり。

手をささじし手
向はじ
狂言「この狂言
方は童子の侍女
にて折から川に
て衣を洗ひ居る
なり

ワキ謡「急ぎ候程に、大江山に著きて候。いかに誰かある、狂言謡「御前に候。ワキ謡「この所に童子の柄を尋ねて宿をとり候へ。狂言謡「畏つて候。如何に童子の御座有るか。シテ謡「童子と呼ぶは如何なるものぞ。狂言謡「山伏達の御入り候が、一夜の御宿とおほせられ候。シテ謡「何と山伏達の一夜の宿と候や。恨めしや桓武天皇に御請申し、われ比叡の山を出でしより、出家には手をさよじと、固く誓約申せしなり。中門の脇の廊に留め申し候へ。狂言シカク、

シテ謡「いかに客僧達、いづくより何方へ御通も候へば、この隠家へはおんいでにて候ぞ。ワキ謡「さん候、是は筑紫彦山の客僧にて候が、麓の山陰道より道に踏み迷ひ、前後を忘

大師坊 傳教大
師
根本中堂 風沙
門護世堂と一切
経蔵との中なる
一乘止観院のこ
と
七社 大宮二宮
聖眞子八王子客
人十禪師三宮を
山王七社といふ
阿耨多羅三藐三
菩提一佛を讚美
して稱する語

じ佇み候所に、今宵の御宿何より以て祝著申し候。さて御名を酒呑童子と申し候は、何と申したる謂れにて候ぞ。シテ謡「我が名を酒呑童子と云ふ事は、明暮酒を好きたるにより、眷屬どもに酒呑童子と呼ばれ候。されば此を見彼を聞くにつけても、酒ほど面白き物はなく候。客僧達もきこし召され候へ。ワキ謡「仰せにて候程に一つ下され候べし。又この山をばいつの頃よりの御居住にて候ぞ。シテ謡「われ比叡の山を重代のすみかとし、年月を送りしに、大師坊と云ふえせ人、嶺には根本中堂を建て、麓に七社の靈神を齋ひし無念さに、一夜に三十餘丈の楠となつて奇瑞を見せし所に、大師坊一首の歌に、謡阿耨多羅三藐三菩提の佛たち、我が立つ楠に冥加あらせ給へとありしかば、佛たちも大師坊にかたらはされ、出でよくと責め給へば、力なくして重代の、比叡のお山を出でしなり。ワキ謡「さて比叡山を御出でありて、そのまよこよに御座ありけるか。シテ謡「いや何くとも定めなき、霞にまぎれ雲に乗り、ワキ謡「身は久方の天さかる、鄙の長路や遠田舎。シテ謡「御身の故郷と承る、謡筑紫をも見て候なり。ワキ謡「さては残らじ天が下、天さか

一兒二山王一嘗
時の謎

陸奥の云々上
卷安達原をみよ
大江山云々小
式部内侍の歌を
引く

る日のたてぬきに、シテ謡飛行の道に行脚して、ワキ謡あるひは彦山、シテ謡伯耆の大山、
ワキ謡白山立山富士の御嶽、シテ謡上の空なる月に行き、ワキ謡雲の通路歸り來て、シテ謡猶
も輪廻に心ひく、ワキ謡都のあたり程近き、シテ謡この大江の山に籠り居て、ワキ謡忍びく
の御住まひ、シテ謡隠れすまして有りし所に、シテ謡今客僧達に見顯れ申し、シテ謡通力を失ふばか
りなり。ワキ謡御心安く思召せ、シテ謡人に顯す事あるまじ。シテ謡うれしよく一筋に、シテ謡頼み申
すぞ一樹の陰、ワキ謡一河の流を汲みて知る、シテ謡心は本より慈悲の行、シテ謡人をたすくる御
姿、ワキ謡我はもとより出家の形、シテ謡童子もさすが山育ち、ワキ謡さも童形の御身な
れば、シテ謡あはれみ給へ、ワキ謡神だにも、シテ謡一兒二山王と立て給ふは、シテ謡神を避くるよ
しぞかし。御身は客僧、シテ謡我は童形の身なれば、シテ謡なかあはれみ給はざらん、シテ謡かまへてよ
そにて、シテ謡物語りせさせ給ふな。

上歌地謡 陸奥の、安達が原の塚にこそ、安達が原の塚にこそ、鬼こもれりと聞きし物を、
眞なりく、こよは名を得し大江山、生野の道は猶遠し、天の橋立與謝の海、大山の天

紫苑しをんの
音をしをにと云
ふより鬼の意を
頼む
鬼の醜草—紫苑
のことなりとも
忘れ草のことな
りとも云ふ
馴れてつばい—
つばいとはいと
しげといふ意に
て奥州の方言な
りと其調翁草に
に見ゆ
鬼の間—荒海の
障子共に清涼殿
に在り鬼の縁と
して此所に記す

狗も、我に親しき、友ぞと知ろし召されよ。いざく酒を飲まうよ。いざく酒を飲ま
うよ。さてお肴は何々ぞ。頃しも秋の山草、桔梗刈萱我帽額、紫苑と云ふは何やらん、
鬼の醜草とは、誰がつけし名なるぞ。シテ謡けにまこと、シテ謡けにまこと、シテ謡丹後丹波の境
なる、シテ謡鬼が城も程近し、シテ謡頼もしやく、シテ謡飲む酒は數そひぬ、シテ謡面も色づくか、シテ謡赤きは酒の
料ぞ、シテ謡鬼とな思しそよ、シテ謡恐れ給はで、シテ謡我に馴れく給はど、シテ謡興がる友と思召せ。我もそ
なたの御姿、シテ謡打ち見には、シテ謡打ち見には、シテ謡恐しけなれど、シテ謡馴れてつばいは山伏。猶々めく
る盃の、シテ謡たび重なれば有明の、シテ謡天も花に酔へりや、シテ謡足本はよろくと、シテ謡たどよふかい
ざよふか、シテ謡雲折り敷きてそのまよ、シテ謡目に見えぬ鬼の間に入り、シテ謡荒海の障子おしあけて、
夜のふしどに入りにけり。夜のふしどに入りにけり。(中入)

ワキ謡すでにこの夜も更方の、シテ謡空なほ闇き鬼が城、シテ謡鐵の扉を押開き、シテ謡見れば不思議や今
までは、シテ謡人の形と見えつるが、シテ謡地謡その丈二丈ばかりなる、シテ謡その丈二丈ばかりなる、シテ謡鬼
神の装ひ、シテ謡眠れるだにも勢の、シテ謡あたりを拂ふ氣色かな。かねて期したる事なれば、と

ても命は君のため、又は神國氏社、南無や八幡山王權現、我等に力をそへ給へと、頼光保昌、綱、公時、貞光、季武一人武者、心を一つにして、まどろみ伏したる鬼の上に、劔を飛ばする光の影、稻妻震動おびたよし。後シテ謠情なしとよ客僧達、偽あらじと云ひつるに、鬼神に横道なきものを。ヒトリ武者詞「何鬼神に横道なしとや。シテ謠」なかくの事にヒトリ武者謠「あら空言やなどさらば、王地に住んで人を取り、世の妨げとはなりけるぞ。我をば音にも聞きつらん、保昌が館に一人武者、鬼神なりとも遁すまじ。ましてや是は勅なれば、諸土も木も我が大君の國なれば、いづくか鬼の宿りなるらん。地謠「餘すな洩らすな、攻めよや攻めよ人々とて、切先を揃へて切つてかよる。山河草木震動して、山河草木震動して、光満ちくる鬼の眼、たゞ日月の天つ星、照りかよきてさながらに、面を向くべき様ぞなき。(勅)

ワキ謠「頼光保昌もとよりも、地謠「頼光保昌もとよりも、鬼神なりともさすが頼光が、手なみにいかで洩らすべきと、走りかよつてはつたと打つ手に、むすと組んで、えいや

えいやと組むとぞ見えしが、頼光下に組み伏せられて、鬼一口に食はんとするを、頼光下より刀を抜いて、二刀三刀さしとほしく、刀を力にえいやとかへし、さもいきほへる鬼神を押しつけ、怒れる首を打ち落し、大江の山をまた踏みわけて、都へとてこそ歸りけれ。

岩船

梗 住吉の浦にて市を開かれ、外國の寶を買取るため、勅使參向あり。龍神現じて寶船を曳く事を作る。御代をことほぐ祝言能なり。本文は原文を省略したる形なり。

シテ 龍神 ワキ 勅使

濱の市―船着場
に市を開くこと

ワキ次第、誦けに治れる四方の國、けに治れる四方の國、關の戸さよで通はん。ワキ詞「そもそも是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても我が君賢王にましますにより、吹く風枝を鳴らさず、民戸ざしをさよす、誠にめでたき御代にて候。さる間攝州住吉の浦に始めて濱の市を立て、高麗唐の寶を買ひ取るべしとの宣旨に任せ、只今津の國住吉の浦に下向仕り候。三人上歌誦けに今とても神の代の、けに今とても神の代の、誓は盡きぬしるしとて、神と君との御惠眞なりけり、有難や。眞なりけり 有難や。
シテ誦 我はこれ下界に住んで、神を敬ひ君を守る、秋津島根の龍神なり。地誦あるひは神

物も重しや―勅
も船も重しとな

天の探女―岩舟
に乗りて下りし
神

八大龍王―上巻
春日龍神を見よ

津守―積りを掛

代の佳例をうつし、シテ誦「又は治る御代に出でて、地誦「寶の御船を守護し奉り、シテ誦「勅も重しや、勅も重しや、この岩船。地誦「寶をよする波の鼓、拍子を揃へてえいやく。
シテ誦「引けや岩船。地誦「天の探女は、シテ誦「波の腰鼓。地誦「ていたうの拍子を、打つなりやさざら波、經めぐりめぐりて住吉の松の風、吹きよせよえいさ、えいさらえいさと、おすや唐船の、おすや唐船の、潮の満ちくる浪に浮んで、八大龍王は海上に飛行し、御船の綱手を手に繰り絡まき、汐に引かれ波に乗つて、長居もめでたき住吉の岸に、寶の御船を着け納め、數も數萬の捧げ物、運び出すや心の如く、金銀珠玉は降り満ちて、山のごとくに津守の浦に、きみを守の神は千代まで、榮うる御代とぞなりにける。

知章

梗 一の谷の軍敗れて、つひに討死せし知章の遺跡に廻り會ひし旅僧の、知章の幽霊現れて軍物語をなすを聽くことを作る。

(二番目)

シテ 平知章(前ば男) ワキ 僧

ワキ 次第「春を心のしるべにて、春を心のしるべにて、憂からぬ旅に出でうよ。詞 是は西國方より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、只今思ひ立ち都一見と志候。道行諸旅衣、八重の潮路をはるぐと、八重の潮路をはるぐと、猶末ありと行く波の、雲をも分くる沖つ船、われも浮世の道出でて、いづくともなき海際や、浦なる關に著きにけり。浦なる關に著きにけり。詞 さてもわれ鄙の國よりはるぐと、是なる磯邊に來て見れば、新しき卒都婆を立て置きたり。亡き人の追善と思しくて、要文さまぐ書き記し、物故平の知章と書かれたり。諸 知章とは平家の御一門の御中にては、誰にてかまし

浦なる關一須磨

要文一佛經中の重なる文句
物故一故人のこと

ますらん、あら痛はしや候。

シテ 詞「なうく御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ 詞「是は遠國より上りたる僧にて候が、是なる卒都婆を見れば、物故平の知章と書かれて候。御一門の御中にて候やらんと痛はしく存じ、一遍の念佛を廻向申して候。シテ 詞「けにく遠國の人にてましませば、知ろしめさぬは御ことわり。知章とは相國の三男新中納言知盛の御子息にて候。二月七日の合戦に、此一の谷にて討たれさせ給ひて候。さればその日も今日にあたりたれば、ゆかりの人の立てたる卒都婆にて候。時もこそあれ御僧の、今日しもこよに來り給ひ、廻向し給ふありがたさよ。諸 一樹の陰一河の流、是又他生の縁なるべし。よくく弔ひ給ひ候へ。ワキ 詞「けにく仰せのごとく、他生の縁のあればこそ、かりそめながらこよに來て、シテ 諸「無縁の利益をなす事よと、ワキ 諸「思の珠の數繰りて、シテ 諸「弔ふ事よさなきだに、シテ、ワキ 諸「一見卒都婆永離三惡道、何況造立者、必生安樂國、物故平の知章成等正覺。下歌地 諸「きのふは人の上、けふは我をも知らぬ身の、しかも弓馬の家人ならば、法にひか

思の珠一數珠

一見云々一上卷
卒都婆小町を見よ

れつよ、佛果に至り給へや。上歌只一念の功力だに、只一念の功力だに、三惡の罪は消えぬべし。まして妙にも説く法の、道のほとりの亡き跡を、逆縁もなどかなかるべき、逆縁もなどかなかるべき。

屈竟一丈夫

ワキ詞「さて知盛の御最期は何とかならせ給ひて候ぞ。シテ詞「さん候知盛は、あれに見えたる釣舟の程なりし、遙の沖の御座船に、追ひつき助かり給ひて候。ワキ詞「さてあれまでは小船に召されて候か。シテ詞「いや馬上にて候ひし。その頃井上黒とて屈竟の名馬たりしが、二十餘町の海の面を、やすくと泳ぎ渡り、主を助けし馬なり。されども船中に所無かりし間、乗する人も無くして、又もとの汀に泳ぎ上り、この馬主の別れを慕ふかと思しくて、沖の方に向ひ高嘶きし、足搔きしてぞ立つたりける。謡畜類も心ありけるよと、見る人哀を催しけり。地謡「越鳥南枝に巢をかけ、胡馬北風に嘶えしも、舊郷を忍ぶ故なりとか、胡馬は北風をしたひ、この馬は西に行く船の、纜につながれても、行かばやと思ふ心なり。

越鳥云々一故郷を戀ふる意の謡文選の古詩に基

かたをなみ云々一山部赤人の歌を引く

波こもともや一このあたり源氏物語の語に據る

ロンギ地謡「さるほどに、日もはや暮れて須磨の浦、海士の磯屋に宿りして、逆縁ながら申はん。シテ謡「けに有難や我とても、よそ人ならず一門の、内外に通ふ夕月の、後の世の暗を訪ひたまへ。地謡「そも一門の内ぞとは、御身いかなる人やらん。シテ謡「今は何をか包井の、水隠れて住むあはれ世に、地謡「亡き跡の名は、シテ謡「白眞弓の、地謡「歸る方を見れば、須磨の里にも野山にも、行かで汀のかたをなみ、蘆邊をさして行く田鶴の、浮きぬ沈むと見えしまよに、後影も失せにけりや。後影も失せにけり。(中入)ワキ上歌謡「夕波千鳥友寢して、夕波千鳥友寢して、處も須磨の浦づたひ、野山の風もさやかへり、心も墨の衣手に、この御經を讀誦する。この御經を讀誦する。後シテ一聖謡「あら有難の御巾ひやな。われ修羅道の苦しみの、隙なき内にかくばかり、魄靈にひかれて來りたり。浮べき、波こもともや須磨の浦、地謡「海少しある通路の、シテ謡「うしろの山風上野のあらし、地謡「草木國土有情非情も、悉皆成佛の、彼岸の海際に、浮出でたる有難さよ。ワキ謡「ふしぎやなさもなまめきたる若武者の、波に浮みて見え給ふは、いかなる人にてま

つま匂ひ一端を
美しく影れるこ
と
繪島淡路の名
所

しますぞ。シテ誰とはなどや愚なり。御用ひのありがたさに、知章これまで参りたり。
ワキ「さては平家の公達を、まのあたりに見たてまつることよと。昔にかへる浦波の、
シテ「浮織物の直垂に、つま匂ひの鎧著て、ワキ「さも華やかなる御姿、シテ「所もさぞな、
ワキ「須磨の浦に、上歌地謡「朧なる、假の姿や月の影、假の姿や月の影、うつす繪島の島
隠れ、行く船を、惜しとぞ思ふ我が父に、別れし船影の、跡白波もなつかしや。よしと
ても終にわが、憂き身を捨てよ西海の、藻屑となりし浦の波、重てとひてたび給へ、重
てとひてたび給へ。

おほいとの内
大臣宗盛のこと
監物太郎一知章
の郎等頼賢

ワキ「さらばその時の有様委しく御物語り候へ。クリ地謡「さてはその時の有様語るにつけ
て憂き名のみ、龍田の山の紅葉葉の、くれなる靡く旗のあし、ちりぐくなるけしきか
な。シテ、サシ「主上二位殿をはじめ奉り、その外おほいと父子、地謡「一門皆々船に取
り乗り、海上に浮よそほひ、只滄波のうねに浮き沈む水鳥の如し。シテ「その中にも親に
て候新中納言、われ知章監物太郎、主従三騎に討ちなされ、地謡「御座船をうかどひこの

累葉一兄弟のこ
と

汀に打出たりしに、敵手しゆくかよりし間、又引つかへし打ちあふ程に、知章監物太郎、
主従「こよにて討死する。シテ「その隙に知盛は、地謡「二十餘町の沖に見えたる、大臣殿の
御船まで、馬を泳がせ追ひついて、御船に乗りうつり、かひなき御命助かり給ふ。クセ知
盛その時に、おほいと御前にて、涙を流し宣はく、武藏の守も討たれぬ、監物太郎
頼賢も、あの汀にて討たるよを見捨てよ是まで参る事、面目もなき次第なり、いかな
れば子は親のため、命を惜しまぬ心ぞや、いかなる親なれば、子の討たるよを見すてけ
ん、命は惜しきものなりとて、さめぐと泣き給へば、よその袖も濡れにけり。おほい
とのも宣はく、武藏の守はもとよりも、心も剛にして、よき大將と見しぞとて、御子清
宗の、方を見やりて御涙を、流し給へば船の中に、つらなれる人々も、鎧の袖をぬらし
けり。シテ「武藏の守知章は、地謡「生年二八の春なれば、清宗も同年にて、共に若葉の磯
馴松、千代を重ねて榮ゆくや、累葉枝を連ねつと、一門門をならべしも、今年の今日の
いかなれば、所も須磨の山櫻、若木はちりぬ埋木の、浮きてたどよふ船人と、なりゆく

旗さし旗持の
雑兵

果ぞかなしき。ロンギ地謡「けに痛はしき物語。同くは御最期を、懺悔に語りたまへや。シテ謡「けにや最期のありさまを懺悔懺悔にあらはし、修羅道の苦患免れん。地謡「けに修羅道のくるしみの、その一念も最期より、シテ謡「聞きつるまよの敵にて、地謡「すはや寄せくる。シテ謡「浦の波、地謡「團扇の旗は兒玉黨か、ものくしといふまよに、監物太郎が放つ矢に、敵の旗さしの、首の骨寛深に射させて、眞逆さまにどうと落つれば、シテ謡「主人とおほしき武者、主人とおほしき武者、新中納言を目にかけて、かけよせて討つ處を、親を討たせじと、知章かけ塞がつて、むすと組んでどうと落ち、取つて押さへて首かき切つて、起きあがる處を、又敵の郎等落ち合ひて、知章が首を取れば、終にこよにて討たれつと、そのまよ修羅の業に沈むを、思はざるに御僧の、弔ひは有難や、是ぞ眞の法の友よ、これぞ眞の知章が、跡とひてたび給へ。亡きあとをとひてたび給へ。

業罪の意

俊成忠度

梗概

岡部六彌太、忠度を討取りたるに、行きくれての歌を見出でしかば、それを俊成の許に届けたるに、折から忠度の幽霊も現れ出でて、修羅道の苦患を叙ぶることを作る。中に歌道の事を交へ説けり。上巻の忠度と併せ見るべし。(二番目)

シテ 平忠度
ツレ 藤原俊成
ワキ 岡部六彌太
トモ 俊成従者

ワキ謡「かやうに候者は、武藏國の住人、岡部の六彌太忠澄にて候。さても今度西海の合戦に、薩摩の守忠度をば、某が手に懸け失ひ申して候。御最期の後尻籠を見奉れば、短册の御座候。又承り候へば、五條の三位俊成卿と、和歌の御値遇の由申し候間、この短册を持ちて参り、俊成卿の御目にかければやと存じ候。如何に案内申し候。トモ謡「誰にて渡り候ぞ。ワキ謡「岡部の六彌太忠澄が参りたる由御申し候へ。トモ謡「心得申し

尻籠一矢を容る器

たゞのり忠度
に正法を掛く

前途程遠馳
於雁山之暮雲
朗詠集の句

候。如何に申し上げ候。トモ詞「何事にて有るぞ。トモ詞」岡部の六彌太忠澄の伺候申されて候
俊成詞「此方へと申し候へ。トモ詞」畏つて候。此方へ御参り候へ。ワキ詞「心得申し候。
俊成詞「いかに忠澄、さて只今は何のために来り給ひて候ぞ。ワキ詞」さん候。只今参る事餘
の儀にあらず。西海の合戦に薩摩の守忠度をば、某が手に懸け失ひ申して候。御最期の
後尻籠を見候へば短册の御座候。承り候へば忠度とは、淺からぬ和歌の御値遇の由承
り候ふ間、御目に懸けばやと存じ、只今持ちて参りて候。俊成詞「此方へ賜はり候へ。謡實
にや弓馬の道ならねど、いつしか世に名を残し置き給ふ事のはれさよ。何々旅宿の花
と云ふ題にて、謡行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし。上歌地謡痛はし
や忠度は、痛はしや忠度は、破戒無慙の罪を恐れ、仁義禮智信、五つの道も正しくて、
歌道に達者たり、弓矢に名をあげ給へば、文武二道のたゞのりの、船を得て彼岸の、臺
に至り給へや。臺に至り給へや。

シテ、サシ謡「前途程遠し、思ひを雁山の夕の雲に馳す、八重の汐路に沈みし身なれども、猶

六義一もと詩の
六義より出づ賦
比興風雅頌

九重の春に引かれ、共に詠めし花の色、我が面影や見えつらん。命只心に叶ふものな
らば、何か別れの物憂かるべき。詞如何に俊成卿、忠度こそこれまで参りて候へ。
俊成謡「不思議やな夢、現とも分ざるに、薩摩の守の御姿、現れ給ふ不思議さよ。シテ詞」さ
ても千載集に、一首の歌を入れさせ給ふ御志は嬉しけれども、よみ人知らずと書かれ
し事心にかより候。俊成謡「尤それはさる事なれども、詞朝敵の御名を顯さんは世の憚な
り、よしやこの歌あるならば、御名は隠れよもあらじ、謡御心安く思召せ。シテ謡「我もさ
そとしら雪の、古き世までも歌あらば、俊成謡「其名もさすが武藏鏡、隠はあらじ我人の、
シテ謡「情の末も深見草、俊成謡「引くや詠歌も心ある、シテ謡「故郷の花といふ題にて、上歌地謡さ
さ波や、志賀の都は荒れにしを、志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かなと、よみ
しも永き世の、譽を残す詠歌かな、實にや浮世は電光、胡蝶の夢の戯れに、謡へや舞へ
や津の國の、なにはの事もたゞのりなり、疑はせ給ふな、われ疑はせ給ふな。

俊成、サシ謡「凡そ歌には六義あり、道の六道の衢に詠じ、地謡「千早振神代の歌は、文字の數

人丸云々古今
集序の詞
留まりぬ一残れ
る意
鳥の跡一文字の
こと

も定めなし。シテ謠その後天照大神の御兄、地謠「素盞鳴尊より、三十一字に定め置きて、末世末代のためしとかや。アセその故は、素盞鳴尊の、女と住み給はんとて、出雲國にいまして、大宮造せし所に、八色雲の立つを御覽じて、尊の一首の御詠かくばかり、八雪立つ、出雲八重垣妻こめに、八重垣つくるその八重垣をと、神詠もかたじけなや、今の世のためしなるべし。さてもわれ須磨の浦に、旅寝して詠めやる、明石の浦の朝霧と、よみしも思ひ知られたり。シテ謠人丸世になくなりて、地謠「歌の事留まりぬと、紀の貫之も躬恒も、かくこそ書き置きしかども、松の葉の散り失せず、正木のかづら長く傳はり、鳥の跡あらんその程は、よも盡きせじな敷島の、歌には神も納受の、男女夫婦の媒とも、この歌の情なるべし。あら名残惜しの夜すがらやな。

俊成謠「不思議や見れば忠度の、けしき變はりてけうとき有様、こはそも如何なる事やらん。シテ詞あれ御覽せよ修羅王の、梵天に攻め上るを、帝釋出で逢ひ修羅王を、謠もとの下界に追つ下す。地謠「すは敵陣は亂れ合ひ、すは敵陣は亂れ合ひ、をめき叫べは忠度も

宵燈共憐深夜
月照花同惜少
年春一白氏文集
の句

曠恚の焔は荒磯の、波の打物抜いて、切つてかよれば敵人は、矛を揃へてかより給へば、忠度相向つて打ち拂へば、そのまゝ見えす、敵を失ひあきれて立てば、天よりは火車降りかより、地よりは鐵刀足を貫き、立つも立たれず、居るも居られぬ修羅王の責、こは如何にあさましや。シテ謠やよあつてさよ波や、地謠「やよあつてさよ波や、志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かなと、梵天感じ給ひしより、劍の責を免れて、くら闇となりしかば、燈を背けては、共に憐む深夜の月、花を踏んでは同じく惜しむ、少年の春の夜も、早白々と明け渡れば、有りつる姿は消えくと、有りつる姿は鶏籠の山、木隠れて失せにけり。あと木隠れて失せにけり。

外十二

戀重荷

梗概

白河院の御時、山科莊司とて賤しき者、女御を戀ひ、重荷を持
たしめられし苦役に身を空しくせしかば、女御いと不便に
思召さるる所に莊司の幽靈現れ出でて、述懐する事を作る。
此文後花園院の御作なりと傳ふ。(重習)

シテ 山科莊司(後は其幽靈) シテツレ 女御
ワキ 官人 狂言 下人

「ワキ」そもく、是は白河の院に仕へ奉る臣下なり。さても我が君菊を御寵愛有つて、毎
年あまたの菊を植ゑそだてられ候。又こゝに山科の莊司とて賤しき者の候。いつも菊の
下葉を取らせられ候間、申しつけばやと存じ候。又承り候へば、彼の者いかなる折に

所勞一病氣

か、忝くも女御の御姿を拜み申し、勿體なくも戀となりたる由承り候間、彼の者を
召し出だし尋ねばやと存じ候。いかに誰かある。狂言「御前に候。ワキ」山科の莊司に此方
へ來れと申し候へ。狂言「畏つて候。いかに山科の莊司の渡り候か。シテ」誰にて渡り候
ぞ。狂言「急ぎ御参りあれとの御事にて候。シテ」畏つて候。ワキ「いかに莊司、何とて此
間は御庭をば清めぬぞ。シテ」さん候。此程所勞仕り候ひて、倦怠申して候。シテ「尤
もにて候。さて汝は戀をするといふは眞か。シテ」さやうの事をば何とて知しめされて
候ぞ。ワキ「いやくはや色に出でてあるぞとよ。さる間此事を忝くも女御聞召し及ば
れ、急ぎ此荷を持ちて御庭を百度千度廻るならば、此間に御姿を拜ませ給ふべきとの御事
なり。なんほう有難き御説にてはなきか。シテ」何と此事を聞召し及ばれ、其荷を持ちて
御庭を百度千度まはれとかや。百度千度とは、百度も千度も持ちて廻らば、其間に御姿
を拜まれさせ給ふべきと候や。ワキ「けによく心得て有るぞ。なんほう有難き御事にては
なきか。シテ」さらば其荷を御見せ候へ。ワキ「此方へ來り候へ。是こそ戀の重荷よ。な

唐國の云々李廣が虎と思ひて石を射し故事
荷前一年の終に十陵八暮に幣帛を奉らるる公事

んほう美しき荷にてはなきか。シテ詞「けにくく美しき荷にて候。たとひ叶はぬ業なりとも、仰せならばさこそあるべけれ、況やは賤しき業、誦さのみは隔てし名を聞くも、地誦「重荷なりとも逢ふ迄の、重荷なりとも逢ふ迄の、戀の持夫にならうよ。シテ誦「誰踏みそめて戀の路、地誦「衢に人の迷ふらん。シテ誦「名も理や戀の重荷、地誦「けに持ちかぬる此身かな。シテサシ誦「夫れ及びがたきは高き山、思の深きは綿津海の如し。地誦「何れ以て易からんや。けに心さへ輕き身の、塵の浮世にながらへて、よしなく物を思ふかな。ロンキ地誦「思ひや少し慰むと、露のかごとを夕顔の、黄昏時も早過ぎぬ。戀の重荷を持つやらん。シテ誦「重くとも、思ひは捨てじ唐國の、虎と思へば石にだに、立つ矢の有るぞかし。いかにも輕く持たうよ。地誦「持つや荷前の運ぶなる、心ぞ君がためを知る。重くとも心そへて、持てやくく下人、シテ誦「よしとても、よしとても、この身は輕し徒らに、戀の奴になりはてて、亡き世なりと憂からじ。地誦「なき世に爲すもよしなやな、けには命ぞ只頼め。シテ誦「しめちが腹立ちや、地誦「よしなき戀を菅筵、伏して見れども寝られればこ

あはれてふ一古今集の歌三句何をかは末句束縛にせん

そ、苦しや獨寢の、我が手枕の肩替へて、持てども持たれぬ、そも戀は何の重荷ぞ。シテ誦「あはれてふ、言だに無くは何をさて、戀の亂れの、束緒も絶えはてぬ。地誦「よしや戀ひ死なん。報はどそれぞ人心、亂戀になして、思ひ知らせ申さん。ワキ詞「何と莊司が空しくなりたると申すか。言語道斷近頃ふびんなる事にて候ぞや。總じて戀と申す事は、高き賤しき隔てぬ事にて候へどもさりながら、彼の者の戀の心を止めんとの御方便にて、重荷を作つて上を綾羅錦繡を以て美しく包みて、いかにも輕けに見せて持たせなば、彼の者思はんには、かほど輕けなる荷なれども、戀の叶ふまじき故に持たれぬぞと心得、戀の心や止まるべきとの御事にて候處に、賤しき者のかなじさは、是を持ち御庭を廻らば、御姿をまみえさせ給はん事を悦び、精力を盡し候へども、もとより重荷なれば持たれぬ事を恨み、嘆きてかやうに身を失ひ候事、返すくすもふびんにこそ候へ、この山を申し上げうするにて候。いかに申し上げ候。山科の莊司重荷を持ちかねて、御庭にて空しくなりて候。かやうの賤しき者の一念は恐しく候。何か苦しう

候べき、そと御出であつて、彼の者の姿を一目御覽せられ候へ。

シテ謡「戀よ戀我が中空になすな戀、戀には人の死なぬものは。無慙の心やな。ワヤ詞「是はあまりに忝き御説にて候。謡はやく立たせおはしませ。シテ謡「いや立たんとすれば磐石に押されて、更に立つべきやうもなし。地謡「報いは常の世の習ひ。」

吉野川古今集の歌末句こひはしぬとも
言よせ妻一言珠をよせたる妻

玉禪枕詞

葉守の神木々を守る神

後シテ謡「吉野川岩切り通し行水の、音には立てじ戀ひ死にし、一念無量の鬼となるも、只よしなやな誠なき、言よせ妻の空頼め。地謡「けにもよしなき心かな。シテ謡「浮寝のみ、三世の契の満ちてこそ、石の上にも座すといふに、我はよしなや逢ひ難き、巖の重荷持たるよものか。あら恨しや葛の葉の、玉禪畝傍の山の山守も、地謡「さのみ重荷は持たればこそ。シテ謡「重荷といふも思なり、地謡「浅間の煙あさましの身や、衆合地獄の重き苦み、さて懲り給へや懲り給へ。思の煙立ち別れ、思の煙立ち別れ、稻葉の山風吹亂れ、戀路の闇に迷ふとも、跡弔はど其恨は、霜か雪か霰か、終には跡も消えぬべしや。是までぞ姫小松の、葉守の神となりて、千代の陰を守らんや千代の陰をも守らん。」

砧

梗概

蘆屋の何某、訴訟のため在京してはや三年も経たればとて、侍女夕霧を下して古里の妻を訪はしむ。妻は思のあまりに、砧を搦ちて閨怨の情を遣る。かくて病みて死せり。後幽霊となりて現じ、夫の弔ひを受けて成佛す。(重習)

シテ 蘆屋の妻(後は其幽霊) 前ツレ 侍女夕霧
ワ キ 蘆屋某

ワヤ詞「是は九州蘆屋の何某にて候。我自訴の事あるにより在京仕りて候。假初の在京と存じ候へども、當年三歳になりて候。あまりに故郷の事心もとなく候程に、召使ひ候夕霧と申す女を下さばやと思ひ候。いかに夕霧、あまりに故郷心もとなく候程に、おことを下し候べし。この年の暮には必ず下るべき由心得て申し候へ。ツレ詞「さらばやがて下り候べし。かならずこの年の暮には御下りあらうするにて候。道行謡「この程の、旅の衣の

蘆屋の里一筑前
遠賀郡

比目一比目魚雌
雄二つ目を並べ
て水中に住むと
いふ

日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、いく夕暮の宿ならん、夢も數そふ假枕、明かし暮らして程もなく、蘆屋の里に著きにけり。蘆屋の里に著きにけり。詞急ぎ候程に、蘆屋の里に著きて候。やがて案内を申さうするにて候。いかに誰か御入り候。都より夕霧が参りたる由御申し候へ

シテ、サシ誦「夫れ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思を悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁有り。ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍草、我は忘れぬ音を泣きて、袖に餘れる涙の雨の、晴間稀なる心かな。

ツレ詞「夕霧が参りたる由それく御申し候へ。シテ詞「何夕霧と申すか、人までもあるまじ此方へ來り候へ。いかに夕霧珍しながら怨めしや。人こそ變り果て給ふとも、風の行方のたよりにも、などや音づれ無かりけるぞ。ツレ誦「さん候とくにも参りたくは候ひつれども、御宮仕の隙も無くて、心より外に三年まで、都にこそは候ひしが。シテ誦「なに都すまひを心の外とや、思ひやれ實には都の花さかり、なぐさみ多きをりくくにだに、憂き

人目も草も一古
今集に「山里は
冬ぞさびしさま
さりける人目も
草もかれぬと思
へば「人目か
とは人の訪ひ來
ぬこと
偶の一同集の歌
末句感しからま
し

は心の習ひぞかし。下歌地誦「鄙のすまひに秋の暮れ、人目も草もかれぐの、契も絶えはてぬ。何を頼まん身のゆくへ。上歌三年の秋の夢ならば、夢ならば、憂きはそのまゝ覺めもせて、思出は身に残り、昔は變り跡もなし。實にや、偽の、なき世なりせば如何ばかり、人の言の葉嬉しからん。愚の心やな、愚なりける頼みかな。

シテ詞「あら不思議や、何やらあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ぞ。ツレ詞「あれは里人の砧搗つ音にて候。シテ詞「けにや我が身の憂きまよに、古事の思ひ出でられて候ぞや。唐に蘇武といひし人、胡國とやらんに捨て置れしに、故郷に留め置きし妻や子、夜寒の寢覺を思ひやり、高樓に上つて砧を搗つ。志の末通りけるか、萬里の外なる蘇武が旅寢に、故郷の砧聞えしとなり。誦「妾も思や慰むと、とてもさみしきくれはとり、綾の衣を砧にうちて、心を慰まばやと思ひ候。ツレ詞「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ、さりながら御心慰めん爲にて候はど、砧をこしらへて参らせ候べし。シテ誦「いざいざ砧うたんとて、馴れて臥猪の床の上、ツレ誦「涙かたしく狭筵に、シテ誦「思をのぶる便ぞ

臥猪の床一猪の
しくの寝所

宮漏高低風北廻
隣砧綾急月西傾
—新撰朗詠集の句

故郷の云々砧
をうちながら松
風に呼びかけて
聞怨の情を述べ
たり文藻味ふべし

と、ツレ謡「夕霧立ちより諸共に、シテ謡「怨の砧、ツレ謡「うつとかや。

次第地謡「衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん。シテ一聲謡「音づ

れの、稀なる中の秋風に、地謡「憂きを知らする夕かな、シテ謡「遠里人もながむらん。

地謡「誰が世と月はよも訪はじ。シテ、サン謡「面白の折からや、頃しも秋の夕つ方、地謡「牡鹿

の聲も心凄く、見ぬ山風を送り来て、梢は何れ一葉散る、空冷しき月影の、軒のしのぶ

にうつろひて、シテ謡「露の玉簾かよる身の、地謡「思をのぶる夜すがらかな。宮漏高く立ち

て風北に廻り、シテ謡「隣砧綾く急にして月西に流る。地謡「蘇武が旅寝は北の國、是は東の

空なれば、西より來る秋の風の、吹き送れと、間遠の衣擣たうよ。故郷の、軒端の松も

心せよ、己が枝々に、嵐の音を残すなよ。今の砧の聲添へて、君がそなたに吹けや風。

餘りに吹きて松風よ、わが心、通ひて人に見ゆならば、その夢を破るな。破れて後はこ

の衣、誰か來もて訪ふべき。來て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちも更へなん、夏衣、

うすき契は忌まはしや。君が命は長き夜の、月にはとても寝られぬに、いざ／＼衣擣た

桐の葉—歌書き
て七夕に奉る

八月九月正長夜
千聲萬聲無了
時—白氏文集
の句

うよ。彼の七夕の契には、一夜ばかりの狩衣、天の河波立ち隔て、逢ふ瀬かひなき浮舟

の、桐の葉もろき露涙、二つの袖やしをるらん。水陰草ならば、波うち寄せようたかた。

シテ謡「文月七日の曉や、地謡「八月九月、實に正に長き夜、千聲萬聲の、憂きを人に知ら

せばや。月の色風のけしき、影におく霜までも、心凄き折ふしに、砧の音夜嵐、悲しみ

の聲蟲の音、交りて落つる露涙、ほろ／＼はらく／＼と、いづれ砧の音やらん。

ツレ謡「いかに申し候。都より人の参りて候が、この年の暮にも御下りあるまじきにて候。

シテ謡「怨めしやせめては年の暮をこそ、偽ながら待ちつるに、さてははや誠に變り果て

給ふぞや。地謡「思はじと思ふ心も弱るかな。上歌聲も枯野の蟲の音の、亂るよ草の花心、

風狂じたる心地して、病の床に伏し沈み、つひに空しくなりにつひに空しくなり

にけり。(中入)

ワヤ詞「無慙やな三年過ぎぬる事を恨み、引き別れにし妻琴の、つひの別れとなりけるぞ

や。上歌聲さきだたぬ、悔の八千度百夜草、悔の八千度百夜草の、陰よりも二度、歸りく

さきだたぬ云々
—古今集の歌を
引く

三瀬川―三途の川
標梅云々―詩經
に出づ男女の婚
期のことを述ぶ

羊の歩み―運き
こと
隙の駒―疾きこ
とのたとへ

る道と聞くからに、梓の弓の裏強に、言葉をかはすあはれさよ。言葉をかはすあはれさよ。

後シテ謡「三瀬川、沈み果てにしうたかたの、あはれはかなき身の行方かな。標梅花の光を
竝べては、娑婆の春をあらはし、地謡「跡のしるべの燈は、シテ謡「真如の秋の月を見する。
さりながら我は邪姪の業深き、思の煙の立居だに、安からざりし報の罪の、亂るゝ心の
いとせめて、獄卒阿防羅利の、答の数の隙もなく、うてやくと報の砧、怨めしかりけ
る因果の妄執、地謡「因果の妄執の思の涙、砧にかよれば、涙はかへつて火焰となつて、
胸の煙の焰に咽べば、叫べど聲が出でばこそ、砧も音なく松風も聞えず、呵責の聲のみ
恐しや。上歌「羊の歩み隙の駒、羊の歩み隙の駒、うつりゆくなる六つの道、因果の小车
の、火宅の門を出でざれば、廻り廻れども、生死の海は離るまじや、あぢきなの浮世や。
シテ地「恨は葛の葉の、地謡「恨は葛の葉の、歸りかねて執心の面影の、恥かしや思ひ夫の、
二世と契りてもなほ、末の松山千代までと、かけし頼みはあだ浪の、あらよしなや空言

大をそ鳥―をそ
は偽の意萬葉集
に證歌あり

や、そもかよる人の心か。シテ謡「鳥てふ、大をそ鳥を心して、地謡「うつし人とは誰がい
ふ、草木も時を知り、鳥獸も心あるや。けにまこと喩へつる、蘇武は旅雁に文を附け、
萬里の南國に至りしも、契の深き志、淺からざりし故ぞかし。君いかなれば旅枕、夜
寒の衣うつつとも、夢ともせめてなど、思ひ知らずや恨めしや
ヤリ地謡「法華讀誦の力にて、法華讀誦の力にて、幽靈まさに成佛の、道明らかになりにけ
り。是も思へば假初に打ちし、砧の聲の内、開くる法の華心、菩提の種となりにけり。
菩提の種となりにけり。

鷺

梗 概

醍醐天皇の御代、神泉苑に行幸あり。なりから洲崎の鷺を捕れとの勅詔あり。藏人之を捕へしを御感のあまり爵を賜ひ、鷺も共に五位になさるゝ事を作る。源平盛衰記の本文に據れり。(重習)

シテ鷺 シテツレ 帝王
ワ キ 藏人 ワキツレ 大臣

ワキツレ二聖謠「久方の、月の都の明けき、光も君の恵かな。サレ夫れ明君の御代のしるし、萬機の政すなほにして、四季をりくくの御遊までも、捨て給はざる歎慮とかや、王謠「夫れ青陽の春になれば、ワキツレ謠」ところぐの花見の御幸、王謠「秋は時雨の紅葉狩、ツレワキ謠」日数も積る雪見の行幸、王謠「寒暑時を違へざれば、ワキツレ謠」御遊のをりも、王謠「時を得て、上歌今は夏ぞと夕涼み、今は夏ぞと夕涼み、松のこなたの道芝を、誰踏み

神泉苑一天皇の御遊覽所又雨乞の御祈禱ある所なり
三千世界眼前盡十二因縁心裏空一竹生島明神の御作と傳ふる詩

普天の下云々一詩經に普天之下莫非王土率土之濱莫非王臣を引く

ならし通ふらん。是は妙なる御幸とて、小車の、直なる道を廻らすも、同じ雲居の大内や、神泉苑に著きにけり。神泉苑に著きにけり。

王サン謠「面白や孤島峙つて波悠悠たるよそほひ、眞に湖水の浪の上、三千世界は眼の前に盡きぬ、十二因縁は心の裏に空し。けに面白きけしきかな。上歌地謠「鷺の居る、池の汀に松舊りて、池の汀に松舊りて、都にも似ぬ住居はおのづから、實にめづらかに面白や、或は詩歌の舟を浮め、又は糸竹の、聲綾をなす曲水の、手まづ遮る盃も浮むなり。あら面白の池水やな。あら面白の池水やな。

王詞「いかに誰かある。ワキツレ詞「御前に候。王詞「あの洲崎の鷺をりから面白う候。誰にても取りて参れと申し候。ワキツレ詞「畏つて候。いかに藏人、あの洲崎の鷺をりから面白う思召され候間、取りて参らせよとの宣旨にて候。ワキツレ詞「宣旨畏つて承り候さりながら、かれは鳥類飛行の翅、いかどはせんと休らへば、ワキツレ謠「よしやいづくも普天の下、率土の内は王地ぞと、ワキツレ謠「思ふ心を便にて、ワキツレ謠「次第々々に、ワキツレ謠「蘆間の陰

宣命一みことのり

に、地誦ねらひよりねらひよりて、岩間の陰より取らんとすれば、この鷺鷥き羽風を立
 てよ、ばつとあがれば力なく、手を空しうして、仰ぎつゝ走り行きて、汝よ聞け勅説
 ぞや、勅説ぞと呼ばはりかくれば、この鷺立歸つて、本の方に飛び下り、羽を垂れ地に
 伏せば、抱きとり叡覽に入れ、實に忝き王威の恵、有難や頼もしやと、みな人感じけ
 り。實にや佛法王法のかしこき時の例とて、飛ぶ鳥までも地に落ちて、叡慮に適ふ有難
 や、叡慮に適ふ有難や。猶々君の御恵、仰ぐ心もいやましに、御酒を勸めて諸人の、舞
 樂を奏し面々に、鷺の藏人、召し出だされてさまぐの、御感のあまり爵を賜ひ、共に
 なさるゝ五位の鷺、さも嬉しけに立ち舞ふや、シテ誦洲崎の鷺の羽を垂れて、地誦松も磯
 馴るよけしきかな。

シテ誦畏き恵は君道の、地誦かしこき恵は君道の、四海に翔る翅まで、靡かぬ方もな
 かりければ、まして鳥類畜類も、王威の恩徳のがれぬ身ぞとて、勅に従ふこの鷺は、神
 妙神妙放せや放せと、重ねて宣旨を下されければ、けに忝き宣命を含めて、放せばこ

の鷺、心嬉しく飛び上り、心嬉しく飛び上りて、行方も知らずぞなりにける。

望月

概 梗
 小澤刑部友房といふもの、近江守山にて宿屋を營む。こゝに本の主安田庄司の妻子泊る。かゝる處に、二人敵なる望月秋長亦來合せたり。友房計略を廻らし、酒宴に事よせ、主の妻を警女として諺はせ、子に鞆鼓を打たせ、又自らも獅子舞をなして秋長に近づき、遂に討取りて本望を遂ぐる筋なり。(重習)

シテ 小澤刑部友房 ツレ 安田庄司の妻 子方 花若
 ワキ 望月秋長 狂言 望月從者

シテ詞「かやうに候者は、近江國守山の宿甲屋の亭主にて候。さても某本國は信濃國の者にて候が、さる子細候ひてこの甲屋の亭主となり、往來の旅人を留め申して身命を繼ぎ候。今日も旅人の御通り候はゞ、御宿を申さばやと存じ候。
 ツレ子方次第謠「波の浮鳥住む程も、波の浮鳥住む程も、下安からぬ心かな。ツレ、サン謠」是は

從類一家來などをいふ
 撫子一子供のこ
 とその名の花若
 に續けていふ

信濃國の住人 安田庄司友治の妻や子にて候。さても夫の友治は、同國の住人望月の秋長に、あへなく討れ給ひし後は、多かりし從類も散りぐになり、頼む木蔭も撫子の、花若ひとり隠し置かんと、敵の所縁の恐しさに、思ひ子を誘ひ立ち出づる。ツレ子方下歌謠「何くとも定ぬ旅を信濃路や、上歌月を友寢の夢ばかり、月を友寢の夢ばかり、名残を忍ぶ故郷の、淺間の煙立ち迷ふ、草の枕の夜寒なる、旅寢の床の憂き涙、守山の宿に著きにけり。守山の宿に著きにけり。

ツレ詞「急ぎ候程に、近江國守山の宿に著きて候。此所にて宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内し申候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「是は信濃國より上る者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞「安き間の事にて候。此方へ御入り候へ。不思議やな是に留め申して候御方を、いかなる人ぞと存じて候へば、某が古への主君の北の御方、幼き人は御子息花若殿には御座候は如何に。あら痛はしの御有様や候。やがて某と名のつて力を付け申さばやと存じ候。いかにお旅人に申すべき事の候。信濃國よりと仰せ候につきて、

緩急なき由一不都合無きこと
安堵の御教書一
本領に落着くべき指令

古へ御目にかよりたる様に存じ候。ツレ調「いや是は行方もなき者にて候程に、思ひもよらぬ事にて候。シテ調「何を御包み候ぞ。まづ某名のつて聞かせ申し候べし。是こそ古へ御内に召使はれ候ひし、小澤の刑部友房にて候へ。ツレ調「さては古の、小澤の刑部友房か。あら懐やとばかりにて涙に咽ぶばかりなり。子調「父に逢ひたることちして、花若小澤に取りつけば、シテ調「別れし主君の面影の、残るも今は恨めしや。子調「こはそも夢か現かと、主従手に手を取りかはし、上歌地謡「今までは、行方も知らぬ旅人の、行方も知らぬ旅人の、三世の契の主従と、頼む情も是なれや。けに奇縁ある我等かな。けに奇縁ある我等かな。シテ調「あれなる一間に御入りあつて御休み有らうするにて候。ワキ次第謡「歸る嬉しき故郷に、歸る嬉しき故郷に、誰憂き旅と思ふらん。調「是は信濃國の住人、望月の何某にて候。さても同國の住人、安田の庄司友治と申す者を、某が手にかけ生害させて候科により、この十三年が間在京仕り候處に、されども緩急なき由聞召し開かれ、安堵の御教書を賜はり悦びの色をなし、只今本國信濃に下向仕り候。急

御本望一歐討のこと

ぎ候間、近江國守山の宿に著きて候。今夜はこの宿に泊らばやと存じ候。いかに誰かある。從者調「御前に候。ワキ調「今夜はこの宿にとまるべし、宿を取り候へ。又存する子細のある間、某が名をば申すまじく候。從者調「畏つて候。いかに此屋の主の渡り候か。シテ調「誰にて御座候ぞ。從者調「是は信濃國へ御下向の御方にて候。御宿を申され候へ。シテ調「心得申し候。さて御名字をば何と申す人にて御座候ぞ。從者調「是は信濃國に隠れもなき大名、望月の秋長殿では御座ないぞ。シテ調「苦しからず候、此方へ御入り候へ。從者調「心得申し候。いかに申し上げ候。此方へ御通り候へ。シテ調「言語道斷の事。我頼み申して候人の北の御方、同く御子息花若殿この屋に留め申して候處に、花若殿御親の敵、望月が泊りて候事は候。やがてこの由申し上げばやと存じ候。や、いかに申し候。不思議なる事の候。今夜此處に望月が著きて候。子調「何望月と申すか。シテ調「暫く、あたり近く候。まづ静まつて聞召され候へ。只今申す如く、望月がこの屋に泊りて候。是は天の與ふる所と存じ候。如何にもして今夜の内に、御本望

八撥一鞆鼓

達せさせ参らせうするにて候。御心やすく思召され候へ。きつと思案仕りたる事の候。今頃この宿にはやり候ものは盲御前にて候。何の苦しう候べき、夜にまぎれ杖にすがり、花若殿に御手を引かれさせ給ひ、盲の振舞にて座敷へ御出で候へ。某彼の者に酒を勧め候べし。又何にても候へ御諮ひあれと申し候はど、そと御諮ひ候へ。花若殿は八撥を御打ちあらうするにて候。某は獅子舞をまなび、其まぎれに近づきて、本望を遂げさせ申さうるすにて候。ツレ詞「ともかくもよきやうに計らひて給はり候へ。シテ詞「何事も某に御まかせ候へ。

ツレ、サシ謡「嬉しやな望みし事の叶ふよと、盲の姿に出で立てば、子謡「習はぬ業も父のため、ツレ謡「竹の細杖つきつれて、地謡「彼の蟬丸の古へ、彼の蟬丸の古へ、たどりたどるも遠近の、道のほとりに迷ひしも、今の身の上も思ひはいかで劣るべき。かよる憂き身の業ながら、盲目の身の習、歌聞召せや旅人よ。歌聞召せや人々よ。シテ詞「いかに申すべき事の候。従者詞「何事にて候ぞ。シテ詞「此屋の亭主にて候が、めでたき

御下向にて候間、御祝ひの爲に酒を持たせて参りて候。然るべきやうに御申し候へ。従者詞「心得申し候。いかに申し上げ候。この屋の亭主御下向めでたき由申し候ひて、御樽を持たせ参りて候。ワキ詞「此方へと申せ。従者詞「畏つて候。此方へ御参り候へ。又是なる人達はいかなる人にて候ぞ。シテ詞「さん候。是はこの宿に候盲御前にて候。かやうの御旅人の御著の時は、罷り出で諺などを申し候。御前にてそと御諮はせ候へ。従者詞「日本一の事にて候。やがて申し上げうするにて候。いかに申し上げ候。ワキ詞「何事ぞ。従者詞「あれに候は、この宿にある盲御前にて候が、けしからず面白く諺ふ由を申し候。諺はせられ候へ。ワキ詞「汝所望し候へ、従者詞「畏つて候。なう是なる人達、御所望にて候ぞ面白からんずる處を一節御諮ひ候へ。ツレ詞「一萬箱王が親の敵を討つたる處を諺ひ候ふべし。従者詞「いやいや思ひも寄らぬ事にて候。ワキ詞「何事を申すぞ。従者詞「是なる人達に諺を所望仕り候へば、一萬箱王が親の敵討つたる所を諺はうする由申され候程に、御前にてはいかどと存じいやと申して候。ワキ詞「何の苦しう候べき急いで諺はせ候へ。従者詞「さらば今の仰せられ

迦陵嚩迦極樂淨土にすむ美聲の鳥

たる處を御諮ひ候へ。

不動と申し不動と工藤とを混じて滑稽の意を含ましむ

クリッ、ツレ謡「夫れ迦陵嚩伽は卵の内にして聲諸鳥にすぐれ、地謡「鷲といふ鳥は小さけれども、虎を害する力あり。ツレサシ謡「ことに河津三郎が子に、一萬箱王とて、兄弟の人のありけるが、地謡「五つや三つの頃かとよ、父を従弟に討たせつと、既に年ふり日を重ね、七つ五つになりしかば、いとけなかりし心にも、父の敵を討たばやと、思の色に出づること、けに哀には覺ゆれ。クセある時おとどひは、持佛堂に参りて、兄の一萬香を焼き、花を佛に供すれば、弟の箱王は、本尊をつくぐと守りて、いかに兄御前聞召せ、本尊の名をば我が敵、工藤と申し奉り、劔を提げ繩を持ち、我等を睨みて、立たせ給ふが憎ければ、走りかよりて御首を、打ち落さんと申せば、兄の一萬これを聞きて、ツレ謡いはけなやいかなる事ぞ佛をば、地謡「不動と申し、敵をば工藤といふを知らざるか。さては佛にてましますかと、抜いたる刀を鞘にさし、赦させ給へ南無佛、敵を討たせ給へや。子詞「いざ討たう。従者詞「あう討たうとは。シテ詞「暫く候。何事を御騒ぎ候ぞ。従者詞「御用心

獅子團亂旋一樂名にて祕なり

の時分にて候に、是なる幼き者がいざ討たうと申し候程に候よ。シテ詞「子細を御存じ候はぬ程に尤にて候。此者の諺を申したる後には、又幼き者八撥を打ち候。その八撥を打たうすると申す事にて候。従者詞「日本一の事やがて打たせうするにて候。いかに申し上げ候。是なる幼き者が八撥を打つべき由を申し候。ワヤ詞「急いで打たせ候へ。又亭主は何にても能はなきか。子詞「獅子舞を御所望候へ。ワヤ詞「あら面白の事を申すものかな、いかに亭主、是なる幼き者の申すは、亭主は獅子舞が上手なる由を申し候。そと一さし舞ひ候へ。シテ詞「是は幼き者の筋なき事を申し候。思ひもよらぬ事にて候。ワヤ詞「ひらに舞うて見せ候へ。シテ詞「此上は御意にて候程に、そと御前にて舞はうするにて候。このまよにては如何にて候間、獅子頭をかづきて参らうするにて候。其間に此幼き者に八撥を打たせ候べし。皆々かう渡り候へ、地謡「獅子團亂旋は時を知る。雨村雲や騒ぐらん。(獅子舞)あまりに祕曲の面白さに、あまりに祕曲の面白さに、猶々廻る盃の、酔を勧めばいとどなほ、眠も來るばかりなり。

目を引き云々
時分はよしと合
圖をなすこと

弓矢のいはれ
武道の名譽

シテ謡「さるほどにく、地謡折こそよしとて脱ぎおく獅子頭、又は八撥を、打てや打てと、目を引き袖を振り、立ち舞ふ氣色に戯れよりて、敵を手ごめにしたりけり。
地謡「この年月のうらみのする、いまこそ晴るれ望月よとて、おもふかたきを討つたりけり。

キリ地謡「かくて本望遂げぬれば、かくて本望遂げぬれば、後本領に立ち歸り、子孫に傳へ今の世に、その名隠れぬ御事は、弓矢のいはれなりけり、弓矢のいはれなりけり。

外十三

七騎落

梗概

頼朝、石橋山の戦に敗れ、安房上總の方へ落ちんとす。乗船の砌、主従八騎となれるは、祖父が都落の折に同じくして不吉なりとて、誰か一人取残さるゝ事となり、遂に實平は其子遠平を上陸せしむ。後、和田義盛遠平を伴ひ身方に加はり、先の愁嘆は悦の酒宴となりてめでたく收る。(四番目)

シテ 土肥次郎實平 子方 土肥遠平 ツレ 源頼朝
ツレ 岡崎義實 ツレ 四人 ワキ 和田義盛

うちみても云々
浦、貝の意を
かけて海の縁語
を用ひたり
石橋山―相模國
足柄下郡にあり

シテ次第謡「身は捨小舟うらみても、身は捨小舟うらみても、かひなきや憂き世なるらん。
頼朝詞「是は兵衛佐頼朝とは我が事なり。さても昨日石橋山の合戦に味方打負け、餘りに無勢に候程に、一先安房上總の方へ開かばやと存じ候。如何に土肥の次郎。シテ詞「御前に

鎮西―實際は東國へ下らんとし近江より引返せし也
田代殿―信綱
新聞の次郎―忠氏
土屋の三郎―宗遠
土佐坊―昌俊
龍門云々―白氏
文集に龍門原上土埋骨不埋名とあるを引く

候。頼朝詞「餘りに味方無勢にある間、一先安房上總の方へ開かうするにて有るぞ。急いで舟の事を申し付け候へ。シテ詞「畏つて候。疾くより御舟の事を申し付けて候。急いで召されうするにて候。頼朝詞「いかに實平。シテ詞「御前に候。頼朝詞「只今船中に供したる人数は如何程あるぞ。シテ詞「さん候。只七騎御座候。頼朝詞「さては頼朝までは八騎よな。急度思ひ出だしたる事有り。祖父爲義鎮西へ開きし時も主従八騎、父義朝江州へ落ち給ひしも主従八騎、思へば不吉の例なり。實平はからひて舟より一人おろし候へ。シテ詞「畏つて候。實平仰せ承り、舟のせがいに立上り、御供の人数を見渡せば、まづ一番には田代殿、地誦「さて二番には新聞の次郎、シテ誦「又三番には土屋の三郎、地誦「四番は土佐坊五番には、シテ誦「實平候。六番には、遠平誦「同じき遠平、シテ誦「艦板には、義實誦「義實あり。地誦「この人は君のため、この人々は君のため、龍門原上の土に屍をば曝すとも、惜しかるまじき命かな、何れを選出さんと、さしもの實平思ひかね、赤面したるばかりなり。赤面したるばかりなり。

義忠―源平盛衰記に上れば義貞
俣野―五郎景尚
御分―御身

頼朝詞「如何に實平、何とて遅きぞ急いでおろし候へ。シテ詞「畏つて候。如何に岡崎殿に申し候、急いで御舟より御下り候へ。義實詞「何と某に御舟より下りよと候や。シテ詞「なかなかの事。義實詞「暫く、この御供の内に、某一の老體にて候程に、かひなくしく御用にも立つまじき者と御覽じ限られて、かやうに承り候な。その儀に於ては御舟よりは下り候まじ。シテ詞「いやく左様の儀にては無く候。艦板に召されて候程に、陸の近さに申し候。義實詞「いや所詮この船中に、命二つ持たたらんする者を御船より下され候へ。シテ詞「是は不思議なる事を承り候ものかな。それ人は生ずるより死するまで、命をば一つこそ持ちて候へ。二つ持ちたる謂れの候か。義實詞「さん候。某も昨日までは命を二つ持ちて候を、早一つの命をば我が君に参らせ上げて候。シテ詞「さてその謂れは候。義實詞「その事にて候。昨日石橋山の合戦に、子にて候眞田の與一義忠は、副將軍を賜はり、俣野と組んで討たれぬ。されば親子は一體二つの命ならずや。見申せば土肥殿こそ、この御舟に親子一所に渡られ候へ。御分残つて遠平をおろすか、遠平を残して御分おるよか、親子の

御出門なるに
御出陣御出陣の
めてたき折から
の意
ゆるしく一貫む
る意

内一人おりられ候へ。シテ詞「尤にて候。餘りの道理に物なのたまひそ。如何に遠平、君よりの御説にて有るぞ、急いで御舟より下り候へ。遠平詞「何と御舟より下りよと仰せ候か。シテ詞「なかくの事。急いで下り候へ。遠平詞「遠平、幼く候へども、君の御大事に立たん事、誰にか劣り候べき。御舟よりは下りまじく候。シテ詞「こさかしき事を申す者かな。君の御爲父が命にては無きか。急いで御舟より下り候へ。遠平詞「いやく君の御爲父の命をば背くとも、御舟よりは下りまじく候。シテ詞「言語道断の事を申すものかな。君の御爲父が命をば背くとも下りまじきと申すか。その儀ならば人手には掛けまいぞ。義實詞「暫く。是は君の御門出なるに、誤りたるか實平。シテ詞「何くまでも某が誤りて候。所詮おりまじきと申す者をおろさんより、某御舟より下りようするにて候。遠平詞「如何に申し候。さらば某御舟より下り候べし。シテ詞「何と下りようすると申すか。實平「何と今こそ某が子にて候へ。あれを見よ敵大勢討ち出でたり、かまへて某が子と名のつて、尋常に討死せよ。名残こそ惜しけれ。謡かくて我が子をおろし置き、實平御舟に参りけり。地謡「ゆ

ゆるしく見ゆる實平かなと、互の心を思ひやり、親子の別れ痛はしや。遠平詞「父の別れは申すに及ばず、君を始め参らせて、皆人々に御名残こそ惜しう候へ。上歌地謡「彼の松浦佐用姫が、彼の松浦佐用姫が、唐舟を慕ひわびて、渚にひれ伏しよ有様も、今遠平が親と子の、別れにかはらじと、皆涙をぞ流しける。遠平詞「契程無き早舟を、暫しとだにも言ひあへず、跡を見送りたよすめば、地謡「はや遠平の内に、地謡「實平はひたすらに、弱氣を見えじとて、なかくかへり見おきもせで、心強くも行く跡に、敵大勢見えたりすはや遠平は討たるととて、頼朝もあはれみ陸を見給へばさすが實に、恩愛の契も只今を限ぞと思ひ實平は、磯邊に向ひ人知れず、心のまよならば、あはれ遠平と一所に、討死せばやとあこがれて、飛び立つばかりに思ひ子の別れぞ哀れなりける。別れぞ哀れなりける。ワキ一聲謡「弓張月の西の空、行くへ定めぬ舟路かな。狂言詞「沖なる波の音までも、関の聲か

御座舟一頼朝の乗船をさす

と恐しや。ワキ詞「あれに見えたるが御座舟にてありけに候。急いで舟を漕ぎ候へ。狂言詞「畏つて候。シテ詞「如何に申し候。あれに兵船一艘見えて候。先こなたより詞を掛けうするにて候。義實詞「しかるべう候。シテ詞「如何にあれなる舟は誰が召されたる御舟にて候ぞ。ワキ詞「我もそなたの船影を、怪しく思ひ休らうなり。そも誰人の舟やらん。シテ詞「是は土肥の次郎實平が乗りたる舟候よ。ワキ詞「何と土肥殿の御舟と候や。シテ詞「なかくの事。さてその御舟は誰が召されたる御舟にて候ぞ。ワキ詞「是こそ和田の小太郎義盛が乗りたる船候よ。シテ詞「さては和田殿の御舟にて候か。ワキ詞「中々の事。内々申し通ぜし如く、御味方に参らんために、是まで参じて候。さて君は其御舟に御座候か。シテ詞「和田は内々申し合はせたる事の候間、只今参りて候さりながら、先づたばかつて心を見うするにて候。如何に和田殿へ申し候。是までの御参めでたう候さりながら、面目もなき事の候。昨日の暮程より我が君を見失ひ申し、かやうに浮れ舟と爲つて尋ね申し候よ。ワキ詞「何と君はその御舟に御座なきと候や。シテ詞「さん候。ワキ詞「言語道断の事にて候ものかな。我身方を

身方一平家方

ば忍び出で、月日とも頼み奉る頼朝にははなれ申し、この上は命ありても何かせん、いでいで自害に及ばんと、腰の刀に手を掛くる。シテ詞「あゝ暫く、君はこの舟に御座候。ワキ詞「何と君はその御舟に御座候とや。シテ詞「中々の事。ワキ詞「さて何とてかやうには承り候ぞ。シテ詞「是は戲言にて候。幸に陸近く候程に、その舟を寄せられ候へ。御舟をも寄せ候ひて、陸にて御對面あらうするにて候。ワキ詞「心得申し候。さらばやがて陸へ参らうするにて候。

シテ詞「如何に申し候。御前にて候。ワキ詞「我が君を見奉りて、今は安堵仕りて候。シテ詞「實にノ、尤にて候。ワキ詞「如何に土肥殿に申し候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「この御供の中に、何とて御子息遠平は御座候はぬぞ。シテ詞「その事にて候。さる謂れ有つて陸に残し置きて候。ワキ詞「疾くよりかくと申したくは候ひつれども、以前某に心を盡させられ候その返報に、今まではかくとも申さぬなり。いで土肥殿に引出物申さんと、隠し置きたる舟底より、遠平を引立て見せければ、シテ詞「その時實平あきれつよ、地誦「夢か現

引出物一贈物のこと

たとへば云々
朗詠集に謬入
仙家離爲半日
之客恐歸舊里
終逢七世之孫
とあるを引く前
の句は王質後の
句は劉阮の故事

不覺未練

かこは如何にとて、覺えず抱き付き泣き居たり。たとへば仙家に入りし身の、半日の程に立ちかへり、七世の孫に逢ふ事の、喩へも今に知られたり、喩へも今に知られけり。
シテ詞「如何に義盛に申し候。さてこの者をば何として召しつれられ候ぞ。ワキ詞「さん候是まで伴ひ申したる謂れを、御前にて申し上げずるにて候。シテ詞「急いで御物語り候へ。ワキ詞「さても昨日石橋山の合戦破れしかば、大場が手勢君を討ち奉らんと、大勢渚に打出でたりしに、某も一所に討つて出でしが、汀を見れば、引きかねたる若武者一騎ひかへたり。某駒かけよせて見れば御子息遠平なり。急ぎ馬より飛んで下り、生捕る體にもてなし舟底に乗せ申し、是まで伴ひ参りたり。なんほう土肥殿に義盛は忠の者にて候ぞ。
シテ詞「かよる有難き事こそ候はね。只今の御物語を聞き候ひて落涙仕りて候を、さぞ人々の不覺の涙とや思召すらんさりながら、地謡「嬉し泣きの涙は、嬉し泣きの涙は、何か包まん唐衣、日も夕暮になりぬれば、月の盃とりぐに、シテ詞「主従ともに悦びの、地謡「心うれしき酒宴かな。ワキ詞「如何に實平、餘りにめでたき折なれば一さし御舞ひ候へ。

入る一射るとか
けて弓矢をとつ
づけたり

シテ詞「さらばそと舞はうするにて候。地謡「心嬉しき酒宴なか。(男舞)
キリ地謡「かくて時日を廻らさず、かくては時日を廻らさず、國々の兵馳せ参すれば、程なく御勢二十萬騎になり給ひつと掌に、治め給へるこの君の御代の、めでたき始めも、實平正しき忠勤の道に入る、實平正しき忠勤の道に入る、弓矢の家こそ久しけれ。

弱法師

梗

概

繼母の讒にあひて、父に捨てられし俊徳丸の盲目となり弱法師とて流離せしが、後、父之を悔いて天王寺にて施行をなす折しも、俊徳丸に廻り會ひ伴ひ歸るよしを作る。中に天王寺縁起を説くこと詳に、之に配するに難波の致景を以てし、肉眼盲ひたれど心眼開けたりとの意を寓する所、文情活躍せり。(四番目)

シテ 俊徳丸　ワキ 高安通俊

天王寺—聖徳太子物部守屋を討ちて後建立せらるる
 施行を引き—佛事を營み物を施すこと
 出入の月云々—

ワキ「かやうに候者は、河内國高安の里に、左衛門の尉通俊と申す者にて候、さても某子を一人持ちて候を、さる人の讒言により暮に追ひ失ひて候。餘りに不便に候程に、二世安樂のため天王寺にて、一七日施行を引き候。今日も施行を引かばやと存じ候。
 シテ—雙語「出入の、月を見ざれば明暮の、夜の境をえぞ知らぬ。難波の海の底ひなく、深き思ひを人や知る。サン夫れ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上

盲目なることを云ふ
 夫れ云々—前の粘と似たる文句有爲—有爲轉變

中有—極樂と地獄の間

一行—阿闍梨にして唐玄宗の御持僧なり罪を得て果羅へ流されしこと平家物語に見ゆ

時正—こゝは彼岸中の日をさす折梅花—而挿頭二月之雪落衣—本朝文粹の句

には、波を隔つる愁ひあり。況や心あり顔なる、人間有爲の身となりて、憂き年月の流れては、妹背の山の中に落つる、吉野の川のよしや世と、思ひもはてぬ心かな。あさましや前世に誰をか厭ひけん、今又人の讒言により、不孝の罪に沈む故、思ひの涙かき曇り、盲目とさへなりはてよ、生をも變へぬこの世より、中有の道に迷ふなり。下歌元よりも心の闇は有りぬべし。上歌傳へ聞く、彼の一行の果羅の旅、彼の一行の果羅の旅、闇穴道の巷にも、九曜の曼陀羅の光明、赫奕として行末を、照らし給ひけるとかや。今も末世と言ひながら、さすが名に負ふこの寺の、佛法最初の天王寺の、石の鳥居こよなれや、立寄りて拜まん、いざ立寄りて拜まん。

ワキ「頃は二月時正の日、誠に時も長閑なる、日を得て普き貴賤の場に、施行をなして勸めけり。シテ「實に有がたき御利益、法界無邊の御慈悲ぞと、踵をついで群集する。ワキ「や、これに出でたる乞巧人は、如何さま例の弱法師よな。シテ「又我等に名を付けて、皆弱法師と仰せ有るぞや。謠實にもこの身は盲目の、足弱車の片輪ながら、よろめ

きありければ弱法師と、名付け給ふは理なり。ワキ詞「實に言ひ捨つる言の葉までも、心ありけに聞ゆるぞや。先々施行を受け給へ。シテ詞「あら有難や候。や、花の香の聞え候。いかさまこの花散りがたになり候な。ワキ詞「あう是なる籬の梅の花が、弱法師が袖に散りかかるぞとよ。シテ詞「うたてやな難波津の春ならば、只この花とこそ仰せ有るべきに、謠今は春べも半ぞかし。梅花を折つて頭に挿しはさまざれども、二月の雪は衣に落つ、あら面白の花の匂ひやな。ワキ詞「實にこの花を袖に受ければ、花もさながら施行ぞとよ。シテ詞「中々の事草木國土、悉皆御法の施行なれば、ワキ詞「皆成佛の大慈悲に、シテ詞「漏れじと施行に連なりて、ワキ詞「手を合はせ、シテ詞「袖を擴けて、上歌地謡「花をさへ、受くる施行のいろくくに、受くる施行のいろくくに、匂ひ來にけり梅衣の、春なれや、何はの事か法ならぬ、遊び戯れ舞ひ謠ふ、誓の網には漏るまじき、難波の海ぞ頼もしき。實にや盲龜の我等まで、見る心地する梅が枝の、花の春の長閑さは、なにはの法によも漏れじ、なにはの法によも漏れじ。

梅衣―表白裏縁
枋色

三會―興福寺の維摩會藥師寺の最勝會大極殿の御齋會をいよ釋尊近いて第二の釋尊現れず我國色法の興隆未だしとなり
上宮太子―聖徳太子のこと
如意輪―六觀音の一つ
太子の御前生云―此事元亨釋書にあり

閻浮提金―黄金萬代に云々―後拾遺集に「萬代にすめる龜井の水やさは富の小川の流なるちん―龜井を太子影向の井ともいふ
もし照る―難波の枕詞なるを難波のこと云へ

クリ地謡 夫れ佛日西天の雲に隠れ、慈尊の出世遙に、三會の曉未だなり。シテ、サシ謡「然るにこの中間に於て、何と心を延ばへまし。地謡「こよによつて上宮太子、國家をあらため萬民を教へ、佛法流布の世となして、普く惠を弘め給ふ。シテ謡「然れば當寺を御建立あつて、地謡「始めて僧尼の姿を顯し、四天王寺と名付け給ふ。クセ金堂の御本尊は、如意輪の佛像、救世觀音とも申すとか、太子の御前生、震旦國の思禪師にて、渡らせ給ふ故なり。出離の佛像に應じつよ、今日域に至るまで、佛法最初の御本尊と、現れ給ふ御威光の、眞なるかなや末世相應の御誓、然るに當寺の佛閣の、御作の品々も、赤栴檀の靈木にて、塔婆の金寶に至るまで、閻浮檀金なるとかや。シテ謡「萬代に、澄める龜井の水までも、地謡「水上清き西天の、無熱池の池水を受けつぎて、流久しき世々までも、五濁の人間を導きて、濟度の舟をも寄するなる、難波の寺の鐘の聲、異浦々に響き來て、普き誓滿潮の、おし照る海山も、皆成佛の姿なり。
ワキ詞「あら不思議や、是なる者をよくく見候へば、某が追ひ失ひし子にて候は如何に。

日想観一時正の
日には夕日回轉
して西に入ると
て念佛して拜む
ことをいふ

阿字門一梵語四
十二字母の一に
て最貴なる一
門をいふ

江月云々一證道
歌の文句
住吉の云々一證
政の歌

思ひのあまりに盲目となりて候。あら不便と衰へて候ものかな。人目もさすがに候へば、
夜にマゝりて某と名のり、安高へ連れて歸らばやと存じ候。やあ如何に日想観を拜み候
へ。シテ謠「實にく日想観の時節なるべし。盲目なればそなたとばかり、謠心常なる日に
向ひて、東門を拜み南無阿彌陀佛。ワキ謠「何東門とは謂れなや、こゝは西門石の鳥居よ。
シテ詞「あらおろかや天王寺の、西門を出でて極樂の、東門に向ふは假事か。ワキ詞「實にく
さぞと難波の寺の、西門を出づる石の鳥居。シテ謠「阿字門に入つて、ワキ謠「阿字門を出づ
る、シテ謠「彌陀の御國も、ワキ謠「極樂の、シテ謠「東門に、向ふ難波の西の海、地謠「入日の影も
舞ふとかや。

シテ詞「あら面白やわれ盲目とならざりしときは、弱法師が常に見馴れし境界なれば、謠な
に疑ひも難波江に、江月照らし松風吹き、永夜の清宵何の爲すところぞや。住吉の、松
の隙よりながむれば、地謠「月落ちかよる淡路島山と、シテ謠「詠めしは月影の、地謠「詠めし
は月影の、いまは入日や落ちかよるらん。日想観なれば曇も波の、淡路繪島須磨明石、

草香山一攝津

紀の海までも見えたり、見えたり、満目青山は心にあり。シテ謠「あよ、見るぞとよ見るぞ
とよ。

地謠「さて難波の浦の致景の數々、シテ謠「南はさこそと夕波の、住吉の松陰、地謠「東の方は
時を得て、シテ謠「春の緑の草香山、地謠「北は何處、シテ謠「難波なる、地謠「長柄の橋のいたづ
らに、かなたこなたと歩く程に、盲目の悲しさは、貴賤の人に行き合ひの、轉び漂ひ難
波江の、足もとはよろくと、實にも眞の弱法師とて、人は笑ひ給ふぞや。思へば恥し
やな、今は狂ひ候はじ、今よりは更に狂はじ。

ロンギ地謠「今は早、夜も更け人も静まりぬ。如何なる人の果やらん、その名を名のり給へ
や。シテ謠「思ひよらずや誰なれば、我がいにしへを問ひ給ふ。高安の里なりし、俊徳丸が
果なり。地謠「さては嬉しや我こそは、父高安の通俊よ。シテ謠「そも通俊は我が父の、その
御聲と聞くよりも、地謠「胸打騒ぎ呆れつよ、シテ謠「こは夢かとて、地謠「俊徳は、親ながら
恥しとてあらぬ方へ逃げ行けば、父は追ひ付き手を取りて、何をか包む難波寺の鐘の聲

も夜まぎれに、明けぬ先にと誘ひて、高安の里に歸りけり。高安の里に歸りけり。

絃上

梗 師長琵琶の秘曲を傳へ受けんとて、入唐の望ある折から、須磨の月を眺めんとて下向し、鹽屋に一泊を乞ふ。鹽屋の翁媪、師長の琵琶を聴き、二人もおのゝ琵琶を弾す。師長その妙技に感じ、入唐を思ひ止まる。かくて翁は村上天皇と現じ、龍宮より獅子丸といふ琵琶を持參せしめて師長に賜はる由を作る。(五番目)

概

シ テ 村上天皇(前は老翁) 前ツレ 老女
 前ツレ 藤原師長 前ツレ 師長從者

師長一頼長の子

ワキ次第「八重の汐路を行く舟の、八重の汐路を行く舟の、唐は何くなるらん。師長詞」そもそも是は太政大臣師長とは我が事なり。ワキ詞「さてもこの君天下に隠れなき琵琶の御上手にて御座候が、入唐の御望ましますにより、この度思召し立ち道すがら名所の月をも御覽せんために、只今津の國須磨の浦に御下向にて候。師長、サシ謡「我はさていつの夕を都の

空、まだ夜深きに旅立ちて、未に見えたる山崎も、過ぐれば跡に早なりて、ワキ上歌謡「波越す袖の湊川、波越す袖の湊川、まだ知らぬ、方にも我は生田の漏り来る月は木の間に、心づくしの旅の道、されども是は唐の、門出と思へば勇みある、高麗の林をよそに見て、須磨の浦にも著きにけり。須磨の浦にも著きにけり。ワキ詞「御急ぎ候程に、是は津の國須磨の浦に御著きにて候。暫くこの所に御休みあり、事の由をも御尋ねあらうするにて候。

シテ、ツレ「鹽齋」持ちかぬる、汐汲む桶の苦しきに、又力づく、老の杖、ツレ齋「拙なき業を須磨の浦、シテ、ツレ齋」眺に憂きや忘るらん。シテ、サシ齋「面白や浦に入日は海上に浮み、須磨や明石の浦の様、鹽焼く海士の心にも、さも面白う候なり。ツレ齋「南を遙かに眺むれば、雲に續ける紀の路の小島、シテ詞「山良の戸渡る早舟も、汐追風の吹上や、ツレ齋「遠浦ながら住吉の、松こそ見ゆれ海越しに、シテ齋「富島の磯や昆陽難波、ツレ齋「名には繪島と云ひながら、シテ齋「いかで筆にも及ぶべき。シテ、ツレ齋「あら面白の浦の氣色や、下歌地齋「實にや面白き、

富島一攝津

雨ごさめれ一雨にてこそあめれ

田子の浦云々一源氏物語の歌に「袖ぬるこひどとかつは知りながらもりたつ田子のみづからぞうき」
わくらははに云々一上卷松風を見

海士の磯屋とや淡路灣、あは沖舟の漕ぎ来るは、雨ごさめれ今一返も、汐汲めや人々。上歌そよや陸奥の、そよや陸奥の、千賀の鹽竈は、名のみにて遠ければ、如何が運ばん伊勢島や、阿漕が浦の汐をば、度重ねても汲み難し。田子の浦の汐をば、いざ下りたらんわくらははに、問ふ人あらばわぶと答へて、この須磨の浦の汐汲まん。この須磨の浦の汐汲まん。シテ詞「鹽屋に歸り休まうするにて候。

ワキ詞「鹽屋の主の歸りて候。御宿を借らばやと存じ候。如何に是なるは鹽屋の主にてあるか。シテ詞「さん候、鹽屋の主にて候。ワキ詞「是に御座候は太政大臣師長公と申して、天下に隠れましまさぬ琵琶の御上手にて候が、入唐の御望にてこの浦に御下向にて候。一夜の御宿を參らせ候へ。シテ詞「いやさやうの人にて御座候は、異浦にて御宿を召され候へ。ワキ詞「あら何ともなや、難波わたりにてこそ異浦などとは申すべけれ、是は須磨の浦にてはなきか。たゞ御宿を參らせ候へ。シテ齋「見苦しく候へども、さらば御宿を參らせ候べし。

松の柱一待を言
海は云々源氏
物語の文句を引

ツレ謠「されば一年雨の祈の御時、神泉苑にして、琵琶の秘曲を遊ばされしかば、シテ詞龍
神もめでけるにや、さしもの晴天にはかに曇り、大雨降る事終日、謠それよりしてこの
君を、雨の大臣とは申すとかや。ツレ謠「かほどやごとなき此君に、一夜の御宿を参らせ
て、シテ謠「秘曲をも聴聞申すならば、シテ、ツレ謠「例なき思出。下歌地謠「彼の蟬丸は逢坂や、薬
屋にて琵琶を弾き給ふ。今この君は須磨の鹽屋、露も溜らぬ軒の板間、逢ひ難き砌に、
逢ふぞ嬉しかりける。上歌里離れ、須磨の家居の習ひとて、須磨の家居の習ひとて、何事
を松の柱や、竹あめる垣は一重にて、風もたまらじ痛はしや、海は少し遠けれども、波
たごこよもとに聞えきて、いつの間に、夢をも御覽候べき。よし／＼それも御琵琶を、
寝られぬまよに遊ばせや、我等も聴聞申すべし。我も聴聞申さん。
ワキ詞「如何に申し上げ候。夜もすがら御琵琶を遊ばされ候へ。師長謠「この須磨の巻の春か
とよ、源氏この浦に遷され給ひ、初めて世の味ひの辛きを知るといへども、まだ汐じま
ぬ旅衣、泣くばかりなる涙の露の、玉の小琴を弾き鳴らし、戀ひわびて泣く音にまがふ

近々千賀の鹽
竈の意を言掛く

調子一調子の合
ふこと

心にくしゆか
しき意
思ひも一緒を言
掛く

浦波は、思ふ方より風や吹くらん。地謠「それは浦波の、音通ふらし琴の音の、音通ふら
し琴の音の、是は弾く琵琶の、折からなれや村雨の、古屋の軒の板庇、目ざます程の夜
雨や、管絃の障なるらん。シテ詞「や、何とて御琵琶をば遊ばし止められて候ぞ。ワキ詞「さん
候村雨の降り候程に、さて遊ばし止められて候。シテ詞「實に村雨の降り候ぞや。如何に
姥、苦取り出だし候へ。ツレ謠「それは何の爲にて候やらん。シテ詞「苦にて板屋を葺き渡し、
靜に聴聞申さんと、シテ、ツレ謠「祖父と姥は諸共に、ツレ謠「苦取出だし、シテ謠「さつと葺き、
地謠「鹽竈の名の、近々と寄り居つよ、耳を聳て聞き居たり。
ワキ詞「如何に主、かほど漏らざる板屋の上を、何しに苦にて葺きて有るぞ。シテ詞「さん候
只今遊ばされ候ふ琵琶の御調子は黄鐘、板屋を敲く雨の音は盤渉にて候程に、謠「苦にて
板屋を葺き隠し、今こそ一調子になりて候へ。
ロンギ地謠「さればこそ始より、只人ならず思ひしに、心にくしや琵琶を、いかでか弾か
で有るべき。シテ、ツレ謠「所から江の邊、岩越す波の弾きやせん。琵琶琴の、思ひもよらぬ

絃上—玄象が正字なり

御説なり。地謡「おもひよらずも琴の音の、押して御琵琶を賜はりて、シテ謡「祖父は琵琶を調れば、ツレ謡「姥は琴柱を立て竝べて、地謡「撥音爪音、ばらり、からり、からりばらりと、感涙もこぼれ、嬰兒も躍るばかりなりや。弾いたりく面白や。師長謡「師長思ふやう、地謡「師長思ふやう、われ日の本にて、琵琶の奥儀を極めつと、大國を窺はんと、思ひし事のおさましさよや。まのあたり、かゝる堪能有りける事よ。所詮渡唐を止まらんと、忍びて鹽屋を出で給へば、それをも知らで琵琶琴の、心一つの嗜みにて、越天樂の唱歌の聲、梅が枝にこそ鶯は巢をくへ、風吹かば如何にせん、花に宿る鶯、宿人の歸るをも、知らで弾いたり琵琶琴。

ツレ謡「なう旅人の御立ち候。シテ謡「何旅人の御立ち候とや。なにとて留め申さぬぞと、シテ、ツレ謡「祖父と姥は走りより、地謡「琵琶琴よりも御袖を、只引けやく横雲の、夜はまだ深し浦の名の、明かして御立ち候へ。師長謡「何しに留め給ふらん。まづこの度は歸洛して、重ねて尋ね申すべし。御名を名のり給へや。シテ、ツレ謡「今は何をか包むべき。我絃上

梨壺の女御—實は宣耀殿の女御芳子
故院—源氏物語の桐壺の帝のこと

唐土より云々—平家物語にあり
仁明の御宇掃部頭貞敏渡唐して歸朝する時の事なり

獅子には云々—獅子は文殊菩薩の乗物

の主たりし、村上の天皇梨壺の女御夫婦なり。地謡「御身の入唐止めん爲、夢中にまみえ須磨の浦、故院の昔の夢の告、思ひ出でよ人々とて、搔消すやうに失せ給ふ。搔消すやうに失せ給ふ。(中入)

後シテ謡「そもく是は、延喜聖代の御譲り、村上の天皇とは我が事なり。その聖代の御宇かよ、唐土より三面の琵琶を渡さるよ。絃上青山獅子丸これなり。さる程に獅子は龍宮へ取られしを、いで召し出だし弾かせんと、漫々たる海上に向ひ、如何に下界の龍神たしかに聞け。獅子丸持参つかまつれ。

地謡「獅子丸浮むと見えしかば、獅子丸浮むと見えしかば、八大龍女を引き連れく、かの御琵琶を授け給へば、師長給はり弾きならし、八大龍王も絃管の役々、或は波の鼓を打てば、或は琵琶の名にし負ふ、獅子團亂旋に村上の天皇も、奏で給ふ。面白かりける祕曲かな。(舞)

シテ謡「獅子には文殊や召さるらん。地謡「獅子には文殊や召さるらん。帝は飛行の車に乗

じ、八大龍女はつだいりゅうめに引かれ給へば、師長もろながも飛馬ひばに鞭むちを打ち、馬上ばしやうに琵琶びばを携たづへて、馬上ばしやうに琵琶びばを携たづへて、須磨すまの歸洛きらくぞ有難あき

別一

淡路

梗概

神代の遺跡を尋ねんとて、淡路に参向せし廷臣、田を作れる老翁に逢ひ、その諾冊二神の神徳を物語るを聴く。のち老翁諾尊と現じて、まのあたり威靈を示したまふことをつくる。(能脇)

シテ 伊弉諾尊(前は老翁) ツレ 男 ワキ 臣下

三人ワキ次第第治をさまる國くにの始はじめもや、治をさまる國くにの始はじめもや、淡路あはぢの神代かみよなるらん。ワキ詞ことば「そもくはは當今たうぎんに仕つかへ奉たてまつる臣下しんかなり。さてもわれ宿願しゆくぐわんの子細しさいあるにより、住吉玉津島すみよしたまつしまに参詣けい仕つかまつりて候。又よきつでなれば、是より淡路あはぢの國くにに渡わたり、神代かみよの古跡こせきをも一見けんせばやと存ぞんじ候。道行ワキ三人三人謠謠紀きの海うみや、波吹上なみふきあけの浦風うらかぜに、波吹上なみふきあけの浦風うらかぜに、跡遠あととほさかる沖おきつ舟ふね汐しほ

吹上—吹上の濱とて名所なり

路程なく移りきて、よそに霞みし鳥影や、淡路瀉にも著きにけり。淡路瀉にも著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、是は早淡路の國に著きて候。この所の人を待ち、神代の古跡を尋ねばやと存じ候。

陰陽一語冊二尊
男女の道を聞き
給ひしをさす

心の池—心の廣
きを池に喩ふ
春の田を—金葉
集の歌下句花に
心をつくる頃か
な

水口—田に水を
引く口

シテ、ツレ一壁謡「神の代の、跡を残して海山の、のどけき波の淡路瀉、ツレ謡「種を收めし國なれば、シテ、ツレ謡「苗代水も豊なり。シテ、サシ謡「夫れ陰陽の神代より、今人界に至るまで、シテ、ツレ謡「山河草木國土は皆、神の恵に作り田の、雨つちくれを潤して、千里萬里の外までも、皆樂める時とかや。下歌頃しも今はのどかなる、心の池の云ひがたき、春の氣色もさまざまに、上歌春の田を、人に任せて我はたど、人に任せて我はたど、花に心のあこがるよ、盛りりに引かれて苗代の、水に心の種蒔て、散ればこよもや櫻田の、雪をもかへすけしきかな。雪をもかへす氣色かな。

ワキ詞「いかに是なる翁に尋ぬべき事あり。おことの風情を見るに、小田をかへしながら水口に幣帛を立て、誠に信心の氣色なり。いかさま是は御神田にて候か。シテ詞「さん候

幣帛—清淨なる

供田—神に供ふる米を作る田

然れば云々—當時神道家の俗説

春の田を作らんとては、よろづ祝ふ事の候程に、ある水口に齋串とて五十の幣帛を立て、神を祭り候、然ればある歌に、謡「谷水をせく水口に齋串立て、苗代小田の種まきにけり、詞その上この御田は、当社二の宮の御供田にて御座候程に、殊には内外清淨にて御田を作り候よ。ワキ詞「さては当社二の宮にてましまさば、國の一の宮はいづくにてましますぞや。若し樸葉の權現にて御座候やらん。シテ詞「畏れながら悪しく御心得候ものかな。當社は二の宮にてましますとて、國中一二の次第にあらず。ツレ謡「御覽候へ當社の神達、二柱の社の御殿なれば、シテ詞「二つの宮居をそのまよにて、二の宮と崇め奉るなり。シテ、ツレ謡「是は即ち伊弉諾伊弉册の尊二柱の、神代のまよに宮居し給ふ淡路の國の、神は一宮宮居は二つの、二の宮と崇め申すなり。ワキ謡「よくく聞けば有難や、さてくかよる國土の種を、普く受くる御恩徳、只この神の誓よなう。シテ詞「事新しき御説かな。國土世界や萬物の、出生あまねき御神徳、只是當社の誓なり。ツレ謡「然れば開けし天地の、伊弉諾と書いては、シテ詞「種蒔くとよみ、ツレ謡「伊弉册と書いては、シテ詞「種を收む。ツレ謡「是

富草一稻のこと

渾沌未分一つ
にて未だ二つに
分れざること

目前の御誓なり。シテ謡その上神代は遠からず、ツレ謡「今日の前にも、シテ謡」御覽せよ。上歌地謡種を蒔き、種を收めて苗代の、種を收めて苗代の、水うらよにて春雨の、天よりくだれる種蒔きて、國土も豊に、千里榮る富草の、村早稻の秋になるならば、種を收めん神徳、あら有難の誓やな。有難の神の誓やな。

ワキ謡「なほく當社の神祕ねんごろに御物語り候へ。クリ地謡「夫れ天地開闢の昔より、渾沌未分やうやく分れて、清く明かなるは天となり、重く濁れるは地となれり。シテサシ謡「然れば天に五行の神まします。木火土金水是なり。地謡「既に陰陽相分れて、木火土の精伊弉諾となり、金水の精凝り固まつて伊弉册と顯る。シテ謡「然れども未だ世界ともならずりし前を伊弉諾といひ、地謡「國土治まり萬物出生する所を、伊弉册と申す。即ちこの淡路の國を始とせり。クセさればにや、一一柱の御神の、磯敷盧島と申すも、この一島のことかとよ。凡そこの島はじめて、大八洲の國をつくり、紀の國伊勢志摩日向竝に、四つの海岸を作り出し、日神月神蛙子素盞鳴と申すは、地神五代の始にて、皆この島に御出

現 中にも皇孫は、日向の國に天降り給ひて、地神第四の火々出見の皇子を御出生、實に有難き代々とかや。シテ謡「天下をたもちたまふ事、地謡「すべて八十三萬、六千八百餘歳なり。かよるめでたき皇子達に、御代を標葉の、權現と現れおはします、伊弉諾伊弉册の神代も、只今の國土なるべし。

御客人一參向ありし臣下をさす

ロンギ地謡「實に神の代の道直に、實に神の代の道直に、今も妙なる秋津洲の、君の御影ぞ有難き。シテ謡「御影ぞと、夕日かくれの雲の端に、たなびく天の浮橋の、いにしへを現して、御客人をなぐさめん。地謡「そも浮橋のいにしへと、聞くはいかなる言の葉の、シテ謡「その神歌は烏羽玉の、我が黒髪も、地謡「亂れずに、結び定めよ小夜の手枕の、歌の種蒔きし神とも今は白波の、淡路山を浮橋にて、天の戸を渡り失せにけり。天の戸を渡り失せにけり。(中入)

ワキ上歌謡「實に今とても神の代の、實に今とても神の代の、御末はあらたなりけりと、いへば虚空に夜神樂の、月に聞えて光さす、けしきぞあらたなりけるや。けしきぞあらた

わたづみの一古
今集の歌三句白
妙の末句淡路島
山

七つ五つ一天神
七代地神五代

淡路―あれはの
意のあはを掛く

なりける。

後シテ鱈わたづみの挿頭に挿せる白玉の、波もて結へる淡路島、月春の夜ものどかなる、
緑の空も澄み渡る、天の浮橋の上にして、八洲の國を求め得し、伊弉諾の神とは我が事
なり。治まるや國常立の始めより、地鱈七つ五つの神の代の、シテ鱈御末は今に君の代よ
り、地鱈和光守護神の扶桑の御國に、風は吹けども山は動ぜず。(神) ロンギけにありがた
き御誓。けに有難き御誓。そもく天の浮橋の、その御出所はさるにても、いかなる所
なるらん。シテ鱈振り下けし、銚の滴り露凝りて、一島となりしを、淡路よと見つけし
爰ぞ浮橋の下ならん。地鱈けにこの島の有様、東西は海漫々として、シテ鱈南北に雲峯を
列ね、地鱈宮殿にかよる浮橋を、シテ鱈立ち渡り舞ふ雲の袖、鱈さすは御銚の手風なり。
引くは、潮の時つ風、治まるは波の蘆原の、國富み民も豊に、萬歳をうたふ松の聲、千
秋の秋津洲、治まる國ぞ久き。治まる國ぞ久き。

放下僧

梗概

牧野小次郎といふ者、兄の禪僧と共に放下になりて諸國を
遍歴し、父の敵利根信俊に廻り會ひて、遂に討取ることを作
る、(四番目)

シテ 牧野兄禪僧 ツレ 牧野小次郎
ワキ 利根信俊 狂言 從者

念無う―無念に

ツレ詞「かやうに候ものは、下野の國の住人、牧野の左衛門何某が子に、小次郎と申す者
にて候。さても親にて候者は、相摸の國の住人、利根の信俊と申す者と口論し、念なう
討たれて候。親の敵にて候程に討たばやとは存じ候へども、敵は猛勢我等は只一人にて
候間、思ふにかひなく月日を送り候。又兄にて候者は、幼少より出家仕り、あたり近
き會下に候、あまりに便もなく候間、立ちこえこの事を談合せばやと存じ候。いかに
案内申し候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「某が参りて候。シテ詞「や、此方へ渡り候へ。さ

母を惡虎に取られ李廣の故事今昔物語にあり

放下―田樂法師の類

て只今は何の爲に來り給ひて候ぞ。シテ詞「さん候 只今參る事餘の儀にあらず。我等が親の敵の事討たばやとは存じ候へども、敵は猛勢我等は只一人にて候程に、思ふにかひなく月日を送り候。あはれ諸共に思召し御立ち候へかし。シテ詞「仰せはもつともにて候へども、我等が事は幼少より出家の身にて候程に、今更いかどにて候。ツレ詞「御意はさる事にて候へども、親の敵を討たぬ者は不孝の由を申し候。シテ詞「さて親の敵を討つて孝に備はりたる事の候か。ツレ詞「なかくの事。物語 唐のことにや有りけん、母を惡虎に取られ、その敵をとらんとて、百日虎伏す野邊に出でて狙ふ。ある夕暮に、尾上の松の木陰に、虎に似たる大石のありしを敵虎と思ひ、番へる矢なればよつびいて放つ、この矢すなはち巖に立ち、たちまち血流れけるとなり。是も孝の心深きにより、堅き石にも矢の立つと申し候へば、只思召し御立ち候へ。シテ詞「是は面白き事を引いて承り候ものかな。この上は諸共に思ひ立たうづるにて候。ツレ詞「然るべう候。シテ詞「さて彼者には何として近づき候ふべき。ツレ詞「某きつと案じ出したる事の候。此頃人の翫び候は放下にて候程に、

禪法―禪道

瀬戸―武藏金澤

某は放下になり候べし。御身は放下僧に御なり候へ。彼者禪法に好きたる由申し候程に、禪法を仰せられうするにて候。シテ詞「けに是は面白き了簡にて候。さらばやがて思ひ立たうするにて候。ツレ詞「尤にて候。シテ詞「いざくさらばと思ひつゝ、行脚の姿に身をやつせば、ツレ詞「我も嬉しく思ひつゝ、放下の姿に出で立つて、シテ詞「さもすこくと、ツレ詞「立ち出づる。上歌地謡「故郷の、名残もさぞな有明の、名残もさぞな有明の、つれなきながらながらふる、命ぞ限り兄弟は、我が心をや頼むらん。我が心をや頼むらん。ワキ次第謡「歩みを運ぶ神垣や、歩みを運ぶ神垣や、隔てぬ誓頼まん。詞「これは相摸の國の住人、利根の信俊と申す者にて候。我この間打ち續き夢見悪しく候程に、瀬戸の三島へ參らばやと存じ候。

後シテ、サシ一疊謡「面白の我等が有様やな。僧俗二つの道を離れ、姿言葉も人に似ぬ、ツレ詞「その振舞を隠家と、思ひ捨つれば安き身を、シテ詞「知らでなどかは迷ふらん。シテ、ツレ一疊謡「落花一様の春を知らず、白雲青山に蔽ふとか、ツレ謡「流水山上の秋にして、シテ、ツレ謡「紅葉を

古川一降るにか
うたかた一泡沫

争ふ謂あり。地誦朝の嵐夕の雨。朝の嵐夕の雨。今日又明日の昔ぞと、夕の露の村時
雨定めなき世に古川の、水のうたかた我いかに、人をあだにや思ふらん。人をあだにや
思ふらん。

十力一是處非處
力業力定力根力
欲力性力至處道
力宿命力天眼力
漏盡力
一句一禪法の一
語

シテ詞「浮雲流水と申し候。狂言シカ〜。ツレ詞「浮雲流水と申し候。狂言シカ〜。シテ詞「いや某は浮
雲、あれなる者は流水にて候。狂言シカ〜。シテ詞「又あれなる御力の御苗字をば何と申し候
ぞ。狂言シカ〜。シテ詞「いや苦しからず候、只放下が参りたると御申し候へ。狂言シカ〜。ツ
キ詞「いかに面々に不審申したき事の候。シテ詞「承り候。ツキ詞「凡そ沙門の形と謂つば
十力の珠数を手に纏ひ、忍辱二體の衣を着、罪障懺悔の袈裟を掛けてこそ僧とは申すべ
けれ、異形のいでたち心得ず候。又見申せば拄杖に團扇を添へて持たれたり。團扇の一
句承りたく候。シテ誦「夫れ團扇と申すは、動く時には清風をなし、靜なる時は明月を見
す。詞明月清風只同性の内であれば、諸法を心が所作として、諸心實修行の便にて、我等が持
つは道理なり。咎めたまふぞ愚なる。ツキ詞「團扇の一句面白う候。今一人は弓矢を帶し給

さうか一候かの
約語
本末一本弭を扇
に象り末弭を兎
に象るといふ
方便の矢一衆生
を救ふ手段とし
て武器を執るな
り
四魔一煩惱魔五
衆魔天子魔死魔
引かぬ弓云々
夢窓國師の歌と
云ひ傳ふ
宗體一宗旨の立
て方

公案一佛祖の機
縁を云ふ本文の
三昧一思を專に
し想を靜むるこ
と
白雲深處金龍躍
一碧巖の語

ふ。弓も御僧の道具さうか。ツレ誦「夫れ弓と申すは本末に、烏兔の姿を像り、詞日月とこ
こに顯し、淨穢不二の祕法を表す。されば愛染明王も、神通の弓を張り、方便の矢を爪
よつて、誦「四魔の軍を破り給ふ。地誦「されば我等も之を持ち、されば我等も之を持ちて、
引かぬ弓、はなさぬ矢にて射る時は、中らずしかも外さざりけりと、かやうによむ歌も
あり、知らずな物なのたまひそ。知らずな物なのたまひそ。
ツキ詞「さて放下僧はいづれの、祖師禪法を御傳へ候ぞ。面々の宗體が、承りたく候。シテ詞「我
等が宗體と申すは、教外別傳にして、言ふも言はれず説くも説かれず、言句に出せば教
に落ち、文字を立つれば宗體に背く、誦「たゞ一葉のひるがへる、風の行方を御覽ぜよ
ツキ詞「けにく面白う候。さて座禪の公案何と心得候べき。ツレ誦「入つては幽玄の底に
動じ、出でては三昧の門に遊ぶ。ツキ詞「自身自佛はさていかに。シテ詞「白雲深き所金龍躍
る。ツキ誦「生死に住せば、シテ誦「輪廻の苦。ツキ誦「生死を離れば、シテ詞「斷見の科。ツキ詞「さて
向上の一路は如何に。ツレ詞「切つて三段と爲す。シテ詞「暫く。切つて三段と爲すとは、禪法

の言葉なるを、謠御騒ぎあるこそ愚なれ。地謡「なにとたどなかくに、磐手の山の岩躑躅、色には出でじ。南無三寶。をかしの人の心や。」

凍れる涙―古今集に「年の内に春は来にけり露の氷れる涙今や解くらん」指を忘る―圓覺經に見ゆ月を見るに端指を借る心を悟るに佛教を假る、後却て月を見て指を忘れ心を悟て教を得魚而忘筌―莊子の語筌は魚を捕る具面白や云々―小唄ぶし

シテ、サシ謡「されば大小の根機を嫌はず、持戒破戒を選ばず、地謡「有無の二偏に落つる事なく、皆成佛するためしあり。シテ謡「かるが故に草木も發心の姿を現し、地謡「柳は緑花は紅なる、その色々を現せり。クセ青陽の春の朝には、谷の戸出づる鶯の、凍れる涙とけそめて、雪消の水のうたかたに、相宿りする蛙の聲、聞けば心のある物を、目に見ぬ秋を風に聞き、荻の葉そよぐ故郷の、田面に落つる雁鳴きて、稻葉の雲の夕時雨、妻戀ひかぬる小男鹿の、たよすむ月を山に見て、指を忘ると思ひあり。シテ謡「浦の湊の釣舟は、地謡「魚を得て筌な捨つ、此を見彼を聞く時は、嶺の嵐や谷の聲、夕の煙朝霞、皆これ三界唯心の、理なりと思召し、心を悟り給へや。シテ謡「月の爲には浮雲の、地謡「種と心や爲りぬらん。シテ謡「面白の花の都や。地謡「筆に書くともおよばじ。東には祇園清水、落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主の櫻はちりぐ、西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ

臨川堰―臨川寺の井堰なり水車を仕懸けありたりといふ
こきりこ―あやありの竹ともいふ

水車の輪の、臨川堰の川波、川柳は水に揉まるよ、しだり柳は風に揉まるよ、ふくら雀は竹に揉まるよ、都の牛は車に揉まるよ、茶臼は挽木に揉まるよ、けにまこと忘れたり
とよ、こきりこは放下に揉まるよ、こきりこの二つの竹の、世々を重ねて、打ち治まりたる御世かな。

シテ、ツレ謡「さのみは何と包むべきと、兄弟ともに抜きつれて、思ふ敵に走り寄り、地謡「この年月の恨みの末、今こそ通れ願ひのまよに、敵をぞ討つたりける。ヤリかくて兄弟念力の、かくて兄弟念力の、その期の有りて忽に、親の敵を討つ事も、孝行深き故により、名を末代に留めけり。名を末代に留めけり。

吉野静

梗 義經吉野より落つる時、忠信君を遠く落ちしめんとて、わざと衆徒の席に入りて問答に時を移し、静御前に舞を舞はしむる事を作る。(三番目)

シテ 静 ワキ 忠信 立衆 大勢 狂言 衆徒

狂言一衆徒ワキに對して「いやこゝろな悉くも吉野の衆會の座敷を何者なれば蒲草鞋で出たぞ」など言ふことあり上は御一體一頼朝は義經と兄弟なればとなり

狂言シカク。ワキ詞「これは都道者にて候、衆會の御座敷とも存せず候。御免あらうずるにて候。狂言詞「さては都人にて候か。判官殿の御行方をば何と申し候ぞ。ワキ詞「上は御一體なれば、終には御中直らせ給ふべき山申し候。狂言詞「さていかやうにて御落ち有りたると申し候。ワキ詞「十二騎とこそ承つて候へ。狂言詞「十二騎ならば追つかけ討ちとめ申さう。ワキ詞「暫く。十二騎と申すとも、餘の勢百騎二百騎にもむかふべし。かやうに申すは都の者、當山を信じ參る上は、いかにも御寺も宿坊も、難なくおはしませかしと、思へばかやうに申すなり。謡「この上はともかくも、地謡「御はからひぞ吉野山、御はからひぞ吉

其契約一忠信が靜の供して吉野を立退く約束法樂の舞一神佛に奉納する舞樂

野山、よしなき申し事、洩れ聞えなば判官の、後のとがめも恐しや。御暇申し候はん。御暇申し候はん。

シテ謡「さても靜は忠信が、その契約を違へじと、舞の装束ひきつくるひ、忠信遅しと待ち居たり。ワキ詞「是は都道者にて候が、法樂の舞の由承り、下向道を忘れて候。はやはや舞を始め給ふべし。シテ謡「都の人と聞けばなつかしや、判官御道せばき事、世上の聞えいかなるぞ、都人こそ知るべけれ。ワキ詞「終には御中直らせ給ふべしと、聞くより人々先非を悔いて、諸皆々恐れ申すなり。シテ謡「さては嬉しや委しくも、知らせ給ふか都人。ワキ詞「あまりに事延び時移りぬ、謠心得給へ舞の袖。シテ謡「けになう言葉多き者は品すくなし。かやうに我等言の葉過ぎば、なかく人も怪しみて、もしもそれとか三吉野の、かつて知らすな、一聲靜かに囃せや靜が舞に。地謡「衆徒も時刻や移すらん。シテ謡「神こそ納受ましますらめ。地謡「けに此御代も靜が舞。シテ、サシ謡「然るに彼の判官は、神道を重んじ朝家を敬ひ、地謡「ひとへに忠勤を擢んでて、私の心さらになし。シテ謡「人は讒し申すとも、

かつて知らすな一勝手の社に掛けていふ

執節一天皇の御代理として政治を行ふこと

片岡増尾鷲の尾一義經の郎等なり

地謠神は正直の頭に宿り給ふなれば、靜が舞の袖に、暫くうつりおはしまし、我が君を
守り給へと、祈るぞあはれなりける。クセ「そもく景時が、その讒言の水を、おもへ
ば渡邊や、流るゝ水に満汐の、逆櫓立てんと浮船の、梶原が申し事、よも順義にて候は
じ。されば義經はすぐに脩めし三吉野の、神のちかひの眞あらば、頼朝も聞召し直され、
義經執節の勅を受け、洛陽の西南は、これ分國となるべし。さあらば當山の、衆徒こと
ごとく參洛し、歸依渴仰の御袖に、恵をいただき給ふべし。あなかしこ、不忠なし給ふな。
御科は候はじ。シテ謠但し衆徒中に、猶いきどほり深うして、地謠進みて追つかけ給ふと
も、その名きこゆる人々を、討ちとどめ申さんは、片岡増尾鷲の尾、さて忠信はならび
なき、精兵ぞよ人々に、防矢射られ給ふなど、語ればけには衆徒中に、すよむ人こそ
なかりけれ。

シテ謠「しづやしづ、(序ノ舞)ワカしづやしづ、賤の苧環くりかへし、地謠昔を今になすよし
もがな。あまりに舞の面白さに、時刻をうつして進まぬもありけり。又は判官の武勇に
恐れて、よし義經をばおとし申せと、詮議を加ふる衆徒も有りけり。さる程に、時移つ
て、主君も今は忠信が、謀にて難なく遙に、落し申しつ、心しづかに願成就して都
へとこそ歸りけれ。

籠太鼓

梗概

清次といふ者科人となりて入牢せしめられしが、牢を破りて失せしかば、其妻捕へられて、夫の在所を責め問はれしに、狂氣となりて時守の太鼓を打つ。その物哀れさにつひに、夫妻の罪を免さるゝ事を作る。(四番目)

シテ 清次妻 ワキ 松浦某 狂言 從者

科人—私に敵を討ちたればなり

牢者—牢に囚はせて入牢せしむること

ワキ詞「是は九州松浦の何某にて候。さても某召しつかひ候關の清次と申す者、他郷の者と口論し、念なう敵をば討つて候。さりながら科人の事にて候間、やがて牢者させて候。彼の者大剛の者にて候間、番の事かたく申しつけばやと存じ候。いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキ詞「彼の者大剛の者にてある間、番の事堅く仕り候へ。狂言詞「畏つて候。いかに申上げ候。清次が今夜牢を破りぬけて候。ワキ詞「何と清次が牢よりぬけたると申すか。言語道斷の事。さてこそ以前より堅く申し付けてあるに、さやうに油斷仕り

落居—落着なり

てあるぞ。さて彼のものの子はなきか。狂言詞「いや子はなく候。ワキ詞「妻はなきか。狂言詞「それは御座候。ワキ詞「さあらばいそいでその女をつれてきたり候へ。狂言詞「畏つて候。シテ詞「科人を召し籠められ候上は、女までの御罪科はあまりに御情無なうこそ候へ。ワキ詞「いかに女。さても汝が夫の清次、今夜牢を破り失せぬ。夫婦の事なれば知らぬ事はあるまじ、眞直に申し候へ。シテ詞「もとより賤しき者なれば、我が身の助かり候をこそ喜び候べけれ。わらはにはかくとも申さず候ほどに、夢にも知らず候。ワキ詞「いやく何と申すとも知らぬ事はあるまじ。まづく落居の有らん程、夫の代りに牢者させ、誰その在所を糺さんと、上歌地謡今の女を引き立てよ、今の女を引き立てよ、急ぎ牢者になすべしと、さもあらけなき人心、情なしとは思へども、殺害の科をのがれえぬ、報のほどぞ無慙なる。報のほどぞ無慙なる。ワキ詞「やあいかに汝は女に向ひ何事を致すぞ。その野者けなるによつて清次をも牢より遁いてあるぞ。所詮今よりは鼓をかけて、一時づつ時を打つて番を仕り候へ。

包めども古今集の歌末句涙な
りけり

シテ、サシ監けにや思ひ内にあれば、色は外にぞ見えつらん。包めども袖にたまらぬ白玉は、人を見ぬ目の涙かな。

道狭き一肩身の狭きこと

狂言「いや言語道断。牢中の女が狂氣になりて候。やがてこの由の中さうあるにて候。いかに申し上げ候。牢中の女か以ての外狂氣仕り候。ワキ「是は真にてあるが。狂言「さん候。ワキ「あら不便や立越え見うするにて候。やあいかにか女何故さやうに狂氣してあるぞ。シテ「何故狂氣するぞと承る。諸人の心の花ならば、風の狂する故もあるべし。況んや偕老同穴と、契し夫もゆくへ知らで、残る身までも道狭き、なほ安からぬ牢の内、思ひの闇のせんかたなさに、物に狂ふは僻事か。ワキ「けにくく夫の別れ牢者の思ひ、一方ならぬ身のなけきに、物に狂ふはことわりなり。さりながら、いづくに夫の在處を、知らせばやがて呼びとつて、汝は牢より出すべし真直に申し候へ。シテ「是は仰せとも覺えぬものかな。たとひ夫の在處を知りたればとて、あらはし夫を失ふべきか。その上夫の在處を、夢現にも知らぬものを。ワキ「やさしき女の言事かなと、詞手づから牢の戸をひ

西樓に云々一宵原文時の詩句に西樓月落花間曲中殿燈殘竹裏音とあるを引く花の間一僅の間の意

異國にも云々一蘇東坡の長夜默座敷更鼓などを云ふか時守の云々一萬葉集に時守の打鳴す鼓よみ見れば時にはなりぬあはぬもあやしを管へて引く

らき、はや是までぞとく出でよ。シテ「御志はありがたけれども、夫に代れるこの身なれば、この牢の内をば出づまじや。諸是こそ形見よなつかしや。地「無慙や我が夫の、身に代りたる牢の内、出づまじや雨の夜の、盡きぬ名残ぞ悲しき。西樓に月落ちて、花の間も添ひ果てぬ、契ぞ薄き燈の、残りてこがるよ、影はづかしきわが身かな。ワキ「言語道断。かよるやさしき事こそ候はね。この上は夫婦ともに助くるぞ疾く出で候へ。シテ「かほどに情ましまさば、始めよりかく憂き目を見せ給ふべきか。諸さるにてもわがつまはいづくにあるらん、なう心が亂れさむらふぞや。一聲亂るよは、柳の髪か春雨の、地「涙に咽ぶ心かな。シテ「なうくこれなる鼓は何のために懸けられて候ぞ。ワキ「あれこそ時守の時を知る相圖の鼓よ。シテ「面白く。異國にもさる例あり。かやうに鼓を懸けて時を守りしこともあり。その心を得て古き歌に、諸時守の打ちます鼓聲きけば、時にはなりぬ君は遅くて。地「遅くも君が來んまでぞ。シテ「なうこの鼓を打つて心が慰みたる候。ワキ「やすき間の事いかやうにも打つて慰め候へ。シテ「鼓の聲も音

娥皇女英二人は舜の后妃なり舜の崩せしを悲しみて湘浦に死す
六つの鼓一六つは午後六時五つは八時四つは十時九つは十二時なり

にたてよ、地謡「なく鶯の青葉の竹、シテ謡「湘浦の浦や娥皇女英、地謡「諫鼓苔むすこのつどみ、シテ謡「うつよもなやななつかしや。上歌地謡「鼓の聲も時ふりて、鼓の聲も時ふりて、日も西山に傾けば、夜の空の近づく、六つの鼓打たうよ。五つの鼓いつはりの、契あだなる妻琴の、引き離れいづくにか、わが如く忍音の、やはらく打たうよや、やはらやはら打たうよ。四つの鼓は世の中に、四つの鼓は世の中に、戀といふ事も恨といふ事も、なき習ひならば、獨物は思はじ。シテ謡「九つの、地謡「九つの、夜半にもなりたるや。あら戀しわが夫の、面影に立ちたり、うれしやせめてけに、身がはりに立ちてこそは、二世のかひもあるべけれ。この牢いづる事あらじ、なつかしのこの牢や、あらなつかしのこの牢。

ワキ謡「この上は諏訪八幡も御知見あれ、夫婦ともに助くるぞはや疾く出で候へ。シテ謡「けにこの上はさればとて、御僞はよもあらじ、まことは夫の在所、筑前の宰府に知る人あれば、そなたへ行きてや候らん。ワキ謡「いしくも隠さず申したり。詞しかも今年わが

親の、十三年に當りたれば、謡科ありとても助舟の、シテ謡「松浦の川や西の海、ワキ謡「彼の國ちかき、シテ謡「極樂の、地謡「彌陀誓願の誓かや。科を助くるあはれみの、あらありがたの御慈悲や。

ワキ地謡「やがて時日をうつさず、やがて時日をうつさず、かくれし夫を尋ねつよ、もとの如くに歸りゐて、結ぶ契の未久に、松浦の川や二世の縁、けにありがたき心かな。けにありがたき心かな。

松浦一待つを掛

錦戸

梗 錦戸太郎(國衡)主君義經に背きて頼朝に従はんとせしを弟
 概 の和泉三郎(忠衡)亡父秀衡の遺命黙止し難しとて應ぜざり
 しかば太郎遂に弟を討ち滅す事を作る。(四番目)

シテ 和泉三郎 ツレ 三郎妻
 ワキ 錦戸太郎 立衆 大勢

空しく成りて一秀衡は文治三年卒す
 金打せさせ一乃の鐙を鳴らして誓約せしむるこ
 不和にならせ給ふにより、判官殿は親にて候者を御頼み有り、是まで御下向候間頼まれ申し候處に、御運の盡きさせ給ふにや、親にて候者空しく成りて候。その際に我等を近づけ、君に心變り申すなと、堅く申しつけ金打せさせて候。尤もその儀違變なく候處に、いかなる者の申し候やらん、我等君に心變り申す由を聞召し、日々に出仕申すといへども、更に御對面もなく候間、この上は力及ばぬ事と存じ候處に、頼朝より御教書をなされ、

泰衡一伊達次郎といふ

急ぎ参るべき由を度々仰せられ候程に、泰衡我等は同心仕り、はや頼朝へ参るべきに定めて候。いまだこの由を三男和泉の三郎に申さず候間、只今和泉が館に行き、かやうの事をも談合せばやと存じ候。
 ワキ詞「いかに案内申し候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「某が参りて候。シテ詞「や、こなたへ御出で候へ。さて只今の御出では何のためにて候ぞ。ワキ詞「さん候、只今参ること餘の儀にあらず、さて我等口々に出仕申し候へども、更に御對面もなく候間、此上は力及ばぬ事と存じ候處に、頼朝より御教書をなされ、急ぎ参れとの御事にて候程に、泰衡我等同心し、はや頼朝へ参るべきに定めて候が、御分は何とか思ひ給ひ候ぞ。シテ詞「仰せ畏つて承り候ひぬ。我が君も人の申しなしにて、一旦の御恨事にてこそ候らめ、その上御遺言の事にて候間、只思召し御止り候へ。ワキ詞「申すところはさる事なれどもさりながら、我等他門へ参らばこそ、世の人口もあるべけれ、同じ主君に仕へん事、何の苦しう候べき。只々同心し給へとよ。シテ詞「いや頼朝への御忠節、我が君の奉公になるべからず。

世の人口一世間の非難同じ主君一同に源家に仕ふるこ

その上今まで頼まれ申す、主君に心を引きかへて、敵とならせ給はんは、御兄弟のたとへに入るべからず。一家の恥は如何ならん。ワヤ調「さてはおことは承引あるまじきか。シテ調」恐れながら、身に於いてまことに、同心申しがたし。ワヤ調「いやく御身は詞を巧み宣へども、順儀の法は違ひたり。シテ調」いや順儀を存する身なればこそ、親の遺言背かぬなり。ワヤ調「それは何とて正しき兄の言事をば聞き給はぬぞ。シテ調」仰せを背くと承れども、親の遺言承引なきは、不孝の科にてましますや。ワヤ調「不孝の科は數多あり。調」汝は兄の言事を、シテ調「承引なきは主君の命、ワヤ調」その外親子、シテ調「兄弟の、地誦」互の論は槻弓の、互の論は槻弓の、力及ばぬ事なれば、是までなりや今ははや、兄と思ふな弟とも、見る事さらに有るまじと、座敷を立つて錦戸は、歸る心ぞあさましき。歸る心ぞあさましき。

シテ調「言語道斷の事にて候ものかな。まづく妻にて候者を呼び出し、此事を申し聞かさばやと存じ候。いかに渡り候か。ツレ調」何事にて候ぞ。シテ調「まづ此方へ渡り候へ。さても

槻弓一盡きを掛

我が君の御運こそ末にならせ給ひて候。ツレ調「そも我が君の御運の末にならせ給ひたるとは、何と申したる御事にて候ぞ。シテ調」さん候、我が君御對面なき事を、錦戸泰衡無念に思ひ、兄弟はや敵となり、某にも同心せよと宣へども、まづ案じても御覽せよ、今まで頼まれ申す主君に心を引きかへて、親の遺言背かん事、弓矢取つての恥辱なるべし。さればある詞にいはいはく、賢人二君に仕へず、貞女兩夫にまみえずと、地誦「この理を聞く時は、男女によるまじや。殊に弓馬の家に生れ、二人の主君には、いかでか仕へ申さん。

シテ調「や、何と申すぞ。某同心せざる事を錦戸泰衡無念に思ひ、只今討手に向ふと申すか。あら何ともなや、某が事は親の遺言にて候程に、一足も落つる事は候まじ。不覺を見えんも口惜ければ、御身は何方へも御忍び候へ、ツレ調「實にく敵は寄せ來たる、いかに心は猛くとも、諸女の身にて候へば、思ひ切らせたまひたる、御身の障ともなるべきなり。まづく妾ともかくも、自害に及び候べし。御心安く御覽じ置きて、討死めさ

賢人云々史記田單傳に忠臣不事二君烈女不更二夫の意男女によるまじや一忠貞の道は男女の別なしとの意

れ候へ。シテ詞「けに健氣なる言事かな。さらば自害に及び給へ。ツレ詞「承りて候とて、心づよくも夕日の影の、シテ謡「西に向ひて、シテ、ツレ謡「手を合せ、地謡「彌陀佛助け給へと祈念して、助け給へと祈念して、心づよくも自害せんと、思ひ定めたる、夫婦の身こそ哀なれ。その時腰刀を、抜き持ちて立ちより、我も是にて腹切らん、御身も自害し給へと、いへば刀を請け取りて、胸のあたりに突き立てよ、よろしくと倒れ伏しければ、和泉は死骸に取りつきて、泣くより外の事ぞなき。泣くより外の事ぞなき。(中入)

後ワキ「一聲謡「藤波のかよれる、松の梢をば、嵐やよせて散らすらん。ワキ詞「いかに和泉の三郎確に聞け。水は逆さまに流るるものか。順逆二列の境に迷ひ、我とその身を失ふなり。恨みと更に思ふべからず。謡「尋常に腹切り給へ。シテ詞「何錦戸の討手とや。ワキ詞「なかの事。シテ謡「あら珍しや、詞「いでく、對面申さんと、物の具取つて肩にかけ、大太刀追取り櫓にあがり、大音あけて名のるやう、謡「君親ふたつは二體の義、君を重んじ親子の孝行、賢人無雙の弓取に、かへつて兎角の仰せは如何に。あら腹立や無念やな。

二體の義—優劣なき義理

ワキ詞「いやく、兎角の問答は無益、謡「はや討ちとれや兵と、地謡「下知を加ふる下よりも、下知を加ふる下よりも、我も我もと面々に、結橋や堀の埋草、沈めつゝ乗り越え乗り越え、斷岸によせつけて、喚き叫んで攻めたりけり。シテ謡「われながら兄弟に、地謡「矢を放さんは恐れなれども、さりながら是は又、主君のために捨てん命、何かは科ならん。惜しからぬ我が身なり、疾く寄りて討てや人々。その時寄手の勢は、その時寄手の勢は、我真先にと進みけるに、和泉は少しも騒がずして、もとより好む大太刀を、柄長におつとり延べて、多勢が中に割つて入りつゝ、左右に合ひ附けて、鎧を削つて戦ひけるに、一人とすよめる武者の、甲の眞向ちやうと打ち、引く太刀にて諸膝かけず流れて、かつばと倒れてどうと伏す。シテ謡「今は是までなり、地謡「さこそは妻も待つらんものを、いで追つ付かんと言ふ儘に、物の具取つてかしこに投げすて、日頃念ぜし持佛堂の、床の上へ走りあがり、淨土に迎へ給へと、腹十文字にかき切り、床よりもころび落ちけるを、敵の兵おり重つて、追つ立て行くこそ哀なれ。

合ひ附けて一切り合ふこと

妻もまつらん—自害せる妻の後を追はんとなり